

令和4年度
文部科学省委託調査

令和4年度
地域との協働による高等学校改革推進事業における
成果検証事業

調査研究報告書

一般社団法人まなびのみなと
令和5年3月31日

目次

第1章 調査全体のサマリー	5
1-1 調査概要と分析手法	
1-1-1 リサーチクエスチョン	
1-1-2 本調査のゴール	
1-1-3 前提となる仮説	
1-1-4 調査概要	
1-1-5 分析手法	
1-1-6 成果検証項目	
1-1-7 匿名化について	
1-2 調査結果	
第2章 調査概要	8
2-1 調査目的	
2-2 調査内容（プレ調査と本調査）	
2-3 分析手法	
2-4 対象校一覧	
2-4-1 令和元年度対象校	
2-4-2 令和2年度対象校	
第3章 運営指導委員会（アドバイザーボード）の構成	15
3-1 運営指導委員及びアドバイザーについて	
3-2 運営指導委員会及び個別相談について	
3-2-1 第一回運営指導委員会について	
3-2-2 第二回運営指導委員会について	
3-3-1 第一回個別相談について	
3-3-2 第二回個別相談について	
第4章 プレ調査	25
4-1 プレ調査①	
4-1-1 調査目的	
4-1-2 調査方法	
4-1-3 調査内容	
4-1-4 調査対象	
4-1-5 調査時期	
4-1-6 プレ調査①の結果	
4-1-7 辞退校について	
4-1-8 学校規模について	
4-2 プレ調査②.....	27

4-2-1	調査目的	
4-2-2	調査方法	
4-2-3	調査内容	
4-2-4	調査対象	
4-2-5	調査時期	
4-2-6	プレ調査②補足	
4-2-7	プレ調査②結果	
4-2-8	高校魅力化評価システム比較表	
4-2-9	プレ調査②の補足データ	
4-2-10	個別指標達成率比較表	
4-3	プレ調査③	29
4-3-1	調査目的	
4-3-2	調査方法	
4-3-3	調査内容	
4-3-4	調査対象	
4-3-5	調査時期	
4-3-6	学校選定理由	
4-3-7	インタビュー項目（プレ調査前）	
4-3-8	プレ調査③実施後のインタビュー項目	
第5章	本調査	40
5-1	本調査① 高校魅力化評価システム・個別指標調査	
5-1-1	調査目的	
5-1-2	調査方法	
5-1-3	調査内容	
5-1-4	調査対象	
5-1-5	調査時期	
5-1-6	高校魅力化評価システムについて	
5-1-7	事前研修	
5-1-8	事後研修	
5-2	本調査② 高校魅力化ループリック	46
5-2-1	調査目的	
5-2-2	調査方法	
5-2-3	調査内容	
5-2-4	調査対象	
5-2-5	調査時期	
5-2-6	高校魅力化ループリック（学校用）	
5-2-7	高校魅力化ループリック（都道府県教委用）	
5-2-8	著作権について	

5-3	本調査③ インタビュー調査.....	48
5-3-1	調査目的	
5-3-2	調査方法	
5-3-3	調査内容	
5-3-4	調査対象	
5-3-5	調査時期	
5-3-6	個別インタビューの方法について	
5-3-7	対面インタビューについて	
5-3-8	インタビュー一覧	
5-3-9	インタビューアール紹介	
第6章	分析・考察.....	52
6-1	高校魅力化ルーブリックによる実践ノウハウ集	
6-1-1	地域との協働によるカリキュラム開発の検証に係るインタビュー結果	
6-1-2	各学校の実施体制の検証に係るインタビュー結果	
6-1-3	管理機関及びコンソーシアムの実施体制、支援体制の検証	
6-1-4	ルーブリックによる実践ノウハウ集	
6-1-5	ルーブリックによる実践ノウハウ集 活用方法	
6-1-6	ルーブリックによる実践ノウハウ集 補足	
6-2	持続可能な体制づくりにおけるパターンとプロセス.....	64
6-2-1	持続可能な体制づくりに係る項目のインタビュー結果	
6-2-2	持続可能な体制づくりにおけるパターン	
6-2-3	持続可能な体制づくりにおけるプロセス	
6-3	事業による現場の変容及び事業への意見（事業の改善点）.....	67
6-3-1	事業による現場の変容に係る項目のインタビュー結果	
6-3-2	事業による現場の変容にかかる項目のインタビュー集計	
6-3-3	事業前から事業後の変容（一例）	
6-3-4	事業への意見（事業の改善点）	
6-4	コーディネーターの実態・影響と求められる役割.....	69
6-4-1	コーディネート機能についてのインタビュー結果	
6-4-2	コーディネーターの実態・影響とコーディネーターに求められる役割	
6-4-3	コーディネーターを活用するための効果的な要素	
6-5	高校魅力化ルーブリックと高校魅力化評価システムの比較.....	71
6-5-1	令和元年度校の高校について	
6-5-2	令和2年度校の高校について	
6-5-3	令和元年度・令和2年度校の高校の共通項	

第7章	全国サミットと成果検証報告会	72
7-1	全国サミット	
7-1-1	全国サミットの概要	
7-1-2	当日の参加者について	
7-1-3	発表要旨と運営指導委員講評	
7-1-4	参加者アンケートの結果	
7-2	成果検証報告会	96
7-2-1	成果検証報告会の概要	
7-2-2	当日の参加者について	
7-2-3	発表要旨と運営指導委員講評	
7-2-4	参加者アンケートの結果	
第8章	事業の意義と残された課題	108
8-1	本事業の意義と成果について	
8-1-1	本事業の意義と成果	
8-2	残された課題	
	参考文献	110

添付資料

- ・ 高校魅力化ルーブリックによる実践ノウハウ集
- ・ 高校魅力化ルーブリック<学校側>（著作権あり取扱注意）
- ・ 高校魅力化ルーブリック<管理機関側>（著作権あり取扱注意）

参考資料

- ・ 6-3-1 事業に夜現場の変容に係る項目のインタビュー結果
- ・ 6-4-1 コーディネート機能についてのインタビュー結果

第1章 調査全体のサマリー

1-1 調査概要と分析手法

1-1-1 リサーチクエスチョン

生徒の資質・能力の伸長を目指し、学びの土壌を豊かにするための高等学校における効果的な要素、地域における効果的な要素はなにか。

1-1-2 本調査のゴール

調査を通して、協働体制構築の過程における高等学校と地域の変化から、協働体制構築にとって重要な要素を抽出し、今後、同様の取組を行う学校の参考となる事例を提示する。

1-1-3 前提となる仮説

生徒の成長（資質・能力の育成）の促進には、各学校の取組の活性化が必要であり、そのためには、社会に開かれた教育課程の実現が必要となる。社会に開かれた教育課程の実現にはこれまでより一層、組織的で深い地域との協働体制が必要となる。

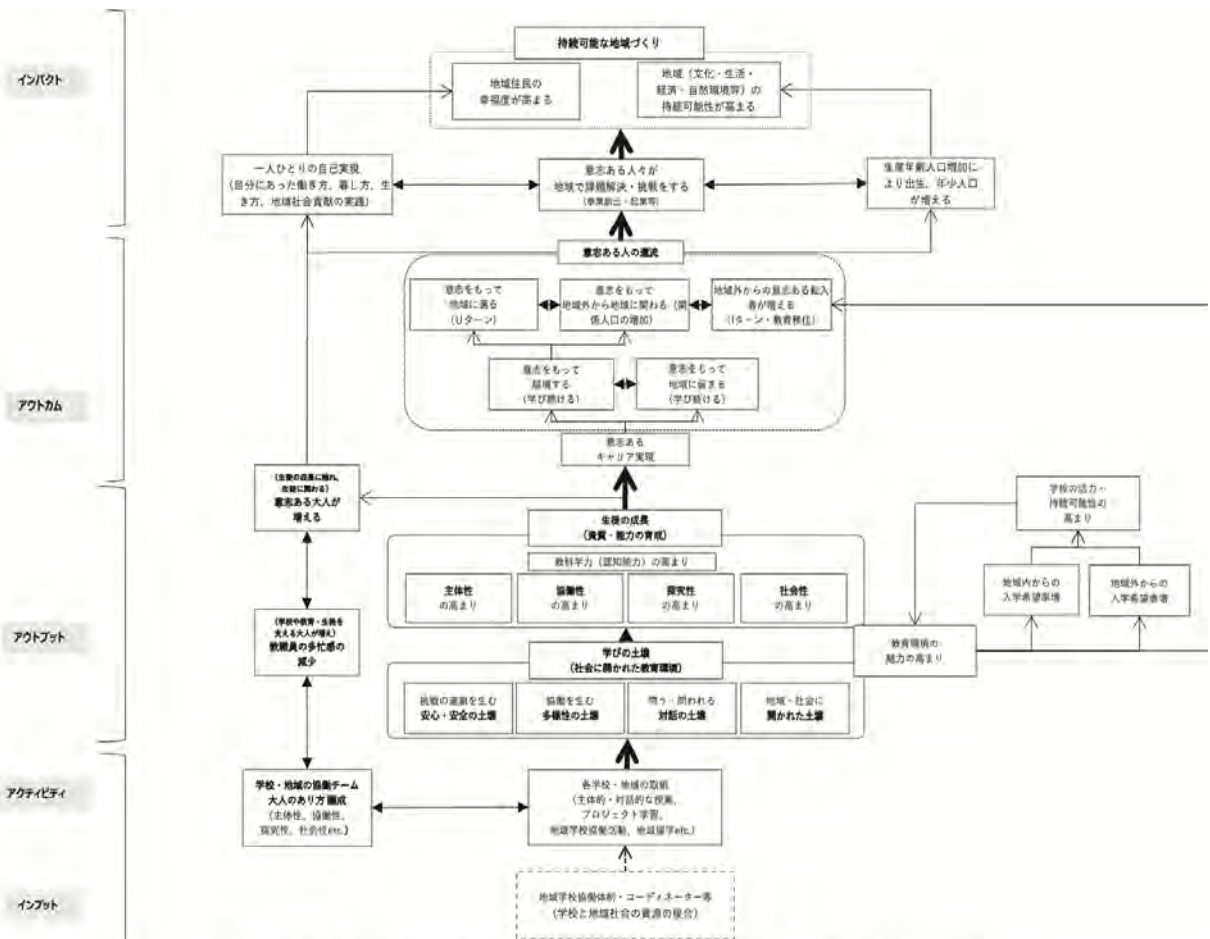


図3：高校と地域の協働による持続可能な人づくり・地域づくりの流れ

文部科学省2019年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業PDCAサイクル構築のための調査研究「高校と地域をつなぐ人材のあり方に関する研究会」報告書11ページより引用

1-1-4 調査概要

調査研究は、3つのプレ調査と3つの本調査からなる。プレ調査は、学校の選定及び調査範囲の焦点化のために実施する。それぞれの調査は、調査研究期間の都合上、順番ではなく並行して行っているものもある。調査は、個別指標調査と共通指標調査からなる。

1-1-5 分析手法

インタビュー分析手法は、KJ法を参考にして分類し、解釈を行う。分析時間が限られていることもあり、調査開始前に分析手法を仮決めして調査を開始した。そして、プレ調査後に分析手法を決定した。

1-1-6 成果検証項目

委託要項における成果検証の4項目は以下の通りである。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1、地域との協働によるカリキュラム開発の検証2、各学校の実施体制の検証3、管理機関及びコンソーシアムの実施体制、支援体制の検証4、各学校における PDCA サイクルの確立状況の検証 |
|---|

1-1-7 匿名化について

調査研究に係る高校名については、文部科学省からの依頼により、個人情報等の観点から名前を伏せてナンバリングをしている。また、インタビュー調査におけるインタビューのテキストについては、学校名及び学校が特定される地名等を伏せたり、方言を標準語に置き換えていたりするため、原文とは若干ニュアンスが異なる場合がある。

1-2 調査結果

リサーチクエスションとゴールに対する調査結果は、次の通りである。また、本事業の意義と成果も併せて記載する。詳細は、第6章を参照されたい。

○ 高校と地域との協働を推進する各主体の効果的な取組・要素

1 高校側	2 地域側	3 管理機関
<p>①地域協働の活動や体制づくり（コンソーシアム構築）に着手する前に、学校の方針（つくりたい学校像やスクールポリシー等）の設定及び、推進する学校内の体制づくりを行うこと</p> <p>②地域側にとっての学校と関わるメリットを考えること（win-win関係構築）</p> <p>③コンソーシアムやコーディネーターなど、新しい組織や人の役割が明確であること</p>	<p>①高校生が「社会（地域）の構成員」の一人という認識を持つこと</p> <p>②「地域のために」だけでなく、「生徒のために」の視点も持つこと</p> <p>③連携・協働に際し、教員の業務過多を認識して業務負担軽減を考慮すること</p>	<p>①学校と地域の協働の主体は学校にあることを認識し、一方的なコミュニケーションではなく、双方向（伴走的）的な関わりをすること</p> <p>②管理機関でなければできないこと（モデル校、成功失敗の分析、普及等）は、なにかを常に考えて現場の支援をすること</p> <p>③予算確保のためにできることはすべて取り組んだのかを自問すること（資源を投入）</p>

○ 本事業の意義と成果

1. コンソーシアム構築によって、**教員の教育観が変容するとともに、生徒の成長を感じ、地域協働の必要性を認識したことで、地域との協働が飛躍的に推進された**という担当者が多い。
2. コンソーシアム構築によって、**地域の意見が学校経営に反映され、生徒が成長するだけでなく、生徒の進路実現まで繋がった。**
3. コンソーシアム構築は、関わる**地域側の意識の変容まで及び、地域側にとって高校を捉え直す機会となり、高校を核とした町づくりの必要性認識が深まった。**
4. コーディネーターの配置により、**教員の業務負担が軽減されるとともに、カリキュラム開発や学校内体制、協働体制構築・運営に好影響が確認された。**但し、コーディネーターに求められる役割や機能は、学校や地域によって異なる。
5. **専従のコーディネーターは、学校現場にとって重宝されているが、学校との関わり度合いが低いと必要性も認識されていない。**
6. 探究活動や地域協働を推進すればするほど、**すべての学校で現場の教員に負担が増えている。**現場では、業務の削減や圧縮等、自治体や県がCN等の人材に対しての財源を確保するといった工夫がみられるものの、効果は限定的であるため、国の制度として、**業務の軽減や必要な人員配置**などが待たれる。

第2章 調査概要

本調査研究は、文部科学省から委託を受けて実施したものである。尚、後述する運営指導委員会の委員及びアドバイザーから随時指導・助言を受けて進めた。調査概要は以下の通りである。

2-1 調査目的（公募要領より）

Society5.0 の到来に向けて、高等学校は、子供たち一人一人がSociety5.0 を生き抜くために必要な力を身に付けることが求められており、平成30年3月に公示された新しい高等学校学習指導要領では、子供たちに求められる資質・能力を社会と共有する「社会に開かれた教育課程」の理念の下、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を推進することとされている。

これらを踏まえ、未来を切り拓くために必要な資質・能力を身に付けるとともに、地域への課題意識や貢献意識をもち、将来、地域で地域ならではの新しい価値を創造し、新たな時代を地域から分厚く支えることのできる人材（以下「地域人材」という。）の育成に向けて、高等学校及び中等教育学校の後期課程（以下「高等学校等」という。）において、各教科等の内容を社会の在り方等と結び付けて深く理解する等、地域の課題をもとに体験と実践を伴った探究的な学びを実現するため、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」を創設し、地域との協働による高等学校教育改革推進事業指定校（以下「地域協働推進校」という。）における高等学校教育改革を推進する取組について、その成果について検証を行い、高等学校等における地域との協働による教育改革のPDCAサイクルの構築及び運用を推進する。

2-2 調査内容（プレ調査と本調査）

調査は、プレ調査及び本調査を実施した。調査開始時は、調査期間の関係上、プレ調査を行う予定はなかったが、第一回運営指導委員会にて委員の指摘・助言により、プレ調査を実施することとなった。プレ調査及び本調査の概要については下記の通りである。

調査概要・プレ調査

	目的	調査方法	内容	対象
プレ調査 ①	R元年度指定校の9校を選定する。	個別指標調査	(1) R元年度からR3年度まで3年間高校魅力化評価システムを実施し、R4年度は実施予定ではない高校を抽出(56校から18校へ)尚、プロ型は高校数が少なくこの限りではない。 (2) 学校規模を踏まえて選定する。 (3) 成功事例及び困難事例を構成調書・事業計画書・成果報告書を参考に類型ごとに2校ずつ選定する。	R元年度56校
プレ調査 ②	本調査に向けて成功事例と困難事例を抽出する。	魅力化評価システム(過去データ)	(1) 対象校から過去の高校魅力化評価システムのデータ提供を受ける。 (2) 事業目標で設定した項目とそれに関連する高校魅力化評価システムの事業開始時と事業終了時の生徒の資質・能力の伸長を比較する。 (3) 生徒の資質・能力の伸長幅の最大と最小の高校を類型ごとに抽出して、R元年度6校、R2年度8校を選定する。	R元年度9校 R2年度14校
プレ調査 ③	本調査の調査範囲を焦点化し、インタビュー調査項目を検証する。	インタビュー調査(オンライン)	(1) 伸長幅の大きい高校と小さい高校各1校(R2年度)に対して、オンラインでインタビュー調査を行う。(現場への負担を考え、本調査③で行う高校以外を選定する。) (2) 本調査の調査範囲を焦点化するために、学校側、コンソーシアム側(地域)、 県教育委員会側 の3者へインタビューを実施する。	R元年度2校

調査概要・本調査

	目的	調査方法	内容	対象
本調査 ①	生徒の資質能力の変化、大人(学校)の変化、大人(地域)の変化を検証する。	魅力化評価システム+個別指標調査	生徒の資質能力の変化や大人・地域の学びの土壌の状態・変化を可視化する。(事前研修及び事後研修を実施する。) 尚、魅力化評価システムの結果は、各学校の構想調書や事業計画書、事業報告書を用いて分析・検討する。	R元年度9校 R2年度14校
本調査 ②	各学校の実施体制の検証と管理機関及びコンソーシアムの実施体制、支援体制の検証を行う。	魅力化ループリック	(1) 学校経営・協働体制・資源確保・現場支援の4つのカテゴリーから構成される高校魅力化ループリックのセルフ診断を各校に実施してもらう。 (2) 提出にあたっては、コンソーシアムでの合意を図ることをお願いする。	R元年度9校 R2年度14校
本調査 ③	本調査①で測れなかった部分を質的調査によって可視化する。	インタビュー調査(オンライン・訪問)	(1) R元年度の対象校のうち6校、R2年度のうち6校の計12校についてインタビューを行う。 *12校うち2校訪問予定(R元年度1校、R2年度1校) (2) インタビューは学校担当者及び各校のコンソーシアムのメンバー及び、 管理機関担当者の三者 に行う。	R元年度6校 R2年度6校

2-3 分析手法

分析手法：インタビュー分析手法は、KJ法を参考にして分類し、解釈を行う。

分析手法の選定にあたっては、分析期間が1ヶ月程度と限られた時間であったこと、「効果的な要素を抽出する(リサーチクエスション)」ために要素を抽出し類型化しながら傾向を見取ることができることから、KJ法を活用することが適切であると判断した。

分析手法については、本調査③のインタビュー調査において、36人へインタビューを行ったものについて、テキストごとに分けて、注目すべき語句をKJ法を参考にして分類し、解釈を加えることとした。解釈を1つに限定すると捨象される内容もあるため、解釈は3つとしている。

(例) 学校担当者

番号	質問番号	発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	解釈1	解釈2	解釈3
31	1	発言者2	はい。まずはこの事業を推進推進するにあつた。研究開発推進委員会という委員会を作りました。基本的には農業科と家庭科の先生でこの事業は動かすことにはなるんですけど、ただ学校には普通教科の先生もたくさんいらっしゃるんで、学校全体としてこの事業を進めなければいけないという観点から普通教科の先生もこの委員会の方に入らせていただきまして、農業科、家庭科、普通科の教員20名から構成される委員会です。	研究開発推進委員会という委員会を作りました。/ 農業科、家庭科、普通科の教員20名から構成	学科横断のプロジェクトチームを設置することで、学校全体の取組となるように後押し		
32	1	発言者1	20名、はい、多いですね				
33	1	発言者2	開発推進委員というのを設置しました。				

解釈の分類については、「効果的な要素<工夫、進め方、心構え(マインド)>」や「アイデア(斬新な取組、工夫ポイント)」を中心に分類した。

2-4 対象校一覧

令和元年度校の地域協働推進校は、全51校（地域魅力化型：公立19校、私立1校、グローバル型：公立14校、私立6校、プロフェッショナル型：公立11校）である。令和2年度の地域協働推進校は、14校（地域魅力化型6校、グローバル型4校、プロフェッショナル型4校）である。

2-4-1 令和元年度対象校

類型	設置者	設置種別	学校名
地域魅力化型	岩手県	県立	大槌高等学校
	宮城県	県立	石巻西高等学校
	山形県	県立	新庄北高等学校
	山形県	県立	小国高等学校
	埼玉県	県立	小川高等学校
	神奈川県	県立	山北高等学校
	福井県	県立	鯖江高等学校
	長野県	県立	白馬高等学校
	静岡県	県立	熱海高等学校
	静岡県	私立	浜松学芸高等学校
	三重県	県立	飯南高等学校
	兵庫県	県立	生野高等学校
	島根県	公立	松江東高等学校
	島根県	公立	平田高等学校
	岡山県	公立	和気閑谷高等学校
徳島県	公立	城西高等学校神山分校	
愛媛県	公立	三崎高等学校	

	熊本県	公立	上天草高等学校
	宮崎県	公立	飯野高等学校
	宮崎県	公立	宮崎南高等学校
グローバル型	北海道	道立	登別明日中等教育学校
	山形県	私立	九里学園高等学校
	山形県	県立	山形東高等学校
	千葉市	市立	稲毛高等学校・附属中学校
	東京都	私立	昭和女子大学附属昭和高等学校
	福井県	県立	丸岡高等学校
	長野県	県立	長野高等学校
	静岡県	県立	榛原高等学校
	愛知県	私立	星城高等学校
	愛知県	私立	名古屋国際中学校・高等学校
	三重県	県立	宇治山田商業高等学校
	兵庫県	県立	柏原高等学校
	奈良県	県立	畝傍高等学校
	奈良県	私立	育英西中学校・高等学校
	和歌山県	私立	和歌山信愛中学校・高等学校
	岡山県	県立	岡山城東高等学校
	香川県	県立	高松北高等学校
	愛媛県	県立	松山東高等学校

	高知県	県立	室戸高等学校
	宮崎県	県立	五ヶ瀬中等教育学校
プロフェッショナル型	栃木県	県立	宇都宮工業高等学校
	長野県	県立	飯田OIDE長姫高等学校
	岐阜県	県立	岐阜工業高等学校
	愛知県	県立	愛知商業高等学校
	三重県	県立	四日市工業高等学校
	京都府	府立	京都すばる高等学校
	島根県	県立	出雲農林高等学校
	山口県	県立	田布施農工高等学校
	愛媛県	県立	小松高等学校
	福岡県	県立	香椎高等学校
	熊本県	県立	天草拓心高等学校

2-4-2 令和2年度対象校

類型	設置者	設置種別	学校名
地域魅力化型	東京都	都立	八丈高等学校
	福井県	県立	三国高等学校
	兵庫県	県立	村岡高等学校
	島根県	県立	矢上高等学校
	高知県	県立	大方高等学校
	長崎県	県立	松浦高等学校
グローバル型	福島県	県立	ふたば未来学園中学・高等学校
	山梨県	県立	甲府第一高等学校
	兵庫県	県立	兵庫高等学校
	島根県	県立	隠岐島前高等学校
プロフェッショナル型	秋田県	県立	金足農業高等学校
	福井県	県立	科学技術高等学校
	兵庫県	県立	佐用高等学校
	島根県	県立	情報科学高等学校

第3章 運営指導委員会（アドバイザーリーボード）の構成

本調査は、委託内容の通り、運営指導委員会を設けて学術的視点からの指導・助言に基づき、定量的及び定性的な検証を実施した。また、文部科学省が指定する研究員をアドバイザーとして位置づけ、定期的に助言を得ながら調査研究を進めた。

3-1 運営指導委員会及びアドバイザーについて

	氏名	所属・肩書き
運営指導委員	中村 怜詞 氏	島根大学大学院教育学研究科 准教授
	樋田 大二郎 氏	青山学院大学 教育人間科学部 教授
	藤岡 慎二 氏	産業能率大学 経営学部 教授
	廣田 拓也 氏	株式会社ソフィアクロスリンク 代表取締役社長
	岡本 尚也 氏	一般社団法人 Glocal Academy 代表理事
	篠原 岳司 氏	北海道大学大学院教育学研究院 准教授
アドバイザー	大西 圭介 氏	帝京科学大学教職センター 特任助教

3-2 運営指導委員会及び個別相談について

調査方法及び分析手法、分析について指導・助言を頂いた。全委員が集まって協議する運営指導委員会を2回開催し、各委員の専門分野の指導助言を頂く個別相談を2回開催した。

3-2-1 第一回運営指導委員会について

下記は、第一回運営指導委員会の委員ご意見要旨及び対応表である。第一回目は、調査の方向性や妥当性についてご意見を頂いた。尚、ご意見要旨には、当日意見及び後日意見も含む。

項目	番号	委員ご意見要旨	対応
個別指標について	1	協働の文化の度合いや進捗を測るために、関係者をどのように、そしてどのくらい巻き込んでいるかを調査してほしい	個別指標調査及びインタビュー調査にて項目追加を検討
	2	①目標等の設定背景、経緯②目標設定変更点やその理由③初期目標と変更した目標の共有範囲④目標がカリマネに与えた影響（構想調書や他の提出された書類記載内容では読み取れない事業の中身）	個別指標調査及びインタビュー調査にて項目追加を検討
令和元年度9校選定について	3	学校規模を踏まえた選定を希望	9校選定時の基準に追加
	4	コンソーシアムを中心とした関係組織、関係者の関係性の比較を希望	関係者の関係性比較は、個別指標調査、魅力化評価システム、インタビュー調査にて量的質的に調査を検討

	5	成功事例と困難事例（挑戦したが困難となった事例）を対象校に選定、多様な高校選定を希望	成功事例と困難事例を9校選定時の基準に追加、及びインタビュー調査における選定においても基準として追加
アンケート調査・訪問調査について	6	本事業・コンソーシアムが地域に与えた影響を調査してほしい	インタビュー調査にて項目として追加を検討
	7	高校と基礎自治体側の関係性について調査してほしい	インタビュー調査にて、基礎自治体側を対象とするか検討、プレ調査③のインタビュー調査にて、学校側・地域側（コンソーシアム）に加えて、基礎自治体も対象とする。
	8	オンラインインタビュー実施を希望	オンラインインタビューにて実施。但し、全23校（学校側及びコンソーシアム側）は時間的に難しいため、令和元年度6校（各類型ごとに成功事例と困難事例）、令和2年度6校（各類型ごとに成功事例と困難事例）で実施
その他	9	本事業におけるリサーチクエッションとそれぞれの調査の関係性を明確化	調査概要資料に反映
	10	理論モデルではなく、事例モデルを目指してほしい	事例モデルを目指して調査全体を再構築
	11	インタビュー調査は次の3点を中心に内容を決定してほしい (1) 仮説や理論がなぜ成立するか内的な過程を明らかにする (2) 仮説や理論がなぜ成立するか外的な過程（環境変数）の目星をつける (3) 自分たちが持っている仮説が不十分だと感じる時に新たな仮説（の可能性）を得る	インタビュー調査にて項目として追加を検討
	12	インタビュー調査の分析は、M-GTAやKJ法等を検討してほしい	インタビュー調査の分析手法として検討
	13	魅力化ルーブリックの内容には、教員が従来から大切にしてきた事柄を明示的に加えてほしい。例えば、思いやり、やさしさ、人間的暖かさ、仲間意識、所属意識、前向き志向、倫理観・社会観など	再委託先と修正について協議
	14	本調査において、どのようなことをゴールとして、なにを明らかにするのか仮説立ての必要性	本事業の調査項目の見直し、仮説を立てて検証する
	15	5つの調査の連動性、各調査の関係性の明確化（個別指標調査は、共通指標調査で見えない部分の補完が有効。事業評価であれば、ある一定の共通指標での検証が必要）	本事業の調査項目の見直し、仮説を立てて検証する
16	9校選定は、判断基準が難しいため、プレ調査の実施を検討	プレ調査は、時間が限られているため構成調査及び事業計画書、事業報告書などにて実施する。（運営指導委員会でも個別指標調査で、ある程度の選定は可能だという意見もあった）	

	17	調査項目によって、言葉の定義が異なるため、言葉の統一等対応が必要	学校現場へ調査を実施する際に、言葉の定義について明示する
--	----	----------------------------------	------------------------------

3-2-2 第二回運営指導委員会について

第二回運営指導委員会は、主に成果検証報告会に向けて分析の妥当性についてのご意見を頂いた。尚、ご意見要旨には、当日意見及び後日意見も含む。

番号	委員ご意見要旨	対応
1	協働体制構築について、学校が主体で動くことを共有しているが、自治体や産業界が主体となって動くこともありえるのではないか。それらのパターンが存在するということを認識してもらい、パターン化を検討してもらいたい。	本調査では、学校以外が主体となる場合はほぼなかったためパターン化まではできない。但し、発表内容には適切な根拠を示す。
2	他事業含めて、採択のセレクションの精度を高めるために現場ができること、文部科学省がやるべきことがあれば、共有してもらいたい。	インタビュー内容の「応募の経緯」を分類分け、分析したが、共有できる内容は見受けられなかった。
3	調査を現場に生かしてほしい。今後活用できるようにしてほしい。	本調査で明らかになったことを現場が活用できるようにノウハウ実践集を作成した。
4	ノウハウ実践集では、「行動」だけではなく、「価値観」も重要なので、その部分もループリックに反映してもらいたい。「心構え」ともいえる。	「心構え」という言葉で統一して反映した。
5	本調査では、分析はされているが因果関係の解析まではできていない。調査としては十分なので、今後の課題として、効果的なカリキュラム開発と学校内体制の因果関係等について、どちらが先なのかなど検証してもらいたい。	残された課題の項目に明記。調査終了後もその点を調査できるように、調査研究活用について文部科学省へ申請書を提出した。
6	「飛躍的に伸びた」という表現があるが、どのようなことを論拠としているのか。地域との体制なのか、教員の教育観の変容なのか。具体的にわかっている範囲を共有してほしい。	報告書に具体的な教員の変容内容を追加。
7	ノウハウ実践集における項目の因果関係は重要ではないかもしれない。それよりも、どこが起点になっているかがわかれば、それを共有してもらいたい。	本調査では明らかにできていない。例えば、協働体制構築においてコンソーシアム設置が起点となっている学校もあれば、生徒の発表会を設定したことが起点となっている。いくつかのパターンがあるが、共有できるものはない。
8	どうなったかという成果よりもプロセスが大切。取組の始めと終わり、成果をどう評価するかという問題の他に、今取り組んでいる先生たちが、何に関心を持ち、スタートの段階ではどういった関心や期待、今はどのような関心や期待に移行しているか、その点を共有してほしい。	報告会では、スタート時の状況を語る教員のテキストを紹介することを追加。
9	報告書に、各学校が自分の地域の状況をどう捉えたか。自分の地域にどういった資源があると感じているか。自分の地域に、活躍してもらうために。協働の促進の関係で言うと、地域資源をどの方向で活用しようとしたか、を入れてもらいたい。	報告書の「事業による現場の変容」及び、「本事業の意義と考察」に追加。
10	この事例だったら、こういうコーディネーターが必要ということが明らかになったのであれば提示してもらいたい。	報告書に「コーディネーターの実態・影響とコーディネーターに求める役割」を追記。本調査では、この事例ごとに最適なCNの働き方については、明らかになっていない。但し、専業CNの希望は8割弱だった。

11	<p>校長のリーダーシップに関心がある。地域協働を推進する上で、校長、校内体制や、カリキュラム開発が必要。校長がどうしていくべきか、成果が波及していく部分にも影響する。コーディネーターを採用する、雇用するなかで、校長の機能を補完するコーディネーターもこれまでにいた。コーディネーター不要で自分でどんどんできる人もいる。今回の事例ではどうだったか。</p>	<p>本調査では、校長インタビューを実施していない。校長先生についてのコメントは、校長先生がいたから進んだという担当者が1人、校長先生によって進まなかったという人が1人だった。それよりも、ミドルリーダーが何人いるのかは聞いている。小規模校だと2、3人、中～大 8-10人という発言があった。</p>
----	---	---

3-3-1 第一回個別相談について

第一回個別相談は、プレ調査実施前後に行った。内容は主に、プレ調査の妥当性及び、成果検証4項目ごとに設定した仮説に対する助言であった。また、プレ調査③のインタビューで行った仮説の検証を踏まえて、インタビュー項目の精査を行った。以下、検証項目別の調査に反映もしくは参考にした委員ご意見要旨である。

調査項目	テーマ	委員ご意見要旨
①地域との協働によるカリキュラム開発の検証	・報告書のどのような点を見れば、効果的なカリキュラム開発をしているといえるのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムマネジメントの丁目一番地は、目標が明確に設定されているか、そしてその目標が関係者に共有されているか。 ・カリキュラム開発で確認すべきは、①開発したカリキュラム（教育目標に紐づいているか、内容が具体的か、育てたい力を発揮するプログラムとなっているか）②教育効果、③教員の価値観は変わったか④組織的となっているか（属人的ではないか）現実的にこれから新しくアンケートをとることは不可能なので、インタビュー項目にて対応が妥当。 ・教科横断授業は3つのレイヤーがある。学校の取組になっているかは評価の対象となる（①知識、コンテンツ②授業の仕方や見方・考え方③授業への生徒のスタンス・視点）
		<ul style="list-style-type: none"> ・出口のグラデュエーションポリシーから、そのために中身を考えるカリキュラムポリシー、1、2、3年の各学年でどのようにその力を身につけていくのが考える順番。 ・それをどう評価するのか、評価したあとにどのようにカリキュラムを修正するのか、そこまでできていると効果的なカリキュラム開発といえる。
②各学校の実施体制の検証	・報告書のどのような点を見れば、内実の伴った実施体制といえるのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・目標の変更でPDCAが回っているかは、議事録として残っているかで判断してはどうか。議事録がなければ改竄の可能性もある。 ・学校内の実施体制について、実務会議（日々の進捗確認や生徒の様子共有等）があるか、会議の内容・役割を関係者が把握・認識できているかはポイントの一つ。・普段から非公式の場で事業の話をしているかどうかは学校内体制の充実度がわかるポイントの一つ。（報告書ではわからないためインタビューで検討） ・管理職のどちらかが事業にコミットしているかどうかを確認する。管理職インタビューがないので、現場に管理職の構想や想いを聞く。担当教員から管理職の話が出てきたら、管理職がコミットして取り組んでいると判断できる。 ・担当教員以外の教員が本事業をどのように認識しているかは一つのポイント。 ・ミドルリーダーが何人いるかを確認するときは「中心になっている先生は何人くらいいますか？」という質問がいいかもしれない。
③管理機関及びコンソーシアムの実施体制、支援体制の検証	・報告書のどのような点を見れば、機能するコンソーシアムの実施体制を確立しているといえるのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・異動で地域との関係性を作り直すときに、作り直してしっかりできる学校の工夫は検証できたらよい。 ・「透明性」があるかどうかはポイント。北海道の名寄高校のように関係者に情報が共有されているか。高校が担っていた部分を商工会等に共有されていないと機運も高まらない。 ・議事録の公開だけではなく、発表会や町の広報などで広報や周知に工夫がみられるかどうか、それが「透明性」があるかどうかの一つの基準。 ・学校と行政で閉じられている場合は、高校と地域の協働が進んでいるとはいえない。 ・熱心な管理機関を見分けるには、学校長と地元自治体が協議できることは当然として、管理機関が、政策面でお金や人をどの程度、メニューで支援しているか。・コンソーシアムの意見が前に進む取組となっている、もしくは、実務に落とし込まれているかどうかポイントの一つ。 ・事業スタート時に関係者で対話をしながら進める。ビジョンへの認識の共通理解を検証してほしい。 ・コンソーシアムが機能しているしていないを見抜くには、コンソーシアムが生徒の資質能力の伸長に繋がっているか（コンソーシアムの関係性や距離感で）、生徒も理解できているか、認知しているのか、学校と地域側がスムーズな連絡のやりとりができているのか。 ・コンソーシアムメンバーをお願いする内容を委員になる前に伝えていくかどうか（教育目標が共有されているかどうか） ・教員を介さない生徒と地域のコミュニケーションの場合に、ルールが規定されているのかも一つのポイント。
④各学校におけるPDCAサイクルの確立状況の検証	・目標設定シートにおける達成度合いをどのように読み取ればいいのか ▶100%を超えている高校がよくやっているとは限らないのではないか ▶事業開始前に同じ目標を立てている場合はどのように評価するのか	<ul style="list-style-type: none"> ・PDCAは新しいことを生み出すというよりも問題点を修正するという意味合いが強いため、それを頭に入れてインタビューをすること。 ・個別指標調査は、抽象度合いの高い目標を掲げてなんとなくできたような気がするというのが一番ダメ。PDC AのCとAを明確にしているかどうか。その仕組みがあるかどうか。 ・目標変更については、CとAが機能していれば、目標変更であっても問題なし。 ・結局生徒がどうなったのか、生徒のエピソードはよい。ただ、エピソードがどのように教員に共有されているかまで見る必要がある。
	・目標設定シートで目標内容をどのように評価するのか	<ul style="list-style-type: none"> ・目標数の数が多い少ないは評価できない。目標の数は関係なく、目標が具体的かどうか、評価ができるほど具体的かどうかポイント。また、校内の目標の共有具合、共有して理解できているかどうか。 ・PDCAの確認で、「改善点の共有は、いつだれがやっていますか？」をインタビュー項目に検討。

	<p>▶どのような目標が適切なのか、どのような目標が対話から生まれているといえるのか</p> <p>▶目標数はどのように評価するのか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・PDCAはKGI・KPIとの繋がり（ロジックモデルで構造化）がわかっていないと回らないので、その繋がりがあるか整理できているかを評価する。（民間企業では当たり前に行われていること） ・ビジョンの共有浸透具合は、報告書では読みにくいですが、各個人の取組が事業の中のどの部分に位置付けされているかを確認することである程度把握可能。 ・先生が孤立無縁ではなく、助け合いの状況にあるかどうか。
--	--	---

3-3-2 第二回個別相談について

第二回個別相談は、すべての調査が終わり、分析を進めている初期の段階で実施した。以下の表は、分析の方向性について、各委員の専門領域から頂いたご助言・ご指導である。尚、赤字は分析において反映もしくは参考にした部分である。

<ul style="list-style-type: none">・項目ごとの次の打ち手になる因子が明らかになることはよいこと。但し、項目は実体的には繋がっていることが予想される。その時に、どの項目がどの項目の条件になっているのかまでわかればよい。・例えば、カリキュラム開発において、1から2になったところと3になった学校について、なぜ伸びが生まれたのか。1⇒2、1⇒3他の項目で差が出ているところはなにかという場合は、ここが影響しているのではないかと仮説を立てることができる。（企業のハイパフォーマンス分析に類似）・それができれば、カリキュラムを良くするためには、校内体制を整備しなければいけないといった因子が明らかとなり対策も可能となる。・例えば、協働体制であれば、リーダーシップを持って引っ張っていかないとまくいかない実感に対して、人材要件が見えてくるかもしれない。・マイスターハイスクール事業において、完全に校長がリーダーシップもイニシアチブも発揮している場合もあれば、産業界がリーダーシップを発揮している場合もある。・現場の担当者がリーダーシップを発揮して、管理職は承認のみの場合もある。その場合は、管理職にリーダーシップがあるとはいえない。・それらが顕在化している場合はいいが、全くない場合は、誰が初めの一步を踏み出すのだろうか。普及という意味ではどのように取り組みを始めたらいいか、その一歩目についても検討してほしい。
<ul style="list-style-type: none">・ループリックの各項目の要素にノウハウを位置付けることには意義がある。・学校、地域、管理機関がどのように結びついたらいいのかが明らかになるといい。・子供たちの学びをどのように変えていくかを設定したときに、コンソーシアムの意義がどこにあったのか、コンソがあったことでどのような影響があったのかまで明らかになるといい。・自己診断が厳しいが故に、困難事例になる部分もあるため、成功事例と困難事例の見分けは確かに難しい。・検証を終えて、今後に向けて魅力化ループリックを修正・更新していく機会として捉えるのもいいのではないかと。・効果的な要素として抽出されてくるところが、どのように他の学校にとって普遍的な指標になるかは要検討。規模よっての分類分けはよい。・公表資料については、各学校が見るべきところがわかりやすいように留意して公表するように。・貴重な資料として広く公表できるように、事業検証を公表していく道筋もしっかり考えてほしい。・普通科高校改革等やマイスターハイ事業への波及を考えたときに、根拠をしっかりと提示することは忘れないでほしい。・一般教員レベルでコンソーシアムの意義をどのように伝えるのか、教員側にどのような変化があったのか、アンラーニングのきっかけがあるのかなど、わかりやすく伝える工夫を。・現場の工夫でワークライフバランスについての有効な事例は紹介してはどうか。社会教育で吸収するなど。・学校教育だけの議論だけではなく、社会教育の視点も追加についても要検討。・地域協働については、教員が引率していなくても学校外の取組を単位認定する事例もあるので、それも参考にするように。
<ul style="list-style-type: none">・管理職の主体性が事業に直結するため、管理職が理解していたのか、把握していたのか、管理職インタビューを今後どうするかを検討、管理職・担当者・管理機関の共通認識、問題点の相違・ループリックの各項目の要素に、主体はだれかを整理する必要があるのではないかと <p>◇次の事業に向けての改善点</p> <ul style="list-style-type: none">・継続の要因はどのような点にあるのか、コンソーシアムの継続の仕方や協働体制の継続・現場がこの事業を進めるために、文部科学省、教育委員会のどのようなサポートが必要なのか・事業を進めるうえで、中間チェックや振り返りの場があるのか、あるとしたらどのような場であれば、途中で修正ができるのか・文科省がサポート機能をもつとしたらどのような機能か、業務的に難しいようなら、気をつけるポイントマニュアルや手引き書の周知で代用・うまくいった学校では、体制と中身の混在しないように。学校内の体制の話なのか教員の資質・能力の話なのか、区別して考えること・教員の変化、変容、指導力、教育観にどのような変化があったのか・体制づくりはした2校があるとしたら、教員が前向きかどうかで差が生まれるのではないかと

<ul style="list-style-type: none"> ・担当者レベルでは変わっていたのかもしれないが、学校全体の動きになっているかなど、事業としてどのような価値があったのかは報告してほしい ・例えば、文科省事業において、学びのスタイルの革新や子どもたちの自主性の促進があるとしたら、この事業がどのように後押しをしたのかは報告してほしい ・魅力化ルーブリックは、0の地域との協働が全くなかった学校もあるだろうから、そこから1になった事例がもしあれば、それも取り上げてほしい ・高校と地域の協働が今後全国の高校に広がる、裾野を広げていききっかけとなるような事業だったかどうかを報告してほしい ・文科省の提示する4つの検証項目とは別に、現場の人たちも聞きたい、取釜本人も重要だと思う点も織り交ぜてほしい ・現場の食いつきの良さ、広がりがあるか、学校内の裾野を広げることができるか、そのような観点で選択するがいいのではないか ・成功事例、困難事例については、ここまでデータが出てきたので、成功、失敗というふうに出す必要はない ・取釜が現場感覚を持っているのを、生かして焦点を絞るところを入れる。 ・Mmpdcaといったキャッチフレーズを用いて現場に伝えることもやり方の一つ ・持続可能な体制については、どういうオプションがあるのか。どのような実践をしているとそのオプションへ到達できるのかを提示してほしい。 ・地域の中に高校があることの意味や意義がひと昔前の進学実績を出す学校とは変わってきている。地域の人たちに与える影響の面や産業の活性化の面も踏まえて、本事業の振り返りをしてほしい。 ・分類方法は、「KJ法を使って」ではなく、「KJ法を参考にして」という言い方が正しい。
<ul style="list-style-type: none"> ・ブレ調査と本調査における、成功事例と困難事例のずれが何によって生まれたのか。 ・隠岐島前と金足農業の伸びの原因は何か。 ・先生の教育観が構成的であると、生徒の成績に影響を与えると言う論文がある。その部分で見ることも重要。14の問いに対する答えを、比較してみると良い。また、隠岐島前と金足農業、そしてその他の高校に違いはあるか。 ・カリキュラムの比較で、どの項目が伸びていたかを見ていく。全般的な伸びか、特定な項目の伸びか。それがシラバスと対応しているか。カリキュラムとの繋がりが見えると良い。 ・カリキュラムでは、単純に伸ばしたい資質に対して、その力を発揮できる機会をカウントする。 ・可能であれば、教員がどんな声かけをしていたか、を見たい。先生の行為と伸びている力の関係があるか。 ・コンソーシアムの方が授業に対してどの程度の理解を持って入っていたかは、カリキュラムがきちんと作られているかをみる指標となる。 ・可能であれば、点数の学力との相関が見られると良い。
<ul style="list-style-type: none"> ・ルーブリックの要素を見つけられたのはいいが、相関関係と因果関係（行動したからうまくいった、うまくいったから行動した）、確認をした方がいい。 ・第三の因子が生まれている可能性がある、その因子をどうやって捉えるのか、それがわからないのにノウハウに使えるのか。 ・因果関係などは、仮説を立てて論文を探していくという手順で確かめていく。 ・アカデミックではないとしても、学術的な論文等で担保できるものはした方がよい。 ・傾向はわかるが、相関関係や因果関係がわからなければ、行動をおこすときに行動までが見えない。 ・ルーブリックの数字を使って分析したときに、妥当性はあるのか、上がった、下がったならよいが数字の根拠がない。 ・1-2、1-3のように数字がいくつあがったというより、大幅に上がった下がったならよい、点数によりパイアスがかかる場合がある。 ・コーディネーターが第三の因子になるのであれば、そこを分析しないとイケない。 ・因果関係、相関関係を突き止めるのは難しいが、因果関係と相関関係の仮説としては伝えることはできる。それだけでも研究といえる。 ・最後に研究課題を整理する。 ・事前に仮説を立てているのであれば、調査を通じてその仮説がどうだったのかは言える。 ・ルーブリックの要素を戦略（行動計画）か戦術（工夫改善）かをわけることも検討する。 ・もともと仮説がある場合は何を以て検証できるか決めているはずなので、仮説の検証をする。 ・今回出た結果から行動パッケージとして、こんなことをしたからうまく行ったのではないか？という、仮説の提唱をする。（今後、各校で実証の実施や検証を促すなど）

- ・共通項と言うのではなく、「○校中・△校で、同様の発言が見られた」という事実ベースの書き方をするのが良いのではないか
- ・分類については「これまでの意味・意義のある取組（具体的に）」、「考え方（マインド）・姿勢（スタンス）」については、重なりがあるので、統合するのが良いのではないか。
- ・教育研究は、結果をすぐには判断しづらい特性があるため、最後の言い方・まとめ方には留意すること
- ・オープンデータ化については、当事者と文科省の許可を得る必要がある。
- ・仮に、半分の先生が言っていたとしたら、共通項と言ってもよいのではないか。
- ・共通項というのではなく、事実ベースでの書き方をする。
- ・12校中1校しかないが、これは転用可能なアイデアだと判断する場合も共有してもいいのではないか。
- ・学びの土壌を豊かにするための要素は何か、と、問いの効果的な要素はなにか、を頭に入れて紐づけること。
- ・高校の多くがこれを言っていますよと、伝えられるのが良い。

第4章 プレ調査

本調査の前にプレ調査を実施した。プレ調査は3つ行い、本調査に向けた学校選定や調査範囲の焦点化の役割を果たした。

4-1 プレ調査①

4-1-1 調査目的

令和元年度指定校56校から、本調査を行う9校を選定する。

4-1-2 調査方法

1. 高校魅力化評価システム（令和元年度～令和3年度）
2. 構想調書及び成果報告書の比較

4-1-3 調査内容

令和元年度指定校56校から本調査候補校18校を抽出する。※令和元年度から令和3年度までの3年間、高校魅力化評価システムを実施し、令和4年度は実施予定ではない高校を抽出した。尚、プロフェッショナル型は指定校数が少ないためこの限りではない。

1で抽出した18校を、学校規模ごとに分けする。

構成調書・事業計画書・成果報告書から読み取ったPDCAサイクルの状況、生徒の資質・能力の伸長、学校規模を鑑み、類型ごとに3校ずつ選定する。

4-1-4 調査対象

令和元年度対象校 56校

4-1-5 調査時期

令和4年8月～令和4年10月

4-1-6 プレ調査①の結果

上記、調査内容によって、類型ごとに3校を対象校の候補として設定した。また、調査依頼を断られたことを想定して予備の候補も選定した。尚、アドバイザーの大西研究員が前年度ヒアリング調査を行った3校については、学校側の負担を鑑み、候補から除外した。

類型	R1	R2	R3	PDCA サイクル (報告書からの読み取り)	学校規模	対象校	予備
地域魅力化型	○	○	○	地域連携のための委員会を設置。また、全職員が分担して、研修会に参加し、情報共有を行っている。教員が主体となり、外部の力を活用しながら、着実に進めている。令和2年度から地域おこしを活用したコーディネーター配属も進めている。	小		
	○	○	○	地域連携のための委員会を設置して、高校内で地域連携のカリキュラムを進める体制を構築している。また、小・中・高を貫く会議があり、町教委や地域が支え、教員が中核を担って推進している。	中		
	○	○	○	教職員中心で、コーディネイトを担っているように見受けられる。うまくサイクルが回っていない印象。(成果と課題より)	大		
	○	○	○	コーディネーターの役割は小さい。協議2~3回、意見交換、指導、助言レベル。学校内に、地域協働のための事務局を設置し2名で運営している。R2年度から、探究研究部が校務分掌として発足している。サイクルは回っているが、教職員のマンパワーによるもので、地域の力はあくまで協力レベルに留まっている。	中		
	○	○	○	探究の授業づくりに関心に取り組んでいる。一方で、地域の関わりは協力レベル。そのことについて課題意識も持っている。	小		
	○	○	○	地域おこし協力隊がコーディネーターとして参画している。地域とパイプ役になっている。学校の成果目標である能力の伸長で顕著な向上が見られる。報告書の成果と課題から、PDCAが主なり、学校としての取り組む課題のレベルが向上している。	小		
	○	○	○	報告書では、課題が多く、関係者はあまりうまく進んでいないという認識。生徒の資質・能力の伸長が鈍い。	小		
	○	○	○	サイクルが回り、生徒の資質・能力の伸長が見られる。コーディネーターを配属している。	小		
グローバル型	○	○	○	地域連携が進んでいる。サイクルは回っている。地域おこし協力隊OBが、コーディネーターとして入っている。地域学校協働活動支援員、カリキュラム開発等専門家も専務で配置。	小		
	○	○	○	高いレベルでPDCAが回っている。発信、まとの充実。生徒の探究への意識変化のデータをしっかり分析している。	小		
	○	○	○	コーディネーターがアドバイザーのような形。成果報告書からPDCAサイクルを読み取るのが難しい。	中		
プロフェッショナル型	○	○	○	教員が主体となり、地域協働のための委員会を組織して、プログラム作成をおこなっている。地域学校協働推進員は、助言的な役割を果たしている。	中		
	○	○	○	学校内で体制づくりを行い、PDCAサイクルを回している。進学校であり、国公立大学の進学者数が多い。	大		
	○	○	○	地域協働のための推進室を設置(教員1名担当者)コーディネイト機能を果たしている。学科長会議を実施し、定例で地域協働の進捗状況を専門教育部部長、各学科長、専門科主任、地域協働推進室担当で会議。専門科会議も定例で開催している。PDCAサイクルが回っている。	大		
	○	○	○	地域の企業経営者が、地域協働推進員につき、社会教育と学校教育のつなぎ役を果たしている。専門科のカリキュラムと、地域協働を進捗させたものを構築している。PDCAサイクルが回っている。生徒の資質・能力も伸長も見られる。	小		
プロフェッショナル型	○	○	○	様々な地域・企業人材が入っているが、スポットであり、全体の連携体制が整っていない。	小		
	○	○	○	コンソーシアムを二つ作っている。カリキュラム開発等専門課、地域協働学習実施支援員を兼任で、地域企業の経営者がコーディネーターとして入っている。地域協働のための新しい分掌にて定例mtgを行い、進捗管理を行なっている。個別指導において、生徒の資質・能力の向上に高い成果を出している。	小		
	○	○	○	PDCAサイクルが回っている。目標設定と検証をしっかりと行なっている。次年度の改善し、校内体制が明確に構築されている。地域学校協働推進員を資料館の館長が勤めている点がユニークである。	中		

備考1 上記候補より、各類型から3校ずつ、計9校を調査対象校として選定する。

備考2 大西研究員の研究対象校であり、ヒアリング調査が実施されている学校は、学校側の負担を鑑み候補としない。

4-1-7 辞退校について

令和元年度のプロフェッショナル型の対象校1校が調査研究を辞退した。新しい候補校を選定・依頼する時間の確保が困難であったため、事務局と相談のうえ、令和元年度校は8校で調査を進めることとした。

4-1-8 学校規模について

学校規模については、小規模・中規模・大規模などの区分が法令等で定められているわけではないため、本調査においては、1学年につき、3学級以下を小規模、4学級から9学級までを中規模、10学級以上を大規模として区別した。

4-2 プレ調査②

4-2-1 調査目的

本調査に向けて対象校を成功事例（生徒の資質・能力の伸長幅最大）と挑戦事例（生徒の資質・能力の伸長幅最小）を抽出する。

4-2-2 調査方法

高校魅力化評価システム（過去データ）

4-2-3 調査内容

プレ調査①で選定した令和元年度指定8校と令和2年度指定14校から過去の高校魅力化評価システムのデータ提供を受ける。

事業目標で設定した項目とそれに関連する高校魅力化評価システムの事業開始時と事業終了時の生徒の資質・能力の伸長を比較する。

生徒の資質・能力の伸長幅の最大と最小の高校を類型ごとに抽出して、令和元年度6校、令和2年度8校を選定する。（令和2年度校はプレ調査③の2校を含むため6校ではなく、8校としている。）

4-2-4 調査対象

令和元年度8校、令和2年度14校

4-2-5 調査時期

令和4年度10月～令和4年度11月

4-2-6 プレ調査②補足

過去の高校魅力化評価システムの結果がない高校については、令和4年度実施している場合は代用、実施していない場合は、比較していない。

4-2-7 プレ調査②結果

高校魅力化評価システムの②学習環境の平均値を比べて順位づけをした。

令和元年度 対象校

【地域魅力化型】

No. 1

項目	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	順位	順位 (全体)	順位 (類型別)
①学習活動	46.0%	67.7%	61.5%	53.6%	57.2%	23		
②学習環境	72.1%	74.4%	79.3%	67.7%	73.4%	9	5	2
③生徒の自己認識	65.6%	74.1%	62.5%	56.4%	64.7%	18		
④生徒の行動実績	63.2%	65.7%	59.8%	42.4%	57.8%	22		

①学習活動③生徒の自己認識④生徒の行動実績は低い値となっているが、②学習環境の値は高い。

No. 2

項目	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	順位	順位 (全体)	順位 (類型別)
①学習活動	57.2%	78.1%	71.9%	68.2%	68.9%	11		
②学習環境	75.4%	78.4%	81.1%	75.7%	77.7%	4	3	1
③生徒の自己認識	66.6%	78.0%	64.4%	65.5%	68.6%	12		
④生徒の行動実績	67.8%	67.7%	63.4%	47.9%	61.7%	20		

④生徒の行動実績は低い値となっているが、②学習環境は類型別で最も高い値となっている。

No. 3

項目	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	順位	順位 (全体)	順位 (類型別)
①学習活動	62.1%	76.9%	71.0%	57.2%	66.8%	14		
②学習環境	64.9%	64.2%	71.6%	66.6%	66.8%	13	6	3
③生徒の自己認識	57.3%	68.7%	56.7%	57.1%	60.0%	21		
④生徒の行動実績	64.5%	59.8%	54.1%	43.2%	55.4%	24		

③生徒の自己認識と④生徒の行動実績は低い値となっている。一方で、②学習環境は、類型別で3位となっている。

【グローバル型】

No. 4

項目	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	順位	順位 (全体)	順位 (類型別)
①学習活動	72.9%	87.5%	88.2%	79.1%	81.9%	2		
②学習環境	79.7%	81.4%	83.6%	74.3%	79.8%	3	2	2
③生徒の自己認識	69.0%	80.5%	67.9%	62.8%	70.1%	10		
④生徒の行動実績	72.1%	76.8%	70.3%	46.1%	66.3%	15		

①学習活動②学習環境が高い値である。一方で、③生徒の自己認識④生徒の行動認識には繋がっていない。

No. 5

項目	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	順位	順位 (全体)	順位 (類型別)
①学習活動	64.2%	80.8%	76.5%	72.6%	73.5%	8		
②学習環境	82.6%	83.6%	87.0%	84.5%	84.4%	1	1	1
③生徒の自己認識	77.1%	84.7%	73.5%	71.0%	76.6%	5		
④生徒の行動実績	67.8%	68.3%	65.9%	53.9%	64.0%	19		

②学習環境がすべての高校の中で最も高い値である。①学習活動③生徒の自己認識も比較的高い。一方で、④生徒の行動実績の値は低い。

No. 6

項目	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	順位	順位 (全体)	順位 (類型別)
①学習活動	52.9%	78.8%	79.1%	48.6%	64.9%	17		
②学習環境	76.5%	84.9%	81.9%	59.9%	75.8%	6	4	3
③生徒の自己認識	74.9%	81.0%	72.5%	68.4%	74.2%	7		
④生徒の行動実績	72.6%	75.0%	73.2%	43.6%	66.1%	16		

②学習活動は高い値であり、③生徒の自己認識も比較的高い。一方で、①学習活動と④生徒の行動実績の値は低い。

【プロフェッショナル型】

No. 7

R2 (*R3実施なし)	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	順位	順位 (全体)	順位 (類型別)
①学習活動	51.8%	80.9%	79.2%	82.2%	73.5%	2		
②学習環境	75.7%	81.3%	81.9%	77.7%	79.2%	1		1
③生徒の自己認識	63.1%	76.1%	57.8%	61.4%	64.6%	5		
④生徒の行動実績	60.2%	67.5%	50.0%	38.6%	54.1%	7		

②学習環境が類型別では高い値である。①学習活動も同様にして高く、③生徒の自己認識④生徒の行動実績も比較的高い値である。

No. 8

R2 (*R3実施なし)	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	順位	順位 (全体)	順位 (類型別)
①学習活動	65.9%	79.8%	84.9%	47.4%	69.5%	3		
②学習環境	66.5%	77.6%	71.9%	54.3%	67.6%	4		2
③生徒の自己認識	62.5%	76.6%	63.0%	54.4%	64.1%	6		
④生徒の行動実績	64.4%	74.0%	44.2%	26.6%	52.3%	8		

②学習環境が類型別では高い値である。①学習活動も同様にして高く、③生徒の自己認識④生徒の行動実績も比較的高い値である。

令和2年度 対象校

【地域魅力化型】

No. 1

項目	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	順位
①学習活動	50.0%	80.2%	69.2%	56.4%	64.0%	29
②学習環境	75.3%	73.9%	77.5%	77.7%	76.1%	13
③生徒の自己認識	57.0%	69.2%	55.9%	64.1%	61.6%	30
④生徒の行動実績	66.5%	66.5%	52.2%	50.5%	58.9%	33

②学習環境はどちらかという高い値である。①学習活動③生徒の自己認識は低い値となっている。④生徒の行動実績はかなり低い値である。

No. 2

項目	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	順位
①学習活動	56.0%	75.2%	71.0%	65.6%	67.0%	25
②学習環境	74.2%	76.3%	79.4%	73.8%	75.9%	14
③生徒の自己認識	71.3%	79.5%	66.8%	64.7%	70.6%	19
④生徒の行動実績	71.8%	70.9%	68.2%	49.9%	65.2%	28

②学習環境はどちらかという高い値である。①学習活動③生徒の自己認識④生徒の行動実績は低い値となっている。

No. 3

項目	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	順位
①学習活動	59.7%	79.9%	72.8%	69.1%	70.4%	20
②学習環境	85.8%	84.6%	86.7%	87.2%	86.1%	3
③生徒の自己認識	74.3%	79.2%	70.4%	74.8%	74.7%	15
④生徒の行動実績	75.5%	75.8%	71.8%	67.3%	72.6%	16

②学習環境は高い値となっている。①学習活動③生徒の自己認識④生徒の行動実績はどちらかという低い値となっている。

No. 4

R4*参考	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	
①学習活動	58.3%	78.6%	64.4%	60.8%	65.5%	27
②学習環境	79.5%	83.6%	81.7%	80.7%	81.4%	5
③生徒の自己認識	70.1%	74.9%	70.1%	65.2%	70.1%	21
④生徒の行動実績	72.1%	75.0%	64.6%	52.3%	66.0%	26

②学習環境は高い値となっている。①学習活動③生徒の自己認識④生徒の行動実績は低い値となっている。

No. 5

R4*参考	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	
①学習活動	70.4%	89.7%	86.6%	78.4%	81.3%	6
②学習環境	81.3%	79.6%	81.0%	82.7%	81.2%	7
③生徒の自己認識	70.6%	75.5%	73.9%	68.8%	72.2%	17
④生徒の行動実績	74.6%	77.5%	66.9%	60.1%	69.8%	22

①学習活動②学習環境が比較的高い値となっている。③生徒の自己認識④生徒の行動実績は比較的低い値となっている。

No. 6 実施なし

【グローバル型】

No. 7 実施なし

No. 8 実施なし

No. 9 実施なし

No. 10

R4*参考	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	
①学習活動	73.7%	87.1%	78.0%	78.5%	79.3%	8
②学習環境	89.6%	93.4%	89.3%	91.9%	91.1%	1
③生徒の自己認識	69.0%	76.4%	73.0%	69.1%	71.9%	18
④生徒の行動実績	79.3%	78.0%	74.0%	76.3%	76.9%	10

②学習環境がかなり高い値となっている。どの観点も平均して高く、唯一平均で90%を超えている高校である。①学習活動も比較的高い。一方で、③生徒の自己認識④生徒の行動実績は比較的低い値である。

【プロフェッショナル型】

No. 11

R4*参考	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	
①学習活動	74.0%	83.5%	74.0%	75.4%	76.7%	11
②学習環境	88.5%	88.3%	90.5%	87.3%	88.7%	2
③生徒の自己認識	85.3%	84.0%	82.8%	82.2%	83.6%	4
④生徒の行動実績	82.7%	85.9%	82.4%	63.9%	78.7%	9

②学習環境がかなり高い値となっている。①学習活動と④生徒の行動実績も比較的高い。
③生徒の自己認識は、高い値とである。

No. 12

項目	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	
①学習活動	49.7%	67.8%	57.6%	49.0%	56.0%	35
②学習環境	77.1%	78.6%	80.8%	68.8%	76.3%	12
③生徒の自己認識	71.2%	76.6%	65.8%	64.2%	69.5%	24
④生徒の行動実績	62.5%	68.4%	62.8%	47.5%	60.3%	32

②学習環境はどちらかという高い値である。一方で、①学習活動③生徒の自己認識④生徒の行動実績は低い値である。

No. 13 実施なし

No. 14

R4*参考	主体性	協働性	探究性	社会性	平均	
①学習活動	46.1%	70.4%	57.9%	59.3%	58.4%	34
②学習環境	67.9%	70.9%	71.2%	69.1%	69.8%	23
③生徒の自己認識	58.4%	67.0%	61.2%	56.1%	60.7%	31
④生徒の行動実績	59.7%	59.2%	53.0%	35.8%	51.9%	36

②学習環境はどちらかという低い値である。①学習活動③生徒の自己認識④生徒の行動実績はかなり低い値である。

4-2-8 高校魅力化評価システム 比較表

前項の学習環境平均値をそれぞれの年度の学校ごとに順位づけすると次の表の通りである。

令和元年度

類型	No	学校規模	高校魅力化評価システム		
			②学習環境 (平均値)	順位(全体)	順位(類型別)
地域魅力化型	15	中	73.4%	6	2
	16	大	77.7%	4	1
	17	小	66.8%	8	3
グローバル型	18	小	79.8%	2	2
	19	中	84.4%	1	1
	20	大	75.8%	5	3
プロフェッショナル型	21	大	79.2%	3	—
	22	小	67.6%	7	—

学習環境は、グローバル型のNo. 19が最も高く、80%を超えている。次に、No. 18の値が高く、プロフェッショナル型のNo. 21と続く。順位は表の通りである。学校規模との相関は特に見られない。

令和2年度

類型	No	学校規模	高校魅力化評価システム		
			②学習環境 (平均値)	順位(全体)	順位(類型別)
【地域魅力化型】	1	小	76.1%	7	4
	2	中	75.9%	8	5
	3	小	86.1%	3	1
	4	小	81.4%	4	2
	5	小	81.2%	5	3
	6	小	—	—	—
【グローバル型】	7	中	—	—	—
	8	大	—	—	—
	9	大	—	—	—
	10	小	91.1%	1	1
【プロフェッショナル型】	11	中	88.7%	2	1
	12	中	76.3%	6	2
	13	大	—	—	—
	14	小	69.8%	9	3

データがない高校もあるが、グローバル型のNo. 10が最も高い値となっており、唯一90%を超えている。次にプロフェッショナル型のNo. 11と続き、地域魅力化型のNo. 3、No. 4、No. 5と続く。大規模校のデータがないため、学校規模との相関は判断できない。

4-2-9 プレ調査② 補足データ

高校魅力化評価システムを実施していない高校もあるため、学校選定を判断する基準として、補完的に個別指標達成率を比較した。各学校の各目標の達成率を集計し、平均を比較することとした。

4-2-10 個別指標達成率

令和元年度

類型	No	学校規模	構想調書 目標数	個別指標達成率（参考）		
				目標達成率 （%）	順位（全 体）	順位（類型 別）
地域魅力化型	15	中	8	290%	1	1
	16	大	12	100%	6	3
	17	小	15	140%	4	2
グローバル型	18	小	14	150%	3	2
	19	中	8	207%	2	1
	20	大	11	104%	5	3
プロフェッショナル型	21	大	6	0%	7	1
	22	小	9	0%	7	1

地域魅力化型のNo. 15が突出して高く、次にグローバル型のNo. 19の値が高い。続いて、グローバル型のNo. 18、地域魅力化型のNo. 17と続く。プロフェッショナル型のNo. 21とNo. 22は目標の達成についての記載が報告書に見られない。尚、目標数の平均値は10.3である。

令和2年度

類型	No	学校規模	構想調書 目標数	個別指標達成率（参考）		
				目標達成率 （%）	順位（全 体）	順位（類型 別）
【地域魅力化型】	1	小	8	75	10	5
	2	中	6	72	11	6
	3	小	6	128	2	1
	4	小	8	108	5	3
	5	小	11	123	3	2
	6	小	10	99	7	4
【グローバル型】	7	中	7	132	1	1
	8	大	6	90	9	3
	9	大	8	107	6	2
	10	小	7	—	—	—
【プロフェッショナル型】	11	中	26	94	8	2
	12	中	8	—	—	—
	13	大	17	—	—	—
	14	小	40	110	4	1

グローバル型のNo. 7が最も達成率が高い。次に地域魅力化型のNo. 3、No. 5、プロフェッショナル型のNo. 14と続く。尚、目標数の平均値は12である。6から40まで幅広く、目標数と達成率の相関は見られない。

4-3 プレ調査③

4-3-1 調査目的

本調査の調査範囲を焦点化し、インタビュー調査項目を検証する。

4-3-2 調査方法

インタビュー調査（オンライン）

4-3-3 調査内容

高校魅力化評価システムにおける生徒の資質・能力伸長幅の大きい高校と小さい高校各1校（令和2年度）計2校を選定し、オンラインでインタビュー調査を行う。（現場への負担を考え、本調査③で行う高校以外を選定する。）

本調査の調査範囲を焦点化するために、学校担当者、コンソーシアム委員、管理機関担当者の3者へインタビューを実施する。

4-3-4 調査対象

令和2年度指定校2校（地域魅力化型1校、プロフェッショナル型1校）それぞれの学校担当者、コンソーシアム委員、管理機関担当者の計6名。

4-3-5 調査時期

No. 4 地域魅力化型

- ・学校担当者 : 12月14日
- ・コンソーシアム委員 : 12月14日
- ・管理機関担当者 : 12月16日

No. 13 プロフェッショナル型

- ・学校担当者 : 12月15日
- ・コンソーシアム委員 : 12月7日
- ・管理機関担当者 : 12月12日

4-3-6 学校選定理由

No. 4

個別指標達成率は5位（類型別は3位）、高校魅力化システムは4位（類型別は3位）なので、上位でも下位でもなく本調査をする可能性は低い。また、個別指標及び高校魅力化評価システムのデータが揃っているため、これらの相関をインタビューによって浮かび上がらせることができる可能性がある。

No. 13

個別指標調査及び本システムの調査の情報がなく、本調査をする可能性が最も低い。また、報告書に目標設定シートを用いた振り返りがないため、目標設定シートの認識及び、独自の振り返りに対する考え方をヒアリングすることで、現場で目標がどのように共有されていたのかを知ることができる可能性がある。

4-3-7 インタビュー項目（プレ調査前）

インタビュー項目は、仮説をもとに成果検証の4項目を踏まえて、質問の意図を整理して設定した。学校担当者、コンソーシアム委員、管理機関担当者それぞれで質問を調整した。以下は、プレ調査前のインタビュー項目である。

学校側		
番号	質問事項	質問の意図
1	いつからこの事業の担当ですか。	前提の確認（事業継続の観点）
2	引き継ぎがあった場合、十分な引き継ぎがありましたか。そう思ったのはなぜですか。	前提の確認（事業継続の観点）
3	引き継ぎがなかった場合、本事業を次の担当に引き継ぐ時に留意する点は何ですか？またそれは、なぜですか？	前提の確認（事業継続の観点）
4	本事業への応募理由は何ですか。	前提の確認（事業開始）
5	本事業実施に向けて、学校内ではいつ頃、どのような場で話し合いがもたれましたか。	学校側の体制構築過程の把握（事業開始）
6	協働体制を推進するために、学校内の協働体制は？	学校側の体制構築過程の把握
7	事業応募当初の協働体制と現在の協働体制に変化はありますか。	協働体制の構築過程の把握
8	コンソーシアムを構築する際に、留意した点はありますか。	協働体制を構築するポイント
9	本事業を通じて、生徒が成長した具体的なエピソードはなにか？	本事業の成果
10	本事業を通じて、教育環境の魅力が高まったか？（カリキュラム、地域協働体制、課外活動、生徒数等）	本事業の成果
11	本事業を通じて、関わる学校側の大人の変容（教育観、学校観、生徒観、地域観）があったか？また、それはなにか？	本事業の成果
12	本事業を通じて、コンソーシアムに変化はあったか？（体制、目的・目標、活動、財源確保など）	本事業の成果
13	本事業を通じて、カリキュラムマネジメント実働体制の変化は？（体制、目的・目標、活動、コーディネーター人材確保など）	本事業の成果
14	生徒の学習活動によって、地域へなにか影響はあるか？	本事業における地域側への影響
15	関わる地域側の大人の変容（教育観、学校観、生徒観、地域観）があったか？	本事業における地域側への影響
16	本事業を通じて、地域の方はどれくらいの頻度でカリキュラム開発のどの部分に関わったのか。	カリキュラム開発の過程の把握
17	本事業を通じて、教育課程外で実施された教育活動とは？	カリキュラム開発の過程の把握
18	コーディネーター機能は、だれが、なにを担ったか？学校の関わりの度合いは？	コーディネーター機能の把握
19	コーディネーター機能によって、学校になにがもたらされたのか。	コーディネーター機能の把握
20	目的、目標設計における留意点はなにか。	PDCAのPの部分の確認
21	高校と地域の協働における留意点はなにか。	PDCAのDの部分の確認
22	事業の振り返りは、いつ、だれが、どのような話し合いで行なっているのか。	PDCAのCの部分の確認
23	来年度に向けての話し合いは、いつ、だれが行なっているのか。	PDCAのAの部分の確認
24	このプロジェクトの主体（リーダー）はだれか？	事業の主体の把握

県教育委員会

番号	質問事項	質問の意図
1	いつからこの事業の担当ですか。	前提の確認（事業継続の観点）
2	引き継ぎがあった場合、十分な引き継ぎがありましたか。そう思ったのはなぜですか。	前提の確認（事業継続の観点）
3	引き継ぎがなかった場合、本事業を次の担当に引き継ぐ時に留意する点は何ですか？またそれは、なぜですか？	前提の確認（事業継続の観点）
4	本事業への応募理由は何ですか。	前提の確認（事業開始）
5	本事業実施に向けて、学校側といつ頃、どのような場で話し合いがもたれましたか。	学校側の体制構築過程の把握（事業開始）
6	事業応募当初の協働体制と現在の協働体制に変化はありますか。	協働体制の構築過程の把握
7	協働体制を構築する際に、留意した点がありますか。	協働体制を構築するポイント
8	本事業を通じて、生徒が成長した具体的なエピソードはなにか？（ナシ？）	本事業の成果
9	本事業を通じて、教育環境の魅力が高まったか？（カリキュラム、地域協働体制、課外活動、生徒数等）	本事業の成果
10	本事業を通じて、関わる学校側の大人の変容（教育観、学校観、生徒観、地域観）があったか？また、それはなにか？	本事業の成果
11	本事業を通じて、コンソーシアムに変化はあったか？（体制、目的・目標、活動、財源確保など）	本事業の成果
12	本事業を通じて、カリキュラムマネジメント実働体制の変化は？（体制、目的・目標、活動、コーディネーター人材確保など）	本事業の成果
13	生徒の学習活動によって、地域へなにか影響はあるか？	本事業における地域側への影響
14	関わる地域側の大人の変容（教育観、学校観、生徒観、地域観）があったか？	本事業における地域側への影響
15	本事業を通じて、地域の方はどれくらいの頻度でカリキュラム開発のどの部分に関わったのか。	カリキュラム開発の過程の把握
16	本事業を通じて、教育課程外で実施された教育活動とは？	カリキュラム開発の過程の把握
17	コーディネーター機能は、だれが、なにを担ったか？学校の関わり具合は？	コーディネーター機能の把握
18	コーディネーター機能によって、学校になにがもたらされたのか。	コーディネーター機能の把握
19	目的、目標設計における留意点はなにか。	PDCAのPの部分の確認
20	高校と地域の協働における留意点はなにか。	PDCAのDの部分の確認
21	事業の振り返りは、いつ、だれが、どのような話し合いで行なっているのか。	PDCAのCの部分の確認
22	来年度に向けての話し合いは、いつ、だれが行なっているのか。	PDCAのAの部分の確認
23	このプロジェクトの主体（リーダー）はだれか？	事業の主体の把握
24	本事業における県教育委員会の役割はなにか。	役割の把握

コンソーシアム側

番号	質問事項	質問の意図
1	いつからこの役割に、どのような経緯で就いていますか。	前提の確認（事業継続の観点）
2	引き継ぎがあった場合、十分な引き継ぎがありましたか。そう思ったのはなぜですか。	前提の確認（事業継続の観点）
3	引き継ぎがなかった場合、本事業を次の担当に引き継ぐ時に留意する点は何ですか？またそれは、なぜですか？	前提の確認（事業継続の観点）
4	本事業への応募理由は何ですか。	前提の確認（事業開始）
5	本事業実施に向けて、学校側といつ頃、どのような場で話し合いがもたれましたか。	学校側の体制構築過程の把握（事業開始）
6	事業応募当初の協働体制と現在の協働体制に変化はありますか。	協働体制の構築過程の把握
7	協働体制を構築する際に、留意した点がありますか。	協働体制を構築するポイント
8	本事業を通じて、生徒が成長した具体的なエピソードはなにか？	本事業の成果
9	本事業を通じて、教育環境の魅力が高まったか？（カリキュラム、地域協働体制、課外活動、生徒数等）	本事業の成果
10	本事業を通じて、関わる学校側の大人の変容（教育観、学校観、生徒観、地域観）があったか？また、それはなにか？	本事業の成果
11	本事業を通じて、コンソーシアムに変化はあったか？（体制、目的・目標、活動、財源確保など）	本事業の成果
12	本事業を通じて、カリキュラムマネジメント実働体制の変化は？（体制、目的・目標、活動、コーディネーター人材確保など）	本事業の成果
13	生徒の学習活動によって、地域へなにか影響はあるか？	本事業における地域側への影響
14	関わる地域側の大人の変容（教育観、学校観、生徒観、地域観）があったか？	本事業における地域側への影響
15	本事業を通じて、地域の方はどれくらいの頻度でカリキュラム開発のどの部分に関わったのか。	カリキュラム開発の過程の把握
16	本事業を通じて、教育課程外で実施された教育活動とは？	カリキュラム開発の過程の把握
17	コーディネーター機能は、だれが、なにを担ったか？学校の関わり具合は？	コーディネーター機能の把握
18	コーディネーター機能によって、学校になにがもたらされたのか。	コーディネーター機能の把握
19	目的、目標設計における留意点はなにか。	PDCAのPの部分の確認
20	高校と地域の協働における留意点はなにか。	PDCAのDの部分の確認
21	事業の振り返りは、いつ、だれが、どのような話し合いで行なっているのか。	PDCAのCの部分の確認
22	来年度に向けての話し合いは、いつ、だれが行なっているのか。	PDCAのAの部分の確認
23	このプロジェクトの主体（リーダー）はだれか？	事業の主体の把握

4-3-8 プレ調査③実施後のインタビュー項目

プレ調査③インタビュー調査を踏まえて、インタビュー項目の精査を行った。以下、本調査のインタビュー項目である。運営指導委員及び、アドバイザーによる助言も含まれている。全体的に、質問数が多すぎるため、基本情報等の確認は、自己紹介としてアンケートの冒頭に集約した。また、質問事項の抽象度合いによって重複等が見られたため、集約や削除をして現場の負担も鑑みて質問数を減らした。赤字は、特に修正のあった箇所である。

○学校側へのインタビュー項目一覧

番号	質問事項	質問の意図
自己紹介	お名前・立場・本事業の担当時期	前提の確認
	任命や引き継ぎがあった場合、十分な引き継ぎがありましたか。そう思ったのはなぜですか。	前提の確認（事業継続の観点）
	任命や引き継ぎがなかった場合、本事業を次の担当に引き継ぐ時に留意する点は何ですか？またそれは、なぜですか？	前提の確認（事業継続の観点）
応募の経緯	本事業への応募理由及び、応募当初に主体となって動いた機関はどこですか。	前提の確認（事業開始の状況把握）
	本事業実施に向けて、学校内ではいつ頃、どのような場で話し合いがもたれましたか。	前提の確認（事業開始の状況把握）
1	本事業推進のために、学校内の協働体制で留意した点がありましたか。（新しい会議、分掌、担当、研修など）	学校内の協働体制構築
2	コンソーシアムを構築する際に、留意した点がありますか。（委員の選定、お願いの仕方等）	協働体制を構築するポイント
3	コンソーシアムを運営する際に、留意した点がありますか。（地域とのコミュニケーション、当日の会議進行）	協働体制を運営するポイント
4	地域住民が授業に関わるにあたって、工夫点・留意点がありますか？	カリキュラム開発の過程の把握
5	本事業を通じて、教育課程外で実施された教育活動はありますか。	カリキュラム開発の過程の把握
6	地域との協働によって、教員に業務負担は増えていますか？その際に、ワークライフバランスの観点から留意した点がありますか？	阻害要因への対応
7	コーディネーターの任命の理由は何ですか？	コーディネーターの要件を把握
8	コーディネート機能は、だれが、なにを担いましたか。学校の関わりの度合いはどのくらいですか。どのくらいが適切だと思えますか。	コーディネート機能の把握
9	コーディネート機能によって、学校になにがもたらされましたか。	コーディネート機能の把握
10	目的、目標設計における留意点は何ですか。	PDCAのPの部分の確認
11	高校と地域の協働における留意点は何ですか。	PDCAのDの部分の確認
12	事業の振り返りは、いつ、だれが、どのような話し合いで行なっていますか。	PDCAのCの部分の確認
13	次年度に向けて改善点の共有や計画の再設計は、いつ、だれが、どのような話し合いで行っていますか。	PDCAのAの部分の確認
14	本事業を通じて、関わる教員に変容はありましたか。また、それは何ですか。また、関わる地域側の大人の変容がありましたか？（教育観、学校観、生徒観、地域観等）	本事業の成果
15	本事業を通じて、生徒が成長した具体的なエピソードは何ですか。	本事業の成果
16	生徒の活動によって、地域へなにか影響はありましたか。	本事業における地域側への影響
17	文科省の本事業について、自由にご意見を下さい。（あれば）	本事業に対する現場の意見

○コンソーシアム側へのインタビュー項目一覧

番号	質問事項	質問の意図
自己紹介	お名前・立場・本事業の担当時期（経緯など）	前提の確認（事業継続の観点）
	任命や引き継ぎがあった場合、十分な引き継ぎがありましたか。そう思ったのはなぜですか。	前提の確認（事業継続の観点）
	任命や引き継ぎがなかった場合、本事業を次の担当に引き継ぐ時に留意する点は何ですか？またそれは、なぜですか？	前提の確認（事業継続の観点）
応募の経緯	本事業への応募理由及び、応募当初に主体となって動いた機関はどこですか。	前提の確認（事業開始）
	本事業実施に向けて、学校側といつ頃、どのような場で話し合いがもたれましたか。	学校側の体制構築過程の把握（事業開始）
1	学校、教育委員会側とのコミュニケーション、事務手続きにおける改善点はありますか。	協働体制を阻害するポイント
2	コンソーシアムを構築する際に、留意した点がありますか。（委員の選定、お願いの仕方等）	協働体制を構築するポイント
3	コンソーシアムを運営する際に、留意した点がありますか。（地域とのコミュニケーション、当日の会議進行）	協働体制を運営するポイント
4	本事業を通じて、地域住民はどのくらいの頻度でカリキュラム開発のどの部分に関わりましたか。	カリキュラム開発の過程の把握
5	本事業を通じて、教育課程外で実施された教育活動はありますか？	カリキュラム開発の過程の把握
6	コーディネート機能は、だれが、なにを担いましたか。学校の関わりの度合いはどのくらいですか。どのくらいが適切だと思いますか。	コーディネート機能の把握
7	コーディネート機能によって、地域になにがもたらされましたか。	コーディネート機能の把握
8	目的、目標設計における留意点は何ですか。	PDCAのPの部分の確認
9	高校と地域の協働における留意点は何ですか。	PDCAのDの部分の確認
10	事業の振り返りは、いつ、だれが、どのような話し合いで行なっていますか。	PDCAのCの部分の確認
11	次年度に向けて改善点の共有や計画の再設計は、いつ、だれが、どのような話し合いで行っていますか。	PDCAのAの部分の確認
12	本事業を通じて、関わる教員に変容はありましたか。また、それは何ですか。また、関わる地域側の大人の変容がありましたか？（教育観、学校観、生徒観、地域観等）	本事業の成果
13	本事業を通じて、生徒が成長した具体的なエピソードはありますか。	本事業の成果
14	本事業を通じて、地域側からどのような点が成果だと思えますか？また、それはなぜですか？	本事業の成果（地域住民が関わる意義）
15	生徒の学習活動によって、地域へなにか影響はありましたか。	本事業における地域側への影響
16	文科省の本事業について、自由にご意見を下さい。（あれば）	本事業に対する現場の意見

○県教育委員会（管理機関）側へのインタビュー項目一覧

番号	質問事項	質問の意図
自己紹介	お名前・立場・本事業の担当時期	前提の確認（事業継続の観点）
	任命や引き継ぎがあった場合、十分な引き継ぎがありましたか。そう思ったのはなぜですか。	前提の確認（事業継続の観点）
	任命や引き継ぎがなかった場合、本事業を次の担当に引き継ぐ時に留意する点は何ですか？またそれは、なぜですか？	前提の確認（事業継続の観点）
応募の経緯	本事業への応募理由は何ですか。	前提の確認（事業開始）
	本事業実施に向けて、学校側といつ頃、どのような場で話し合いがもたれましたか。	学校側の体制構築過程の把握（事業開始）
1	コンソーシアムを構築する際に、留意した点がありますか。	協働体制を構築するポイント
2	コンソーシアムを運営する際に、留意した点がありますか。（地域とのコミュニケーション、当日の会議進行）	協働体制を運営するポイント
3	本事業を通じて、教育環境の魅力が高まりましたか。（例えば、カリキュラム、地域協働体制、課外活動、生徒数等）	本事業の成果
4	コーディネート機能は、だれが、なにを担いましたか。学校の関わりの度合いはどのくらいですか。どのくらいが適切だと思いますか。	コーディネート機能の把握
5	コーディネート機能によって、学校や地域になにがもたらされましたか。	コーディネート機能の把握
6	これからも高校と地域の協働を推進するにあたり、主導するのはだれですか？	事業の主体の把握
7	高校と地域の協働における留意点は何ですか。	阻害要因の把握
8	市町村との連携・協働について、留意点や工夫点があれば教えてください。	外部資源の活用
9	本事業における県教育委員会の役割は何ですか。（学校ではなく教育委員会だからこそできること）	役割の把握（役割の明確化）
10	管理機関として、本事業の成果の普及についてどのような取組をしていますか。（する予定ですか）	事業の波及
11	事業を継続もしくは拡大するための人員配置もしくは人員確保についての取組はなにかありますか。（コーディネーターへの予算措置など）	事業継続（ヒト）
12	本事業終了後の事業継続について、なにか財政面で準備をしていますか。（していましたか）	事業継続（カネ）
13	文科省の本事業について、自由にご意見を下さい。（あれば）	本事業に対する現場の意見

第5章 本調査

本調査は3つ行った。高校魅力化評価システム、高校魅力化ルーブリック、インタビュー調査である。量的研究である高校魅力化評価システム、高校魅力化ルーブリックと、質的研究であるインタビュー調査を組み合わせることにより多角的な視点から検証をした。

5-1 本調査① 高校魅力化評価システム・個別指標調査

本調査の1つ目の調査は、高校魅力化評価システムにおける共有指標での調査である。補完的に個別指標調査として構想調書等の検証を行った。

5-1-1 調査目的

生徒の資質能力の変化、大人（学校）の変化、大人（地域）の変容を検証する。

5-1-2 調査方法

魅力化評価システム+個別指標調査

5-1-3 調査内容

生徒の資質能力の変化や大人・地域の学びの土壌の状態・変化を可視化する。（事前研修及び事後研修を実施する。）尚、魅力化評価システムの結果は、各学校の構想調書や事業計画書、事業報告書を用いて分析・検討する。

5-1-4 調査対象

令和元年度8校、令和2年度14校

5-1-5 調査時期

令和4年9月～令和元年12月

5-1-6 高校魅力化評価システムについて

「高校魅力化評価システム」とは、「学校、地域における生徒の教育環境」の見える化、そして「生徒の成長」の見える化を支援し、授業・指導の改善や、地域との協働のあり方の検討に役立てていただくための評価ツールです。アンケート調査を用いて、これからの社会に求められる資質・能力に関する状況を多面的に捉えることができるほか、「地域・社会に開かれた教育」の学びの基盤となる地域や学校における学習環境（大人との関係性や機会の有無など）に着目し、学びの土壌の現状を定量的に把握できる点に特徴があります。（引用：三菱UFJリサーチ&コンサルティングHPより）



高校魅力化評価システムポートフォリオ（イメージ図）

5-1-7 事前研修

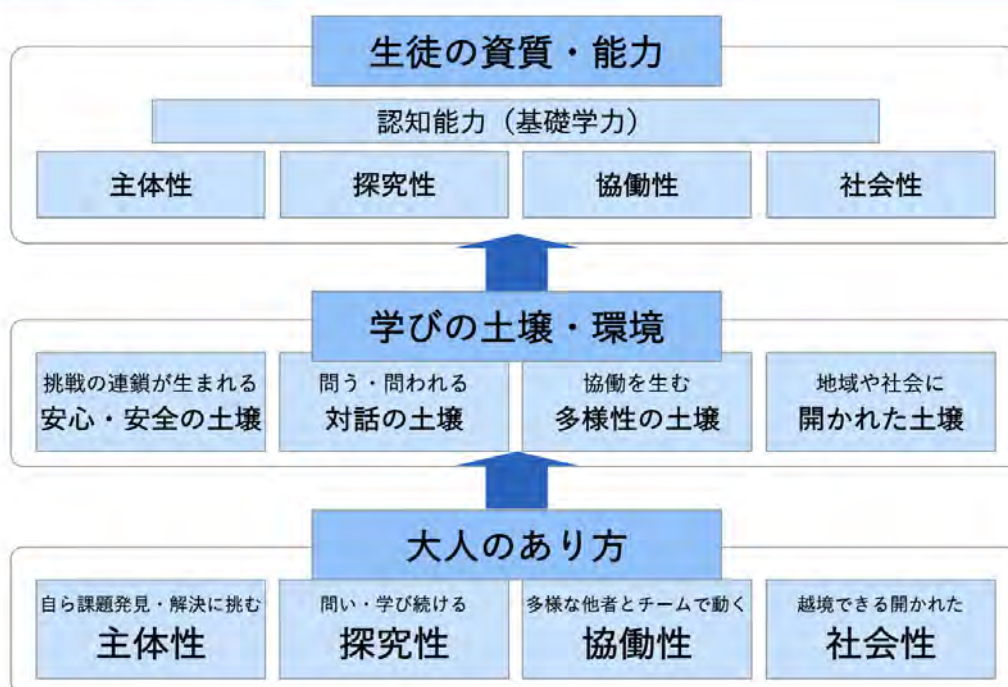
高校魅力化評価システムを実施するにあたり、10月11日、14日の2日程でオンラインでの事前研修を実施した。尚、2日程ともに参加不可の高校については、当日の説明動画をアーカイブ視聴できるようにした。高校魅力化評価システムを今年度初めて実施する高校も含まれていたため、概要の説明から事前準備、実施、返却までのフローを一通り説明した。2日程での参加校は9校で、残りの高校はアーカイブ視聴で内容を確認した。当日は、特に今年度初めて実施される高校より、具体的な実施までの流れ、アンケート回答にかかる時間の確認などの質問があり、それぞれ回答をした。以下、説明スライドである。

目次

I 高校魅力化評価システムの概要	2
II 高校魅力化評価システムの分析から見えてきたもの	10
III 高校魅力化評価システム 2022追加要素について	14
IV 高校魅力化評価システムの実施方法	19
V 高校魅力化評価システムの回答方法	36
VI 高校魅力化評価システムの活用方法	42

当日説明にて、主に基本的な実施内容の確認と、今年度の変更点の共有を行った。

高校魅力化評価システムの全体像



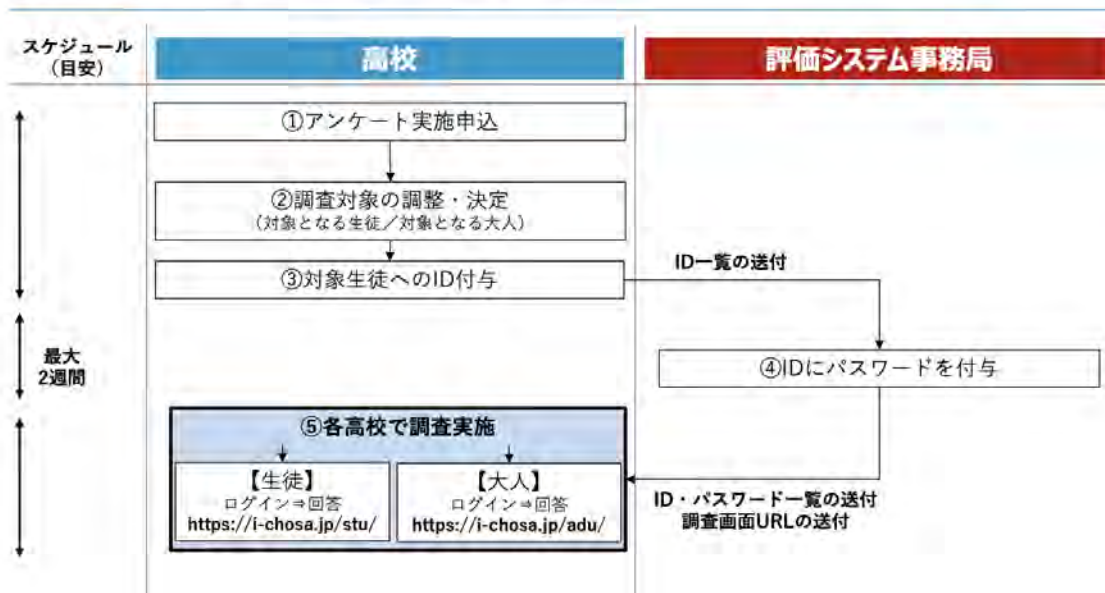
高校魅力化評価システムで測定している各領域と、それぞれの領域の関係を示す図にて、全体像を説明した。

高校魅力化評価システム指標の追加

生徒向け調査の構造	主体性	協働性	探究性	社会性
①学習活動	・主体性に関わる学習活動の量	・協働性に関わる学習活動の量	・探究性に関わる学習活動の量	・社会性に関わる学習活動の量
②学習環境	・主体性に関わる学習環境の質	・協働性に関わる学習環境の質	・探究性に関わる学習環境の質	・社会性に関わる学習環境の質
③能力認識	・主体性に関わる生徒の自己認識	・協働性に関わる生徒の自己認識	・探究性に関わる生徒の自己認識	・社会性に関わる生徒の自己認識
④行動実績	・主体性に関わる生徒のここ1か月の行動	・協働性に関わる生徒のここ1か月の行動	・探究性に関わる生徒のここ1か月の行動	・社会性に関わる生徒のここ1か月の行動
⑤ウェルビーイング	私の現在の幸せ “いま、学ぶための幸せ”	私たちの現在の幸せ “ともに学ぶ幸せ”	私の未来の幸せ “目標に向かい 学び続ける幸せ”	私たちの未来の幸せ “学びを未来に繋ぐ 幸せ”

今年度の変更点（新指標の追加）についても、事前研修の中で説明した。

実施の流れ（～アンケートの実施）



アンケート実施までの流れ、高校側の準備についても確認し、事前研修を終了した。

5-1-8 事後研修

高校魅力化評価システムの結果を返却したあとで、12月下旬に事後研修用資料と解説動画送付により、結果の読み取りに係る事後研修を実施した。現場への負担を考慮し、動画での視聴とし、視聴後には任意参加での個別相談日を1月25日、26日の2つの日程を設けた。個別相談日への参加はなかったが、視聴後アンケートの回答欄で、高校魅力化評価システムで

測定しているインプット指標とアウトプット指標の関係が理解できた、自校の強みの理解につながった、今年度の新指標ウェルビーイングの位置付けが理解できたなどの回答が見られた。以下、解説動画で使用したスライドである。

研修のスケジュール

時間割	項目	内容
インプット (15分)	高校魅力化システムの仕組みと読み取り方	・何のための評価システムか？ ・評価システム活用事例
ワーク1 (25分)	各校の重点指標と結果の振り返り	・各校が設定する重点指標の確認 ・アンケート結果の振り返りと共有
ワーク2 (15分)	高校魅力化システムを活用した取組	・評価システムを通じたPDCA管理 ・今後の目標設定、取組の検討
まとめ (5分)	全体まとめと事後課題	・研修会の総括 ・自校での振り返り(自校研修)

視聴者自身が自校の結果振り返りを行うこと、加えて自校内で同様の振り返り研修まで行うことを想定した内容構成とした。

学校のPDCAサイクルに、評価の仕組みを組み込む



生徒と学校・地域の**現状**（強み・弱み）が見える



生徒と学校・地域の**変化**が見える(2年目以降)



生徒の変化と学校・地域の活動の**繋がり**が見える



伸ばしたい、改善したい、**次の一歩**



目標の設定や成果の把握の手がかり

「意志」にもとづく判断を**「支える」**のが評価システム

学校内でのPDCAサイクルに、高校魅力化評価システムをどのように役立てていただくかを前半部分で説明した。

参考：総括表を参考に、活動と結果の「繋がり」を発見しましょう

■今回の結果（まとめ）

	主体性	協働性	探究性	社会性
① 学習活動	2	4	3	3
② 学習環境	3	3	3	3
③ 生徒の自己認識	2	3	2	2
④ 生徒の行動実績	2	3	2	2

全体的に、協働性に関する値が高い。特に学習活動の頻度が高いことが、生徒の資質・能力の形成に繋がっている？
→強みを活かした次の一手の検討

主体性については、学習活動の頻度が他の領域に比べて低いようだ。この理由は？→課題の発見



主体性に関する学習環境、探究性に関する学習環境は、昨年→今年で下がっているようだ。この理由は何だろう？

25

結果をどのように読み取るか、実際に各校へ返却しているポートフォリオを表示しながら、読み取り例を共有した。

5-2 本調査② 高校魅力化ルーブリック

本調査②は、地域との協働におけるセルフ診断ツールである高校魅力化ルーブリックである。各項目に対して、自地域・自校の現在地を知るためのものである。尚、本ルーブリックは、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームの担当者と協議をし、本事業の成果検証の4項目を中心に図るためにカスタマイズを実施した。

5-2-1 調査目的

各学校の実施体制と管理機関及びコンソーシアムの実施体制、支援体制の検証を行う。

5-2-2 調査方法

高校魅力化ルーブリック

5-2-3 調査内容

学校経営・協働体制・資源確保・現場支援の4つのカテゴリから構成される高校魅力化ルーブリックのセルフ診断を各校が実施する。

提出にあたっては、コンソーシアムでの合意を図ることをお願いする

5-2-4 調査対象

令和元年度8校

令和2年度14校

5-2-5 調査時期

令和4年10月～令和4年12月

5-2-6 高校魅力化ルーブリック（学校用）※添付資料参照

主体としてプロジェクトを推進する学校が、事業開始前と現在の自校の状態を1から4までの4段階評価を行うことで、事業を通じた伸び幅をセルフ診断する。尚、学校だけで記入するのではなく、地域側の意見も反映するために、コンソーシアムの委員に確認してもらうチェック欄を作成した。

高校魅力化ルーブリック【地域との協働による高等学校教育改革推進事業における成果検証業務の委託に係る事業】(学校用)

記入日： 月 日 学校名：

No.	項目	1	2	3	4	評価基準 (1-4段階)	評価結果	備考
1	自由な学校の 運営(自主)	スクーム・ポータル等の自由な学校運営は定着し、評価されている。もしくは、評価されている。	自由な学校運営が推進されている。評価されている。	自由な学校運営が推進されている。評価されている。	自由な学校運営が推進されている。評価されている。			
2	目的や学校使命 の共有・明確	スクーム・ポータル等の目的や学校使命は、明確に共有されている。もしくは、共有されている。	目的や学校使命が共有されている。評価されている。	目的や学校使命が共有されている。評価されている。	目的や学校使命が共有されている。評価されている。			
3	目的や学校使命の 共有・明確	スクーム・ポータル等の目的や学校使命は、明確に共有されている。もしくは、共有されている。	目的や学校使命が共有されている。評価されている。	目的や学校使命が共有されている。評価されている。	目的や学校使命が共有されている。評価されている。			
4	学びや学びの 質	スクーム・ポータル等の学びや学びの質は、明確に共有されている。もしくは、共有されている。	学びや学びの質が共有されている。評価されている。	学びや学びの質が共有されている。評価されている。	学びや学びの質が共有されている。評価されている。			
5	運営の 透明・公開	スクーム・ポータル等の運営の透明・公開は、明確に共有されている。もしくは、共有されている。	運営の透明・公開が共有されている。評価されている。	運営の透明・公開が共有されている。評価されている。	運営の透明・公開が共有されている。評価されている。			
6	校内評価体制の 整備	スクーム・ポータル等の校内評価体制は、明確に共有されている。もしくは、共有されている。	校内評価体制が共有されている。評価されている。	校内評価体制が共有されている。評価されている。	校内評価体制が共有されている。評価されている。			
7	組織体制の 構築	スクーム・ポータル等の組織体制は、明確に共有されている。もしくは、共有されている。	組織体制が共有されている。評価されている。	組織体制が共有されている。評価されている。	組織体制が共有されている。評価されている。			
8	協働活動の 推進	スクーム・ポータル等の協働活動は、明確に共有されている。もしくは、共有されている。	協働活動が共有されている。評価されている。	協働活動が共有されている。評価されている。	協働活動が共有されている。評価されている。			
9	コア・メンバー制の 導入	スクーム・ポータル等のコア・メンバー制は、明確に共有されている。もしくは、共有されている。	コア・メンバー制が共有されている。評価されている。	コア・メンバー制が共有されている。評価されている。	コア・メンバー制が共有されている。評価されている。			
10	質を、組織の 確保	スクーム・ポータル等の質を、組織の確保は、明確に共有されている。もしくは、共有されている。	質を、組織の確保が共有されている。評価されている。	質を、組織の確保が共有されている。評価されている。	質を、組織の確保が共有されている。評価されている。			
11	POC(ポイント)の 導入	スクーム・ポータル等のPOC(ポイント)の導入は、明確に共有されている。もしくは、共有されている。	POC(ポイント)の導入が共有されている。評価されている。	POC(ポイント)の導入が共有されている。評価されている。	POC(ポイント)の導入が共有されている。評価されている。			

Copyright © Platform for Sustainable Education and Community. All Rights Reserved.

5-2-7 高校魅力化ルーブリック(都道府県教委用) ※添付資料参照

管理機関である都道府県教育委員会が設置者として、1から4の4段階で自己評価を依頼した。また、評価理由については記述欄を設けた。

高校魅力化ルーブリック【地域との協働による高等学校教育改革推進事業における成果検証業務の委託に係る事業】(都道府県教委用)

記入日： 管理機関名：

No.	項目	1	2	3	4	評価基準 (1-4段階)	評価結果	備考
1	自由な学校の 運営(自主)	設置者は、高校の存在意義・目的や学校使命を明確に共有している。もしくは、共有している。	設置者は、高校の存在意義・目的や学校使命を共有している。評価されている。	設置者は、高校の存在意義・目的や学校使命を共有している。評価されている。	設置者は、高校の存在意義・目的や学校使命を共有している。評価されている。			
2	目的や学校使命 の共有・明確	設置者は、目的や学校使命を明確に共有している。もしくは、共有している。	設置者は、目的や学校使命を共有している。評価されている。	設置者は、目的や学校使命を共有している。評価されている。	設置者は、目的や学校使命を共有している。評価されている。			
3	目的や学校使命の 共有・明確	設置者は、目的や学校使命を明確に共有している。もしくは、共有している。	設置者は、目的や学校使命を共有している。評価されている。	設置者は、目的や学校使命を共有している。評価されている。	設置者は、目的や学校使命を共有している。評価されている。			
4	学びや学びの 質	設置者は、学びや学びの質を明確に共有している。もしくは、共有している。	設置者は、学びや学びの質を共有している。評価されている。	設置者は、学びや学びの質を共有している。評価されている。	設置者は、学びや学びの質を共有している。評価されている。			
5	運営の 透明・公開	設置者は、運営の透明・公開を明確に共有している。もしくは、共有している。	設置者は、運営の透明・公開を共有している。評価されている。	設置者は、運営の透明・公開を共有している。評価されている。	設置者は、運営の透明・公開を共有している。評価されている。			
6	校内評価体制の 整備	設置者は、校内評価体制を明確に共有している。もしくは、共有している。	設置者は、校内評価体制を共有している。評価されている。	設置者は、校内評価体制を共有している。評価されている。	設置者は、校内評価体制を共有している。評価されている。			
7	組織体制の 構築	設置者は、組織体制を明確に共有している。もしくは、共有している。	設置者は、組織体制を共有している。評価されている。	設置者は、組織体制を共有している。評価されている。	設置者は、組織体制を共有している。評価されている。			
8	協働活動の 推進	設置者は、協働活動を明確に共有している。もしくは、共有している。	設置者は、協働活動を共有している。評価されている。	設置者は、協働活動を共有している。評価されている。	設置者は、協働活動を共有している。評価されている。			
9	コア・メンバー制の 導入	設置者は、コア・メンバー制を明確に共有している。もしくは、共有している。	設置者は、コア・メンバー制を共有している。評価されている。	設置者は、コア・メンバー制を共有している。評価されている。	設置者は、コア・メンバー制を共有している。評価されている。			
10	質を、組織の 確保	設置者は、質を、組織の確保を明確に共有している。もしくは、共有している。	設置者は、質を、組織の確保を共有している。評価されている。	設置者は、質を、組織の確保を共有している。評価されている。	設置者は、質を、組織の確保を共有している。評価されている。			
11	POC(ポイント)の 導入	設置者は、POC(ポイント)の導入を明確に共有している。もしくは、共有している。	設置者は、POC(ポイント)の導入を共有している。評価されている。	設置者は、POC(ポイント)の導入を共有している。評価されている。	設置者は、POC(ポイント)の導入を共有している。評価されている。			

Copyright © Platform for Sustainable Education and Community. All Rights Reserved.

5-2-8 著作権について

高校魅力化ルーブリックは、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームが開発した高校と地域の協働のセルフ診断ツールである。著作権は、一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームに属するため、取り扱いには十分に注意すること。

5-3 本調査③

インタビューによる質的調査を実施した。

5-3-1 調査目的

質的調査によって、リサーチクエスションの「効果的な要素」を抽出する。

5-3-2 調査方法

インタビュー調査（オンライン・対面）

5-3-3 調査内容

1. 令和元年度の対象校のうち6校、令和2年度のうち6校の計12校についてインタビューを行う。

※12校うち2校へ訪問予定（令和元年度1校、令和2年度1校）

2. 学校担当者、コンソーシアム委員、管理機関担当者の三者にインタビューを行う。

5-3-4 調査対象

令和元年度6校、令和2年度6校の学校担当者、コンソーシアム委員、管理期間側担当者の各12名、合計36名にインタビューを実施した。

※コンソーシアム委員が1名辞退したため、35名の実施となった。

5-3-5 調査時期

令和4年12月～令和4年2月

5-3-6 個別インタビューの方法について

4-3-8のインタビュー項目を踏まえて、半構造化面接インタビューを実施した。

※半構造化インタビューは、あらかじめ質問を用意するものの、それらに対する回答者の反応、内容を見ながら、質問を変えていく方法である。

5-3-7 対面インタビューについて

対面によって現場の雰囲気も含めた情報を得るという観点で、現地を訪問して行う対面インタビューを2校で予定していた。しかし、1校については当日に天候不良となり急遽オンラインに切り替えた。よって、対面インタビューは1校3名の実施となった。尚、対面インタビューには大西研究員が同席した。

5-3-8 インタビュー一覧

令和元年度6校令和2年度6校の合計12校の学校担当者・管理機関担当者・コンソーシアム委員各3名ずつ36名にインタビューを依頼した。No.20のみコンソーシアム委員1名に辞退があったため、12校35名へインタビューを実施した。学校は、担当の異動等で現担当以外の管理職等となったり、管理機関は、担当の異動等で複数名の担当者の同席があったりした。コンソーシアム委員については、一部の学校において委員以外の人物がインタビュー対象となった事例もあった。詳細は備考参照。尚、異動があつて新しく担当者となり、内容に詳しくない場合は、ほとんどの場合、前担当者へインタビュー内容の確認をしていた。

インタビュー一覧

学校	担当者	役職	備考
No. 2	高校担当者	教頭	
No. 2	コンソーシアム委員	町づくり団体	コンソーシアム委員ではない
No. 2	管理機関担当者	県教育委員会	
No. 3	高校担当者	教諭	
No. 3	コンソーシアム委員	大学教授	
No. 3	管理機関担当者	県教育委員会	
No. 7	高校担当者	教諭	
No. 7	コンソーシアム委員	コーディネーター	
No. 7	管理機関担当者	県教育委員会	
No. 8	高校担当者	教頭	
No. 8	コンソーシアム委員	大学教授	
No. 8	管理機関担当者	県教育委員会	
No. 11	高校担当者	教諭	
No. 11	コンソーシアム委員	民間企業	
No. 11	管理機関担当者	教育委員会	
No. 14	高校担当者	教頭	
No. 14	コンソーシアム委員	民間企業	
No. 14	管理機関担当者	教育委員会	
No. 16	高校担当者	教諭	対面、研究員同席
No. 16	コンソーシアム委員	市町村教育委員会 指導主事	
No. 16	管理機関担当者	県教育委員会	
No. 17	高校担当者	教頭、教諭	
No. 17	コンソーシアム委員	町づくり団体	
No. 17	管理機関担当者	県教育委員会	
No. 19	高校担当者	教頭、教諭	
No. 19	コンソーシアム委員	町づくり団体	
No. 19	管理機関担当者	県教育委員会	
No. 20	高校担当者	校長、教頭	

No. 20	コンソーシアム委員	ー	インタビューなし
No. 20	管理機関担当者	県教育委員会 指導主事	
No. 21	高校担当者	教諭	
No. 21	コンソーシアム委員	町づくり団体	
No. 21	管理機関担当者	県教育委員会	
No. 22	高校担当者	教諭	
No. 22	コンソーシアム委員	民間企業	
No. 22	管理機関担当者	県教育委員会	

5-3-9 インタビュアー紹介

質的研究では、その研究者が調査研究内容をどれほど妥当に扱える可能性があるのかを提示する必要がある。よって、本調査における統括研究責任者の経験等を簡潔に記述する。尚、本調査研究の解釈は、終始一人で担った。

解釈者：一般社団法人まなびのみなど 代表理事 取釜 宏行

研究分野：高校と地域の協働

研究内容のキーワード：地域協働・総合的な探究の時間・高校魅力化・コミュニティスクール

1 教育方法の実践例

(1) 大学での教育実践

島根大学の社会教育士講習講師として、「地域経営論」を担当。地域との協働をどのように継続・発展させるかについて、実践者約50名に向けて講義をした。いち方向ではなく、ICTを活用したインタラクティブの講義を実践。受講者アンケート結果からは高い満足度評価を得ている。令和3年度の講義はほとんどオンラインで実施。（令和3年4月～）

(2) 高等学校での教育実践

広島県立大崎海星高等学校で、総合的な探究の時間「大崎上島学」の設計及び実践を担当。役職は移り変わったが、高校と地域の協働を推進し、「生徒の資質・能力の伸長」「協働体制の構築」を実現した。それらの取組を定量的・定性的に分析し、修士論文にまとめた。（平成27年4月～平成31年3月）

2 実務の経験を有する者についての特記事項

1) 大学におけるゲスト講師

「高校の地域の協働」「高校を起点とした町づくり」等をテーマに、様々な大学よりゲスト講師として招かれる。いち方向の知識伝達ではなく、参加型の講演として、毎回好評を得ている。訪問の形態は様々だが、過去実績のある大学は、早稲田大学、立命館大学、近畿大学、北海道大学、広島大学、神戸大学等がある。

2) 高校向けの研修講師

「高校と地域の協働」を教員側（学校側）がどのような姿勢でどのようなポイントに留意して推進すればよいか、実践事例や他事例を紹介しながら、インタラクティブに教員が学ぶ研修を实践。昨年度以降では、広島県内の御調高等学校、世羅高等学校、府中高等学校、高陽高等学校などを訪問した。

3) 教育委員会主催の研修への講師

「高校と地域の協働」を教員側（学校側）やコーディネーターがどのような姿勢でどのようなポイントに留意して推進すればよいか、実践事例や他事例を紹介しながら、インタラクティブに教員が学ぶ研修を实践。昨年度以降では、兵庫県教育委員会、山口県教育委員会主催の研修会で講師を担った。

3 実務の経験を有する者についての特記事項

1) 魅力化コーディネーターとしての実績

広島県立大崎海星高等学校に魅力化コーディネーターとして、9年間従事。統廃合の危機にあった県立高校は生徒数がV字回復した。以下、直近の主な実績である。

- ・令和3年度 推薦入試 倍率3.00倍（県内1位）
- ・令和3年度 文部科学省・経済産業省「第10回キャリア教育推進連携表彰」最優秀賞
- ・令和3年度 第10回ご当地!絶品うまいもん甲子園 準優勝 水産庁長官賞
- ・令和3年度「地域学校協働活動」推進に係る文部科学大臣表彰
- ・令和3年度 第35回時事通信社「教育奨励賞」優良賞

4、学術論文等

- ・人口減少地域における定住促進策の課題：広島県大崎上島町の事例検討から
平成30年3月、広島大学大学院総合科学研究科社会文明研究講座『社会文化論集』
- ・離島の人口減少問題解決に向けた実践例と成果：高専と高校の学校間連携の取り組みとして
平成30年4月、日本高専学会誌
- ・「高校魅力化&島の仕事図鑑 地域とつくるこれからの高校教育」
令和2年度、学事出版

第6章 分析・考察

本調査①から③について、様々な角度から分析・考察をした。まず、本調査②高校魅力化ルーブリックにおいてセルフチェックをした各学校のデータと、本調査③の各関係者へのインタビューの発言を比較・検討した。インタビューごとに傾向が見られたので、詳細は各項目に端的に記載している。次に、本調査②の高校魅力化ルーブリックのデータと高校魅力化評価システムのデータの比較も行った。総括は、第1章2項の調査結果を参照されたい。詳細については、以下各項目の通りである。

6-1 高校魅力化ルーブリックによる実践ノウハウ集

6-1-1 地域との協働によるカリキュラム開発の検証に係るインタビュー結果

「地域との協働によるカリキュラム開発の検証」の検証項目に関連する質問は、学校側の「質問番号4 本事業での授業や企画の計画・立案に地域住民が関わるにあたって工夫・留意された点は何ですか。」と「質問番号5 本事業を通じて、教育課程外で実施された教育活動はありますか。」である。

留意点については、地域住民が前向きに関われるように、地域課題を生徒の探究テーマに設定している学校がある。また、地域住民がフィールドワークの際にサポートをする一方で、教員は地域課題を生徒が前向きに取り組めるように授業に組み込んだり、授業で生徒を惹きつけたりするなど、役割分担をしている。

教育課程外での教育活動については、教育課程外として課外活動を多く行っている場合もあれば、それを部活動として取り組んでいる場合もある。一方で、教員の業務負担を考慮して、課外活動では行わず授業内で行う場合も見られたり、課外活動を外部講師に移行したりしている。

検証項目	対象	質問番	年度	令和元年度							
				類型		【地域魅力化型】		【グローバル型】		【プロフェッショナル型】	
				質問	No.	16	17	19	20	21	22
地域との協働によるカリキュラム開発の検証	学校側	4	本事業での授業や企画の計画・立案に地域住民が関わるにあたって工夫・留意された点は何ですか。	テキスト	フィールドワークの授業を行うときに、地域の方からサポートする方が来てくれて、子ども達も楽しんでいた。そのおかげで生徒たちもグループに力が入って授業がすすんでいった。	地域の魅力は、学校に地域の人材が豊富にあること。地域住民への関わりが深いこと。地域の人材が豊富にあること。地域住民への関わりが深いこと。	地元の人材に頼って、もちろんだ地域の方からサポートを受けている。地域の人材に頼って、もちろんだ地域の方からサポートを受けている。	いる人な立場の方から本校の生徒と関わりたいという方向性を出してほしいという声も届きました。それを事務局の方で振り分けて生徒に案内して生徒が主体的に参加させる。	学校から地域へという矢印が今は基本/学校側が考えるところに地域の人材に頼ってもらうという学校から地域へという矢印というものがやっぱり重要と	地域の方と一緒にやっていると、地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	大人がやり取りをして仲良くなる。地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。
				解釈	フィールドワークの水先案内人としての役割をアテンド	地域の魅力は、学校に地域の人材が豊富にあること。地域住民への関わりが深いこと。地域の人材が豊富にあること。地域住民への関わりが深いこと。	ニーズが多いが、仕事をしながらの参加が難しいこと。	カリキュラムに地域のニーズは活んでいない。そこは学校がやること。放課後などのボランティア活動は地域のニーズを汲み取っている。	コーディネーターが入ったことで、地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	授業内容まで教員で決めるのではなく、地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	
				テキスト				生徒が主体的に参加させていくことにまず取り組んでいきます。	準備で終わらない、やっぱり驚かすというところ、継続するというところ。	コーディネーターと一緒に行動してもらって、ちょっと驚かすというところ、継続するというところ。	
				解釈				地域のニーズに対して、生徒の主体性が参加の可否	準備ではなく継続性のある地域との連携を前提として置く	コーディネーターが地域と初めてでははない関係性をつくることで、地域の声を反映	
	学校側	5	本事業を通じて、教育課程外で実施された教育活動はありますか。	テキスト	中学校と一緒に地域見学会という形で、地域の子ども達に小学校/中学校が地域の小学生にスポーツを教えるという形	外に出るという形は、生徒の達成感というのを得られる	本校近くにありますバスターミナルでの開催です。地域のイベントのボランティアが	県内に留まれている生徒たちで、国外から来た方たちとの交流会		一部の授業だけじゃ満足で、まだいろいろしたいですね	全部カリキュラムに落とし込むというところは、私達の負担を減らすというところもありました
				解釈	高校生が主体となり、中学生や小学生に学びの場や新しい価値を提供する	生徒の成長が認められる場には、教員は積極的に参加をする	生徒が参加しやすい地域行事を優先的に案内	オンラインを活用しながら他校、大学との交流を教育課程外で実施	授業外に活動をし始める生徒が増えた	業務時間にならないように、原則、地域活動はカリキュラム内で実施	
				テキスト	町の文化祭があって、そこにあのダンス部の子ども達も地域の子ども達とお揃いの衣装を着たりするんですよ。その衣装がすごく可愛らしいんですよ。その衣装がすごく可愛らしいんですよ。	特定の教員だけではなく、他の教員も引率で活躍しているというところ。他の教員も引率で活躍しているというところ。	地域活動が継続的に地域の方と特産品を一緒に作ったり、町の特産品の試食会であるとかイベントに出向いたり		部活動で地域に出ていって、地域の子ども達と交流する機会がすごく多いんですよ。授業の中で取り組むとやってはありましたが	いろんなイベントをするのが、休日だったりというところは、授業の中で取り組むとやってはありましたが	
				解釈	町の行事に、高校生たちが部活動などで参加することで、毎年参加できること、前にも必要となる	教員の意識を積極的に活用する。若い教員への関わりも意識的につくる。	部活動にすることで単発ではなく継続的に地域とつながる体制ができる		活動の時間が足りないため、部活動を活用	授業の取組として実施ではあるが、土曜、休日を実施などもあった	
高校魅力化ルーブリック		項目名：カリキュラムの開発	事前	1	2	2		2	2		
			事後	3	3	4	4	3	3		

検証項目	対象	質問番	年度	令和2年度							
				類型		【地域魅力化型】		【グローバル型】		【プロフェッショナル型】	
				質問	No.	2	3	7	8	11	14
地域との協働によるカリキュラム開発の検証	学校側	4	本事業での授業や企画の計画・立案に地域住民が関わるにあたって工夫・留意された点は何ですか。	テキスト	役割によってこちらの授業の進捗が違って、できるだけ授業の進捗に合わせて入りにしていた	基本的に地域課題を扱うというのが、実践テーマとするのは基本になります	地域住民がこういうふうになりたいというふうなことが、実践の中で出てくるというふうなことは実はなくて	かなり簡単に学校にこなれている方が地域とのハブになっている	学校側が地域と連携して授業を展開している。地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	うちへの期待のところが、企業さんと連携する人の思いを見て判断する	
				解釈	生徒の注意を惹きつけるなどは、教員が行って、地域の方に協力してもらうことで、地域の方も授業に入りやすくなるようにする	地域課題を探究テーマにするので地域が関わらざるを得ない	カリキュラムではなく、放課後の活動の中に地域との連携を反映	部活動は、地域との繋がりのハブになる可能性がある	学校側が地域と連携して授業を展開している。地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	依頼される時は、学校側、生徒、地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	
				テキスト	前年度こうだったのだから、今年もこうしたいと、かかっていう話にまた入っていく	1つ目は自分たちがフィールドワークをして探検する/2つ目は、生徒の興味関心の関心がある場所を選ぶ/3つ目は、高校と大学の先生の専門性が合致する	ある程度複数の選択肢を持たない、地域の雰囲気とかも高校側という観点で考えていくようにして、地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。		高校でこういうことしてほしいとか、こういう授業があるから面白いとかって要望があれば教えてくださるというところ、地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	本校の魅力の発信にもなるので重要なポイント	
				解釈	イメージが湧きやすいように、前年度の事例を出せる	地域課題の探究学習について3つに分けて	限られた地域との接点だと、共有が難しい		地域のニーズに合った公開講座を開催することで、高校が地域の学びの拠点に	学校全体で対応する必要があるかを確認	
	学校側	5	本事業を通じて、教育課程外で実施された教育活動はありますか。	テキスト	これ地域探究科でやっていたり、部活動の延長でやっていたり、地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	課外授業になっていることがいっぱいある	放課後にイベントやったりするときに、地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	子どもたちが自分で選んで、興味を持って、それに対して興味をもちたいところを自分達で探してやっています	通常の月曜日から金曜日まで、授業の範囲内で行っている。地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	大規模な授業の中で実施しています。地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	
				解釈	教育課程外に学校と地域の協働を促進する時間(部活動)をつくる	課外授業は地域と連携しやすい	放課後のイベントから正規の授業へ、関わりが濃くなる。教育課程外から教育課程内へ	対外試合を生徒自身が探す	基本原則は、教育課程内	教育課程の次は、部活動というように、なるべく教員が積極的に参加し、授業に組み込むことを第一に検討する	
				テキスト	その地域と協力するよう事業を企画した方が多いというところ、授業でいわれているように、授業の中で地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	特に土日に入ってくることで、多いのでそれを考えるとやはりかなり難関の負担というところは大きい	業務負担は避けられないため、人員配置、外部講師など負担軽減策も同時進行		2時間だけやるとは難しいから、授業の中で地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	課題研究とか、調べていく中で、地域の方からサポートを受けている。その声を学校に届けたい。地域の方からサポートを受けている。	
				解釈	教育課程内と教育課程外の使い分け					原則研究は、授業内で終わらない。実施は、土日に行うことも検討する	地域側の窓口が、地域からの依頼を教育課程の正か否かによって判断する
高校魅力化ルーブリック		項目名：カリキュラムの開発	事前	1	4	2	3	2	1		
			事後	2	4	2	4	4	4		

また、コンソーシアム側は「質問番号4 本事業を通じて、教育課程外で実施された教育活動はありますか。」と「質問番号5 本事業では、地域住民は授業計画などのどの部分に関わりましたか。その頻度はどの程度ですか。」である。

教育課程外で実施された教育活動については、教育課程内の授業で火がついた生徒でもっと活動したい生徒が活動しているという認識をコンソーシアム側は持っている。また、コンソーシアム側が学校と協働する時には、地域行事や地域のイベントは土日などが多いため、教育課程内だけでの協働は難しいと感じている場合もある。

授業計画などの関わった部分に関しては、提案をしたことはなく、教育課程内は学校で教育課程外が地域という棲み分けを行っている場合がある。一方で、地域側から提案をする場合もあったり、地域側の意見を吸い上げる仕組みを学校として考えていたりする場合もある

確認項目	対象	質問番号	年度	令和元年度							
				No.	【地域魅力化型】		【グローバル型】	【グローバル型】	【プロフェッショナル型】	【プロフェッショナル型】	
					16	17	19	20	21	22	
地域との協働によるカリキュラム開発の検証	コンソ	4	本事業を通じて、教育課程外で実施された教育活動はありますか。	テキスト	把握はしていない	それを原簿を持って、よりやりたい子はプレゼンテーションをもっと高めたりとか、プランをもっと実直でやっていたらいいことをしよう	カリキュラムの中だけではどうしても限りが、あの地域活動って大体地域のイベントって土日にある			連携先の皆さんが行っているプログラムがあってよかったです。どうして紹介はしていた	この事業を引いていく中で子供たちの成長を促すための企業家への参加を促すためのリーフレットとか、例えば調べたりしていろいろはなされた
				解釈	知らない	探究の個別最適化は、部活動のための教育課程外の学習へ。	教育課程内だけで地域との協働は難しい			教育課程外プログラムをコンソーシアム委員から情報提供を受けて教員が主体に紹介	授業内で興味・関心が高まった生徒が個別に地域側と連絡し、プラスで活動をしていく
				テキスト		顧問の先生もちょっと異動してしまったのもあって、それもあってちょっと今休部	異動あり/最初は無理のないような形にしました。			授業の方でも生徒に紹介してくれたりしていた	全部授業内になることも結構あるって先生は言われてました。授業外になったときに評価どうするかとか、例えば日曜日とかの出席をどうするかとか、そのあたりは結構難題されてた/なるべくその教育課程に組み込んでいく方向にされた
				解釈		立ち上げの教員(顧問)の異動を前提とした設計を	教員負担・生徒負担に配慮して小さく実施			授業からふきこぼれる生徒の受け皿を地域がキャッチ	業務負担にならないように、なるべく教育課程内で完結するように
	コンソ	5	本事業では、地域住民は授業計画などのどの部分に関わりましたか。その頻度はどの程度ですか。	テキスト	発表会のアンケートなんかは、それで驚かしてるのかもしれない。	計画を元々組んだっていうのもありますし、動きながらそういう地域のことも人と繋いでいる。	提案をしたということは一切ありません/地域住民の関わりは主にカリキュラム外			その新しい先生方が実現したいものをどう動かしていくかという議論の方が最初は多かった	結構詰め込みが多かった/本格的な学びというか地域とこういってをやっていこうとするとバンクする
				解釈	アンケートを活用して地域のニーズを把握	地域との協働は流動的に	教育課程内は、地域住民はノータッチ			地域ニーズの前に学校としてなにを目指すかの議論が先	まずは、既存授業内容や既存の教育活動をスクラップする
				テキスト	半ば教育委員会から、それと行政関係はかなり参加してもらいました	その逆に地域側からこういうことをしてほしいんだっていう声が続々と届く方が多いです	カリキュラムの中は先生に任せて、カリキュラム外の活動で地域住民がしっかりフォローする			その地域の状況とか家とかがそれに応じて運営私の方からごんさんがいらっしやったりとかっていろいろ話をしながら作っていったようなプロセスがあります	必要な子が取ればいっていいふうになるとか、もしくははうまさはない、これからの3業界でこういうふうに変わっているのだから、ということでは話をさせていた
				解釈	教育委員会含む行政関係者は、通常の手続きを経てお願いをすると協力しやすい	地域側のニーズをカリキュラムに生かす	カリキュラム内の内容や企画は教員。カリキュラム外が地域の出身という棲み分け			地域のニーズは、コンソ委員を通じてキャッチ	アップデートの必要性をコンソで議論した
高校魅力化ルーブリック			項目名：カリキュラムの開発	事前	1	2	2		2	2	
				事後	3	3	4	4	3	3	

検証項目	対象	質問番号	年度		令和2年度					
			質問	類型	【地域魅力化型】	【地域魅力化型】	【グローバル型】	【グローバル型】	【プロフェッショナル型】	【プロフェッショナル型】
				No.	2	3	7	8	11	14
地域との協働によるカリキュラム開発の検証	コンソ	4	本事業を通じて、教育課程外で実施された教育活動はありますか。	テキスト	地域探究同好会という同好会活動の運営協力	課程外でもいっしょにやっています	全部中止というよりは、何かしら代替の形で活動をするというのは続けていた	実はその一コマの質問の時間じゃ全然足りません。		それ以外のクラブのやり取りも出てきたりとか、そこからアイデア出して連携してやって文化祭でコラボイベントなども企画したりしたりとか、まさにそういう楽しみ合いのところはあった
				解釈	同好会を設立	教育課程外へ浸み出る	コロナ禍であっても、なにかに代替しながら学びを止めていない	授業内で興味・関心を促進するとともに、もっと聴きたい、知りたい時の関わり代も提供しておく		教育課程内でのめり込んだ生徒が、部活動やその他学校行事にも染み出していた。
				テキスト	〇〇大好き部会というような〇〇のことを勉強しようよという部会がありまして、そこに〇〇高校の同好会も入って活動をしています。	課程外に出た期間に多分地域でも回せることもしていた	コンセプトを1回作り直して、それで結構頑張るような子たちが増えたりとか、先生もそれ見て前向きになって進んでいった	結構電話いただいたり、一度お伺いしてもいいですか、みたいな話をされた		
				解釈	地域の町づくり団体の勉強会等に学校側も参加	教育課程外は、地域に手渡すこともあった	必要性認識もしくは、方向性を再構築すると生徒や先生も前向きになる	高校生がアプローチできる環境（電話や訪問、平日夕方以降だけではなく、土日も）を用意することで高校生の主体性を引き出す		
	コンソ	5	本事業では、地域住民は授業計画などのどの部分に関わりましたか。その頻度はどの程度ですか。	テキスト	こちら側から提案しているっていうのは多いです。	高校生ができる範囲と地元の方が関心するものの懸念点というの、それを調整する/計画はやはり変更されるっていう前提	地域の来ていただいた方も含めて、30分とか1時間くらいなんですけど、振り返り会を一顧にやる	一つ目は活動のフィールドを確保する。二つ目は関係性を築く。三つ目は、報告会に参加して、卒日のコメントもしてくる。四つ目は、結構いろいろなところに提案に行くので、その提案を検討する。最後はその提案実現のためのアイデア出し		イメージは強く持たれてたので、あとはそれをどう実現していくのかなか、どこにポイントがあるかみたいな話
				解釈	地域側からの提案の機会も設定し、意見を吸い上げる仕組みを構築	計画が変わっていくため、調整をし続けるプロセス	地域のニーズを汲み取る場を意図的に設定することで当事者意識を醸成する	高校と地域の協働の分類分けを整理して、場当たり的に協働する		まずは、学校としてのイメージがあって、議論がスタートする
				テキスト	もうちょっと狭い空間でぎゅっとで体験を増やせるように2年目はしています。	どっかに誰かにあの丸投げしたらなんとなくこういった地域探究が運んでいるっていう考えは絶対ない	最終成果発表会がマイルストーンとなって、1年間を振り返るきっかけになるという内閣議論にも流れている	地域の関わりが、ある意味では大学に対するように関わられている/うちの大学に前向きに、という印象を持っています。ある意味では育成を感じる		負担をいかに下げられるかみたいなところを結構視点として
				解釈	教員との振り返りの中で地域との関わりを一方から双方へ改善	地域住民に入ってもらうだけではなく、高校生にとって面白い授業・内容をどうやってつくるかを議論	マイルストーンは、取り組みに対するFBの場	高校生が大学のフィールドワークのレベルと認識されている		地域側に関わるときに、業務負担軽減という視点も加えて連携について協議する
高校魅力化ルーブリック		項目名：カリキュラムの開発	事前	1	4	2	3	2	1	
			事後	2	4	2	4	4	4	

6-1-2 各学校の実施体制の検証に係るインタビュー結果

「各学校の実施体制の検証」の検証項目に関連する質問は、学校側の「質問番号1 本事業推進のために、学校内の体制づくりで留意した点はありませんか。（新しい会議、分掌、担当、研修など）」である。

学校内の体制づくりで留意した点については、新しい委員会や部などをつくることで学校内に正式な立場を設けて、担当が中心となり進める場合が多いようである。一方で、担当者を決めると担当者しか取り組まず、学校内に浸透しにくい場合もあるため、担当者を決めた場合は、意識的に周りを巻き込む働きかけをしている。学校全体に浸透することを意図して担当者を決めない場合も見られる。いずれにせよ、個人の動きから学校全体の動きになるように学校ごとに、学校規模や協働の段階によって進め方が異なるようである。協働の段階が初期の頃は、明確に担当者を決める傾向にある。

事業項目	対象	実施番号	年度		令和元年度						
			期間	No.	【地域魅力化型】	【地域魅力化型】	【グローバル型】	【グローバル型】	【プロフェッショナル型】	【プロフェッショナル型】	
					18	17	19	20	21	22	
各学校の実施体制の検証	学校	1	本事業推進のために、学校内の体制づくりで留意した点がありましたか。(新しい会議、分掌、担当、研修など)	テキスト	校務分掌に関わらず、各学年に探究担当教員を任命。事業当初は、後者向きの教員が多かったが、職員対象の探究の講演会等を通じて、少しずつ、教員の意識が変わっていった。	若い教員をできるだけ探究活動の中に入れて事業を進めていく/特定の教員だけでなく、校内の教員全てでその探究の経験、この事業を進めていく	他の分掌とのバランスを見ながら継続性を持ってやっていったら、分掌に個人交渉しながらメンバーを選定	新たな組織を作っているわけではないので、反動から学校の中にある分掌/責任を元々履いていたその教員にコメントとして、この事業を推進させた	この3年間の間は地域推進室という分掌という一つの役割で、学校の文化者/担当者である校長の方が任命もしていたので、学校全体に周知もしていた	本職ではこの事業のことをSCH推進と併せて呼ばれており、SCH推進室を作っていたが、私がその部長という立場で実施していたことになった。	
				解釈	探究や地域協働について、第三者より重要性を学ぶ機会を設定	若い教員、「できるだけ多くの教員」	継続性を考えたメンバー選定	SGHの時のコアメンバーをそのままスライド	学校内に新しく役割を設けることで、学校内に周知/担当者以外にも部分的に会議への出席を依頼するなどして浸透を図る	分掌を新規で作成	
				テキスト	この学年はこういふふうによって、もうこの学年はこういふふうによっていこうという形	二、三名がよくまとめている	既存の校務分掌にプラスアルファで事務局は作られているもの	先頭に立ててその先生は10名ぐらい名前が挙がる	学科長その学科の起業推進課の課長、企画課の課長2名いますので私とその2名の3人がこの地域協働の担当みたいな形	専門科の教員はもうこのSCH推進から1本にしていたので、他の業務からちょっと軽減していただくようにはなっていましたし。	
				解釈	学年ごとに変化したカリキュラムはなく、学年の課目を決めるからカリキュラムを決めていく。さらに、コロナ補にもなり推進修正しながら進めていく	小規模校は2.3名のミドルリーダーが核となり、学校全体の動きになりうる	分掌ではなく、分掌に加える形でメンバーを選定	ミドルリーダーが10名いる	学科を繋ぎながら新チームを構成/特命	主担当者は他業務の軽減	
				テキスト	3年間の取り組みによって、大枠ができてきたので、それができたから教員の負担を減らすのがいい。初年度は、教員が大学の講演会を開いてきたり、○○の資格をとったりと自主的に動いた。		この事業との中身をコラボして	防音しながら、下ろすタイミング等も調整をそこできながら	初年度は3人同じところで机を横さんに並べて	もう少し事業を進めやすくするためにチームのような形にして、するのに分掌を設置して研究推進委員会、これ月1	
				解釈	教員の負担も当初は増加し、その後減少に転じる。		もともとある委員会と本事業をリンクさせることにより、学校内に浸透を促すことになった	現場がトップダウンに受け取らないように、現場レベルで議論をすることをお勧めしている		分掌が異なるが、コミュニケーションがとれるようにデスクを並べた	プロジェクト推進のために柔軟な体制変更
				テキスト				職員会議に入る前の運営委員会、さっき教員が言ったような会があるのでは		メールなり Slack のようなものもありますので、一緒に席を隣にいらなくてもできるような形	
				解釈				小さな会議から議論をはじめ、徐々に大きな会議を経て学校全体へ		SNSを活用してコミュニケーションをとる	
高校魅力化ルーブリック			校内推進体制の整備	事前	2	2	2		2	3	
				事後	4	3	4	3	3	3	

検証項目	対象	質問番号	年度	No.	令和2年度							
					質問	類型						
						2	3	7	8	11	14	
各学校の実施体制の検証	学校	1	本事業推進のために、学校内の体制づくりで留意した点がありましたか。（新しい会議、分掌、担当、研修など）	テキスト	地域活動の推進者を立ち上げて、本事業の方向性や実施の進捗について議論を続けています。そのメンバーの先生方に、各市区学校の校長、教員などの協力を促した。甲府教育大学の国語学部学芸学部の理事が、校長と委員に対して、甲府教育大学の理事をコーディネートするという部分を開発してあります。	高校魅力化委員会であるというのと、やっぱり市町が地域おこし協力隊として教育コーディネーターを1名派遣していたので、実は学校に常駐している。	企画研究開発部というこの探究を中心に作っていく	先生を目指合わせで、探究科運営委員会というのを年3回行っておりまして、そこで取り組みについて共有を図っている	研究開発推進委員会という委員会を作りまして、7名専門家の教員20名から構成	〇〇プロジェクトという名前の委員会組織を作った。そこで独自のBYOD端末の使い方とかルール作りについて協議をするなどしました。		
				解釈	推進室を立ち上げることで、役割と責任の所在を明確に	実務会議にコーディネーターも参加	中心となる組織を設置し、学校全体で取り組む姿勢を伝える	事業のために新しい組織を設置	学科横断のプロジェクトチームを設置	プロジェクトの全体を進める分掌及び、デジタル教育推進委員会、分掌や委員会をつくるなど、必要に応じて、動きやすい環境づくりを進める		
				テキスト	授業者をほぼ全員の先生にしていた	基本的にいるんな担当というのを全員に割り振る/必ずそこに入ってそこで情報共有するというスタイルをとっている	一年生のバスツアーとかでも強制的に地域に出る	年度初めの方に、持ちコマの形で持ちます	進捗状況の報告であったり校内の先生からの様々な意見をいただく	進捗不すね、撤回しという、あの相談しながらその他の分掌に対して要望することは分掌長に丁寧に話をして了解を得ながら進めていくことで、結果的には要さなかったことができた		
				解釈	授業の担当に任命することで当事者意識を醸成	全職員に役割が与えられることで当事者意識を醸成	カリキュラムに散りばめて教員が担当することで、浸透する仕組みを構築	各教科担当から一人探究学習の伴走を任命	共通認識及び、教職員からの意見の取り上げ	報道班、巡回し、巻き込む		
				テキスト	学年の話し合いの中で、推進室が立ちあがります。決まっています。お話ししている間は変わっていかないという方が多い。話し合いも、このまま進めたいという声も出ています。	研修は大学の先生	全体で集まってワークショップなどで考えながら、作っていくというスタイルが、浸透している	探究顧問に加えて、〇〇顧問という形で配置	比較的会議の時間も最初に設定した上で必要部分だけ会議できるように必要な資料は事前に準備したというところ、比較的会議はスムーズにできました	生徒募集に関しては、オープンスクールのやり方を模倣。それから教師があるわけ、そこには必ずしも指導できた、チームを作った。		
				解釈	分掌にしないメリットは、担当者以外に当事者意識が醸成されること	教員全体へは専門家からの研修を実施	個別に伝えることも大切だが、全体で伝える事も重要、研修など	探究担当に加えて、関係しそうな教科担当参加させることにより人員確保	会議時間の設定（長時間は禁止）、事前のスケジュール配布、必要な部分だけ会議内で扱う	地域との協働が他の分掌と業務内容が異なる部分があるので、関わる他の分掌の担当と一緒に業務を行うことで巻き込みながら、結果的に負担軽減となる		
				テキスト		コーディネーターが入って来て驚くというのと若手が入っている	1人の先生に預けすぎないというところはやっぱり重要なところ	具体的な生徒のアドバイザーというよりは外部との窓口	この事業を進めるためにはその方向のすべての字士の主任の協力も必要不可欠	分掌でやった方が絶対にはその方向のすべての字士の主任の協力も必要不可欠		
				解釈		どんどん動く人が中心で、その人が動きやすい環境を作る	重人的ではない体制づくりを	外部との窓口は教員が担当	必要不可欠な人選をして、分掌、委員会などを決定するという流れ	業務量が広範囲に及び、かつ業務内容が見えない状況があるので、既存の分掌では対応不能		
高校魅力化ルーブリック	校内推進体制の整備	事前	2	3	2	3	2	2				
		事後	2	4	2	3	3	4				

6-1-3 管理機関及びコンソーシアムの実施体制、支援体制の検証に係るインタビュー結果

「管理機関及びコンソーシアムの実施体制、支援体制の検証」の検証項目に関連する質問は、学校側の「質問番号2 コンソーシアムを構築する際に、留意した点がありますか。（委員の選定、お願いの仕方等）」と「質問番号3 コンソーシアムを運営する際に、留意した点がありますか。（地域とのコミュニケーション、当日の会議進行など）」である。

構築の際に留意した点については、反省点としてコンソーシアムのために名前を貸して欲しいという打診から構築をした場合は、それ以上の関係性にはなれず、予算が終わると同時に関係性も終了してしまうと振り返っていた学校もあれば、目的・目標を決めて関係者で時間をかけてじっくり対話をしながら話し合った学校もあった。反対に、なかには、コンソーシアムを牽引してくれる人を念頭に置いて委員を選定したり、コンソーシアムの関わりだけに留まらない関わりをしたりしている委員のいる学校もあった。

運営の際に留意した点については、生徒の姿を見てもらう機会をつくった学校が多い。そして、高校生と実際に交流したことで関係者のイメージが鮮明となり、コンソーシアムでの学校側と地域側の意思疎通がスムーズになったという発言もあった。また、お互い負担にな

らないように考慮しながらも、有志の勉強会や生徒の発表会など、コンソーシアムだけに留まらない関係を構築し続けている学校が地域との協働がうまくいっていると認識している。

検証項目	対象	質問番号	年度		令和2年度					
			質問		【地域魅力化型】	【地域魅力化型】	【グローバル型】	【グローバル型】	【プロフェッショナル型】	【プロフェッショナル型】
			No.	2	3	7	8	11	14	
管理機関及びコンソーシアムの実施体制、支援体制の検証	学校	2	コンソーシアムを構築する際に、留意した点はありませんか。(委員の選定、お願いの仕方等)	テキスト	コンソーシアム会議は実施していません。	一緒に考えて、要するにある程度の学識者が入った方、専門家がいった方がきちっと体系的な学びができる	特に積極的に関わること、そうじゃないとこらってやれば 差は出ます	委員の中の起業家の方が前に引張ってください。	〇〇県の産業を語る上で〇〇(地名)は必須	県の〇〇課のお二人はやめていただきました。
				解釈	コンソーシアム会議は実施しておらず、個別に連絡	適宜、専門家からの知見を活用	委員の濃淡があるため、コミュニケーションの量は委員によって変えながら関係性をつくる	委員の中で引張る人がいる	産業界では、県内でも有名な市町と連携	目的を持った人選のため、目的が変われば辞めてもらう。情性で続けられない。
				テキスト	それぞれのお名前頂戴して、コンソーシアムとして使わせていただくという点について打診	連携先の大学には、40代若手の先生を紹介していただき、とお願いました	なかなか教員だけでは気づかないと視点を変えてみると意外な関係性がある	指導もしてくれるけど、アドバイスのところで、ここに繋ぐよとか、実際の指導で関わってくださることもある	前年度の12月とか1月の段階である程度コンソーシアムを打診していた	来年度から、学校運営協議会という組織体制に変えていくと、人数制限がございませうので、実はもう少し減らさないといけない。
				解釈	名前だけを借りていると、それ以上の関係性にならない。事業終了後、予算がなくなると同時に終了	若手で動ける人をコンソーシアムに	教員だけでは気づかない点をコンソに 補充	会議での指導や助言にとどまらず、実際の生徒への指導や外と繋いでもらってほしい	事前打ち合わせや振り返りをするのでスムーズに進む	来年度の体制を見据えた動き、国の制度を活用することを想定。
				テキスト	そういう意味で、それぞれ 濃い薄い があります	大学の生徒のフィールドになるという形で、ギブアンドテイクをはっきりさせる	お互い負担をかせずにやれる形			別の機会では、そちらの方で繋がり続けるとその就職活動については、継続的にご指導ご協力お願いします
				解釈	満了問わず委員を任命したところは、大目撃がなく位置づけも不明瞭なため、卒業終了後に継続することは困難	win-winを目指すのではなく、win-winになりそうなメンバーを選定する	お互い負担感がないようにも意識しなければ、継続が難しい			会議の委員を継続してもらうかどうかは要検討。個人でお願ひできることもあるため。
	学校	3	コンソーシアムを運営する際に、留意した点はありませんか。(地域とのコミュニケーション、当日の会議進行等)	テキスト	きるだけ授業等に関わっていたら、例えば 発表会の評議者として来ていただくとか、アドバイザーとして来ていただくとか、講師に来ていただくか、その御方の方は連絡を密に取りながら、こちらからどういったことをお願いしたいか をしっかりと伝えて、承諾いただく	はっきりどちらにもメリットがあるようなスタイルでやるってことですね。一方的にどちらかばかりでやったり、だからどちらかもういんなら負担をしながらどちらかメリットがあるみたいなことをはっきりする	学生とか教員と協働で勉強会をもう1年に何回もやったり	本校の生徒が主体的に探究活動をしている上で、地域と繋がりたい時に気軽にアドバイスをもらえたり、トラブルがあった時に色々アドバイスをしてくださる	なぜコンソーシアムを作るかっていうところきっちりとした説明する材料とか納得する材料を学校が持っていないとコンソーシアムを構築した相手側への説得力に欠けるのでやっぱりそこが一番の大変なところ	お互いに何のどっかかりもないまま、2年3年近く過ぎようとしていたところだった
				解釈	役割をつくる、こまめに連絡を取り合う	メリットをはっきりさせることで関わりやすくなる	フォーマルではない有志の勉強会	生徒の探究活動があり、コンソーシアムがある。	コンソの必要性、委員に納得感があるかどうか協力体制の土台となる	なにも接点がないと一般論や抽象的なやりとりで終わるため、具体的な連携内容が必要
				テキスト	多岐に渡ってあるので、いわゆる先生は自分から 発信の必要になる形 でこの方たちと連絡を取り合います/大きな話になってきますと、教員なり校長なり次長さんなり、と話をする	来てくださってときにできるだけ生徒の活動をききと見ていただく。実際に面談していただくながら、いろんなアドバイスをいただくようなスタイルをやっている。会議だけではなくて	お互いに負担にならない というのがあるし、やっぱりコロナでなかなか対面難しかったので、オンライン会議	県立大学とコンソーシアムを作っているんですけど、色々アドバイスをいただいたりということもありました	向こうもコンソーシアムをつくることによって自分たちにはこういう利点がありますよっていうこともききと説明しないと	事前に打ち合わせをしまして、目録を合わせておく
				解釈	基本的には、担当の教員が個別に地域側と連絡、必要に応じて管理職が窓口になるというやり方	一般論ではなく、具体的なアドバイスをもらう。そのために生徒と交流場を設ける	オンラインは委員の負担を軽減 。オンライン会議も選択肢に。	大学教授は、クラブファンやフィールドワークなど、 実践知 を共有してくれる	相手にもメリットを明確に伝達	司会進行者と会議の中心になる者が事前に打ち合わせをして目録を合わせておく
					懸念することによって、実は横の繋がりができるというのが一番大きい/団体同士が共通の何かをするようなことがこれから先、やりやすくなる	機能強化の一番の意義は委員同士の横の連携				協働依頼書という様式を作った
										地域側が学校と協働するときに、学校にとってどうかという相手の立場に立つて考える機会を仕組み化
高校魅力化ルーブリック	協働体制の構築	事前	2	4	2	2	2	1		
			4	4	4	4	4			
	協働活動の推進	事後	2	4	3	2	3	1		
			3	4	4	4	4			

検証項目	対象	質問番号	年度		令和元年度					
			質問	No.	類型					
					【地域魅力型】	【地域魅力型】	【グローバル型】	【グローバル型】	【プロフェッショナル型】	【プロフェッショナル型】
16	17	19	20	21	22					
管理機関及びコンソーシアムの実施体制、支援体制の検証	学校	2	コンソーシアムを構築する際に、留意した点がありますか。(委員の選定、お願いの仕方等)	テキスト	一気にコンソーシアム団体が出来上がったわけじゃなくて、すぐ時間をかけてつくりました。	バランスを重視して、選定していった	多様な立場の方をお願いするということを一番に考えました。	管理機関がもう令和元年のときに示している。	核になっていただいた/こういう地域の繋がりの中では最もよくわかっておられる。	目的をしっかりと決めてから人材を選定
				解釈	コンソーシアムは一気にできたのではなく、メンバー選定等含めて、じっくり話をかけてつくれた。	地元自治体、観光資源、産業界、大学などバランスよく剪定	大学・自治体、学校関係、NPOなど幅広く	県がコンソーシアムを主催、メンバー選定と窓口まで。	今の中の中でも目的に最も近い方を核に	第一に目的の明確化
				テキスト	どこかが仕切ってくださってるっていう形ではなく、同じような感じの関わり方	できるだけ学校と協働してくれる機関があるかどうか	実働部隊の方が一番ですね、協力的である	管理機関から学校に移ったというのが背景としてはある	利益は度外視してでも、地域の未来のために	二つの目的がありましたので、探究活動に関する専門家の方々を集めています。
				解釈	同じような関わり方としてコンソを設立	実際のこれまで協働をしているか、これから協働ができそうかどうか	実際に動いている方がコンソ委員の中でキーマンとなっている	予算の管理によって、主導が変わる	立場として一緒に目指したくなるゴールを共有する	目的に沿った委員を選定
				テキスト				担当者が管理機関の担当者に打診をして、了解をもらって、どういう資料を出すかであるとか、どういう議題を、協議するか、とかというのも学校がどうしたいっていうのを要するにかなり打ち出していく		
				解釈				学校が生徒の学びに活かせるか、学校として必要かを学校が判断		
	学校	3	コンソーシアムを運営する際に、留意した点がありますか。(地域とのコミュニケーション、当日の会議進行等)	テキスト	高校のコンソーシアムの方が、学校に対してどんなことを手伝ってほしいのかわからない	なんかオンラインを駆使して、発表会見てもらったりですとか、市、議会を運営したりと	継続的な開催というのはいないですけども、協力体制は維持しています。	指名はやっぱり学校がしたいけれど、任命は県がきちんとしていた方がいい。	委員の中から、言ってくれなかった。これでは意味がない。もっといいものに、良い会議にしたいといかない	1年目は様子が変わらなくてうまく回らなかったもので、2年目3年目はもう年度初めに年間の計画を全て立てて、ご連絡/月末の木曜日みたいな形で日にちを設定
				解釈	コンソ委員の役割を委員自身が認識していないと、お互いになしてよいかかわからない	コロナ禍でもオンラインで意思疎通を図る	コンソーシアムは解散、協力体制は個別に維持	学校が選定して任命まで、断れないので、任命は県がする形にしたい。任命するよりも任命をした人を変える方が難しい	会議の進め方についても委員の意見も取り上げる。批判的(辛口)な意見を大切に。	年間計画と開催日確定
				テキスト	生徒と団体の間で私どもと団体の方と顔を合わせて話ができるようになってきて、すごくうまく回り始めようという感じ	生徒が成長したっていうような意見をいただいたりとか、実際にその場で初めて、応援しているという話をすることができたり	成果発表会中間報告会といった場面には地域の方に助言者として参加していただいております。		学校側が答える報告がなくて、来ていただいた方に喋っていただいて、それに対して学校側が答えたり	会議から次の会議までの間に本校の生徒たちがやった内容を報告するような形で、それに対してアドバイスをいただく
				解釈	コンソーシアムのメンバーが、高校生と実際に交流したことでうまく回り始めた。	コンソーシアムの委員が生徒の成長実感を感じられるか、対話を取り組みへの興奮や喜びなどを聞く場面をつくれるか	コンソーシアムで繋がった方にも、個別に生徒の発表会等に参加打診。謝金ペーパで支払い。		委員が自由に学校に対して意見が言える環境づくり	目的に沿った運用
					視察にも見学に来ていただいたりして	特に大きな変化っていうのはない			前半50分以内で報告が終わってそういう形のディスカッション形式で最後少しまとめたいのがいい	時間になったらぱつと終わるような、なんかもう本当連絡会みたいな心象
					学校と関わりがある地域の人は、高校生の実感がイメージできると協働・連携が深まる	事業年度終了後も変化なし			報告は最小限に、テーマを決めてグループに分かれてワークを実施	学校とその個人・組織とのつながりから、委員同士のつながりに
高校魅力化ルーブリック	協働体制の構築	事前	2	3	2		3	1		
	協働活動の推進	事後	2	2	2	4	3	3		
			4	3	4	4	4	4		

「管理機関及びコンソーシアムの実施体制、支援体制の検証」の検証項目に関連する質問は、コンソーシアム側の「質問番号1 コンソーシアムを構築する際に、留意した点がありますか。(委員の選定、お願いの仕方等)」と「質問番号2 コンソーシアムを運営する際に、留意した点がありますか。(地域とのコミュニケーション、当日の会議進行など)」である。尚、No. 2は、コンソーシアム委員ではなくコンソーシアムの内容を認知してなかったため、データからは除外した。

コンソーシアム構築の際に留意する点は、コンソーシアムがどのような場で、委員に期待されていることがなにかを理解している場合は、協働体制がうまくいっているといえる。ま

た、評論家だけではなく、一緒に汗をかく人が委員にいとコンソーシアムが学校と地域を繋ぐだけではなく、地域のリソースも活用できて機能している。

コンソーシアム運営の際に留意する点は、利害関係が一致するような場であり続けるかである。例えば、コンソーシアムが学校の先生が持っている課題感を解決する場になるなどの場合である。また、協働の前にまず学校がどのような方向性を目指すかということも大切だとの発言も見られる。

検証項目	対象	質問番号	年度		令和2年度						
			類型		【地域魅力化型】	【地域魅力化型】	【グローバル型】	【グローバル型】	【プロフェッショナル型】	【プロフェッショナル型】	
			質問	No.	2	3	7	8	11	14	
管理機関及びコンソーシアムの実施体制、支援体制の検証	コンソ	1	コンソーシアムを構築する際に、留意した点がありますか。(委員の選定、お願いの仕方等)	テキスト		ほっとくと学校側への要望を際立つ場になってしまふ/学校のことなんだから学校がやれて多分普通の話	多様なステークホルダーを入れていく		私の役割が何なのか	内側の統制がうまく効かない。そういうところがやっぱり大きな問題で、そういうところさえしつかり位置づけができれば、外部とうまくやれていくにはこの地域でも多分できる	目指すビジョンだが、そういうところを共有
				解釈		それぞれの要望をいう場ではなく、それを仲介する人が委員に必要	コンソ委員に産業系(地域)の人も含める		員書きではなく、役割で委員を決めることで、お互いwin-win	地域協働は、内部組織や体制の問題	目指すビジョンの共有
				テキスト		学校で言にくいこともある/代弁をする	基本は、そもそも業がありある方		抽象的な原理原則の話を悪くはないのですが、大学生が今まさにやっていること、特にリアルに現実、リアルに地域の地方公共団体などやっていること、その内容と方法をわかりやすく伝えてほしい。		全体とそれが目指すゴール上、その中で自分の役割みたいなところというのを話し聞いて
				解釈		第三者(コンソ委員)が学校や地域それぞれに対して、お互い言にくいことを伝える	もともとつながりのある人であれば、高校のこともある程度は知っているのをお互い動きやすい		高校として、コンソ委員に担ってもらいたいことが非常に明確である		期待される自分の役割
	コンソ	2	コンソーシアムを運営する際に、留意した点がありますか。(地域とのコミュニケーション、当日の会議進行等)	テキスト		町行政も単立の高校のことでもあり、どのように関与ができるのか。その方向性を決めきれないことがある。それを少しベクトルを変えるようなことは特にコンソーシアムができてからは比較的意識はする	議論したい議題というものが、議題みたいなものを本当に結構骨回帰って持っている		発表を見てからコンソーシアム	1年やってみて課題が見えたときに、それを例えば分掌上の動かし方しながら、あんまり偏らないように、これを進められるように、そういう配慮しているのがやっぱりあの校内では必要	顔見知りでもなかったらのでそういう関わりを持ってたら、まあお話をする機会であったり
				解釈		立場上のスタンスの違いについて、コンソーシアムを通じて目録を合わせていく	コンソーシアムの議題についてはじっくり協議をする		発表会を見ることで、学校や生徒のイメージができることで、その後協議が促進される	毎年度、担当者が動きやすい最適な場を管理職が積極的な関わりの中から判断する	委員同士のコミュニケーションを充実することで、仲間意識の醸成、意見も言いやすい
				テキスト		実態としてのコンソーシアムじゃないんですけど、そこを両輪持っておくってことをやることがないし、実体を持っていかないと、その議論とか、その議論としてのコンソーシアムも育っていかない			そういうのをわざわざ見に行く人たちはいるんです	きちんと明確化して、必要性を確認して、なくしていく	砕けた時間みたいな会話
				解釈					発表会が委員だけに案内されているのではなく、地域住民なども広く聞かれている	前年度協議ではなく、必要ないものをなくす議論をする	会議だけではなく、会議以外の時間も
*コンソ委員ではないためデータは使用せず											
高校魅力化ルーブリック	協働体制の構築	事前		2	4	2	2	2	1		
				4	4	4	4	4	4		
	協働活動の推進	事後		2	4	3	2	3	1		
				3	4	4	4	4	4		

検証項目	対象	質問番号	年度	令和元年度							
				類型		【地域魅力化型】	【地域魅力化型】	【グローバル型】	【グローバル型】	【プロフェッショナル型】	【プロフェッショナル型】
				質問	№	16	17	19	20	21	22
管理機関及びコンソーシアムの実施体制、支援体制の検証	コンソ	1	コンソーシアムを構築する際に、留意した点がありますか。(委員の選定、お願いの仕方等)	テキスト	実際に動けるといふか他のことも兼ねるとか	力を持つようなポイントになる方というのがいらっしゃいますので、その方をまず入れていく	地域の方でも、学校との連携を構築している人たちが必ずいます			学園経歴のみで構成しない。地域の志士だけで構成しない。かたは職業は専門的にしていました	実証から、実際にその学校の学びが企業に入ったときに、どれくらい活用できるのかとか、そういった視点を言われました。
				解釈	評論家ではなく実務する人を委員に選定	声の大きい人を入れることで会議の方向性を決める	連携してくれる意志のある人を探す			評論家よりも一筋に汗をかきひとを構成員にする	期待される役割を伝達されて委員に任命
				テキスト	どっくばらん誌ができるようなメンバーになっている/前と新しい意見も出てきたり	ゴールを、目標を決めて、それに合う方を入れる	地域のキーマンを、招くことが大事			実践的なアドバイスがいただける方がいいという感想はあった	
				解釈	どっくばらん誌ができるメンバーを選定、関係性を構築	ゴール設定から委員を選定	地域のキーマンをコーディネーターに			学校側の意見を反映したコンソーシアムを構築する	
	コンソ	2	コンソーシアムを運営する際に、留意した点がありますか。(地域とのコミュニケーション、当日の会議進行等)	テキスト	行政側が考えていることと学校がピタリとマッチすれば、すぐ動ける	学校がまずやっぱりというふうにしていくか考えることが重要	協働で良い企画をするようなイベントを先の実施してしまおう			両辺に担当となる学科長の先生だとか音響も口の字の外側に座って	研究事例みたいなところからこういうんだよみたいなのを言うだけの方もいた
				解釈	利害関係が一致しそうな委員に更新し続ける	学校としてまず方向性を決める	共通理解は、会議ではなく協働で企画を実施するところからはじめる			コンソーシアム委員ではない教員の発言を促す	それぞれの立場で話をすることから、委員全体としてなにを目指すのか、どのような場なのか、どのような場なのか、どのようなかんがえが取れるのかを共有する
				テキスト	もっと深いところにウィンはある	機会によっては断るっていうことを、最初の時点で見分けるってことが必要	そういうものに委員が実際に慣れていって、高校生も引率する先生も、そういうところからなんかかたまってたという感じ			先生が解決できるアドバイスをもたらせるコンソーシアムみたいなことがいいよね	運営するのはどこのか、学校のかが、学校のかが
				解釈	利害関係の一致のその先のwin-win	コンソに断るという態度を持たせる。	協働の活動をする中で、関わる人たちが協働のイメージができる			コンソーシアムの役割について教員間で共有理解を持つ	誰がどのような想いで運営しているのか、主体はだれなのか。

高校魅力化ルーブリック	協働体制の構築	事前	2	3	2		3	1
			3	4	2	4	4	3
	協働活動の推進	事後	2	2	2		3	3
			4	3	4	4	4	4

6-1-4 ルーブリックによる実践ノウハウ集

インタビューを行った令和元年度校6校と令和2年度校6校の合計12校35名のインタビュー内容を比較して、高校魅力化ルーブリックを重ね合わせると似た発言内容が見受けられた。よって、インタビュー項目ごとに12校の学校担当者・コンソーシアム委員・管理機関担当者の発言内容を比較検討した。

高校と地域の協働について先進的に取組を進める12校がどのような考え方にに基づき、なにを实践しているのか、現場にとって有益な情報となりえるため、実践ノウハウ集としてルーブリックの表にまとめた。ルーブリック表は添付資料参照。活用方法については、6-1-6に詳述した。

成果検証4項目の質問に対するテキストと魅力化ルーブリックの数字をすべて重ねることで、項目ごとのルーブリックが完成した。詳細は、「ルーブリックによる実践ノウハウ集」参照。

例) 実践ノウハウ集

4	カリキュラムの開発	地域・社会の資源を活用した特色・魅力ある教育活動が、総合的な探究の時間等的一部分で属人的に取り組まれている。	地域・社会の資源を活用した特色・魅力あるカリキュラムが、総合的な探究の時間や課題研究・学校設定教科・科目等においては、系統的・組織的に取り組まれている。	地域・社会の資源を活用した特色・魅力あるカリキュラムが、総合的な探究の時間等と各教科・科目を相互に関連付けながら教育課程全体として、系統的・組織的に取り組まれている。	地域・社会の資源を活用した特色・魅力あるカリキュラムが、教育課程外の取組とも相互に連携・関連付けられながら学校全体として、系統的・組織的に取り組まれている。
---	-----------	--	--	---	--

学校	【進め方】 教員と地域住民の役割の明確にする。(例)教員は生徒の注意を惹きつける等	【進め方】 学校内で発表会を実施することで、生徒の成長実感を教員内で共有する。	【進め方】 学校内で発表会等を実施する際に、地域の協力者を招待して、生徒の成長実感を共有する場をつくる。	【進め方】 業務負担軽減のため、人的資源の再調整をする。(外部講師活用含む)
----	--	--	---	---

6-1-5 ルーブリックによる実践ノウハウ集 活用方法

実践ノウハウ集は、現場を後押しするために、どのような段階でどの主体がどのようなことに取り組んでいるかを整理した。



6-2 持続可能な体制づくりにおけるパターンとプロセス

成果検証項目には該当しないが、令和元年度6校と令和2年度校6校をインタビューしたことにより、事業終了後の高校と事業継続中の高校の対比をすることができた。

6-2-1 持続可能な体制づくりに係る項目のインタビュー結果

成果検証の4項目ごとにインタビューのテキストと解釈を令和元年度校6校、令和2年度校6校をループリックと重ねた。

検証項目	対象	質問番号	質問	No.	2	3	7	8	11	14
持続可能な体制づくり	管理機関	11	事業を継続もしくは拡大するための人員配置もしくは人員確保についての取組はなにかありますか。(コーディネーターへの予算措置など)	テキスト	そういった話、確かに聞くんですが、ただ県の考え方としては、引き継ぎの件については予算というものは基本的にはない	人事について、別の採りになってくる	地域との連携に関する事業がちょっと別にあるが、内容はわからない	強く希望しています	この事業として先生方が、スキル、その部分をコーディネーターとしてスキルを上げた	交付金がありますので、そういったところで続けてやっていく
				解釈	県の予算はなし	人事は、現場からの要望があれば、人事担当保へ伝達するという働きかけをしている	高校教育ではなく、社会教育の方面から予算の確保等も検討した	学校から強い要望はある	本事業においてコーディネーターの機能を高めた	国の交付金を申請している
				テキスト	学校が市の方へお願いといいますが、紙をしている	学校の意見を尊重していただくように促す	今そこまで把握してなくて申し訳ないです。	お互い継続的にやるためにはやっぱり謝金も必要なのかなと思ったり	高校から要望もない	例えばNPO法人のどっかの財団にコンサルに入っていたら、そういう財源を確保したり
				解釈	市はCNを配置済み。学校から市町村への働きかけ。市町村の取組の構想にも高校が入っている。	管理職に相談先を紹介している	今後の予算等の動きは把握していない	継続的にするには、最低限のお金、謝金は必要という認識。	必要がないから要望もない	なにが課題かは認識している。
	管理機関	12	本事業終了後の事業継続について、なにか財政面で準備をしていますか。(していましたか)	テキスト	現在のところはない。学校側からも要望というのには聞かずに聞いているんですけど	昨年度あれだけ地域の人が来て、授業している	文科省のWWLのコンソーシアム構築支援事業に申請する予定	ないです。	県全体としては持続可能な地域作り充実事業というものを	昨年度まで全ての県立高校はコンソーシアムを設置
				解釈	学校の要望はある(講師謝金と交通費)が県としては予算はない。必要性は理解している。	免許を持っていない人も授業ができる制度を活用。年間200時間近く実施。謝金は県の事業を活用。	文科省の別事業にアプライ	財政面の支援の準備は一切ない。	以前から持続可能な事業の取組はあった	コンソを設置済み。予算と共に
				テキスト	どうしても講師の方呼んだり、あと生徒をいれたいと進んでくるので、やはりどうしてもお金が必要	特別非常勤講師の配置については別の採りになってくる。どういふふうな制約を設けているのかとか、どういふふうなやりくりをしているのかっていうのはちょっと具体的にはわからない	県の事業で同様の取組をしているような事業があるので、そこで何とかできないかっていうところ	そうですね。	部の学校で一律にできていないので、学校の方からどういふところに対して	一律です。ただ申請をしていただくと、それにきちっと審査をして、あとは結果報告という流れ
				解釈	講師謝金と生徒引率は必ずお金がかかる	担当者でも内容はわからない	国や県、県の中でも高校教育、社会教育、中山間地方創生系など、様々な予算措置の検討をしている	お金はないがコンソーシアムは残していく方向	手上げ制として学校が主体的な動きをしている	各学校に一律の予算措置
			状況	市町がCN配置	・市町がCN配置 ・県の特別非常勤	・国、別の予算	なし	なし	・県がCN及びコンソ(国の交付金)	
			有無	—	○	○	○	—	○	
			コンソーシアムの有無	状況	一度も集まっていないにもかかわらず、集まっていると報告書に記載がある	委員はsghが母体	委員はsghが母体	一度も集まっていないにもかかわらず、集まっていると報告書に記載がある	以前よりコンソは設置(県の施策)	
高校魅力化ループリック	協働体制の構築	事前	2	4	2	2	2	1		
			4	4	4	4	4			
	協働活動の推進	事後	2	4	3	2	3	1		
			3	4	4	4	4			

当者に積極的な働きかけを行っていた。つまり、自身の担当領域外であっても、別担当者へ折衝などを行っていた。さらに、コンソーシアムの委員等に首長部局担当者を選んで会議等に出席してもらうことで、当事者意識を高めている事例も見られる。その際、委員としてではなくアドバイザーやオブザーバーなど必要に応じた立場での参加を促していた。

次に、高校が設置されている自治体の予算確保をした高校は、同様に高校から自治体へ強い要望を複数回行っていた。その際、要望の内容や実際の想定される予算額、それによって地域にどのようなアウトカムが生み出されるのかなど明記し、伝達している高校も見られた。またコンソーシアム委員に自治体の関係者を任命し、当事者意識を高めていた。一方、自治体は、町づくりの方針として高校の支援を総合戦略等の行政計画に明記することで、予算確保をしていた。

予算の確保ができなかった高校や地域については、コンソーシアム継続が困難であるため、解散していたり、謝金はなくボランティアで縮小して継続しているケースも見られた。管理機関担当者については、担当領域以外の業務には消極的な姿勢が見受けられた。

尚、これは、この働きかけをしたら予算措置があるということではなく、予算措置をしている各学校や各管理機関は、このような動きをしていたという事実を記述している。

持続可能な体制づくりにおけるプロセス

分析結果	令和2年度校	令和元年度校	実態	そのための働きかけ	備考
継続して国の別事業	1	0	・復興予算		・特例
県の予算	1	3	・県がCN及びコンソを設置（市町と折半、交付金） ・県の指定校（2校）、コンソは謝金、コーディネーター謝金（減額1/3程度） ・県の予算（部活動謝金、特別非常勤講師など）も必要に応じて措置	・県の教育ビジョンに明記 ・高校から管理機関へ強い要望 ・管理機関担当者が財政や首長部局にロビーイング ・コンソーシアム委員に首長部局担当者を任命（アドバイザーとして参加） ・管理機関担当者が中山間や地方創生、などの担当者にロビーイング	
自治体の予算	2	1	・自治体がCNを予算化（地域おこし協力隊、役場の職員）	・高校から自治体へ要望 ・自治体の方針、地方創生・町づくりの観点から支援 ・自治体の総合戦略等に明記（高校の支援等） ・コンソーシアムに自治体の関係者を任命（事業開始当初からの巻き込み）	
予算なし	2	2	・コンソーシアムは継続が困難 ・謝金なしでコンソーシアムを継続している		・担当領域外の業務に消極的（共通）
合計	6	6			

6-3 事業による現場の変容及び事業への意見（事業の改善点）

事業への意見を学校担当者、管理機関担当者、コンソーシアム担当者全員にインタビューをした。全35名のうち特に意見はなしの2名を除いた33名から回答を得た。

6-3-1 事業による現場の変容に係る項目のインタビュー結果

学校は、半数が地域協働の価値を再認識している。担当者だけではなく、学校全体で地域協働への意識の高まりがあったり、学校だけではなく地域側もそれを感じている。本事業がきっかけとなったり、後押しとなったという発言が見られる。また、継続性については、本事業で関係性が構築できたため、今後も継続できそうだと感じている高校もあれば、3年間の事業が終わって自走化は難しいと感じている高校もある。

コンソーシアム側は、地域側にとっても意義があったと感じている。また、学校と同様に継続していく難しさを感じている人もいる。

管理機関は、2つの機関が無回答であったが、残り10の機関のうち半数が地域協働の価値を再認識している。県教育委員会として地域協働の価値を再認識し、実践したことで方法を学べたり、新しい学力観への転換の必要性を考えるきっかけになったという発言も見られる。

詳細は、添付資料を参照されたい。

6-3-2 事業による現場の変容にかかる項目のインタビュー集計

色分け	人数	割合 (33人中)	メモ
継続性（事業期間・予算）	7	21.21%	5人に1人
予算の弾力性	5	15.15%	
教員の成長実感	4	12.12%	
生徒の成長実感	3	9.09%	
地域協働の価値を再認識 (コンソやコーディの価値)	15	45.45%	半数近く
学校間交流（教員・生徒）	3	9.09%	
応募期間の短さ	1	3.03%	

要約すると以下3点となる。

- ①関わったすべての教員やコンソ委員が地域協働や探究学習の必要性を認識もしくは再認識した。地域の捉えが変わった。
- ②高校においては、4分の1の教員の教育観が変容した。
- ③コンソ委員においては、3分の2近くが変容したという発言があった。

6-3-3 事業前から事業後の変容（一例）

詳細については、参考資料6-3-1の通りであるが、一部を抜粋する。

【学校側】

- ・最初は担当者に任せっきりだったのが、徐々に話し合いに参加して建設的な意見を出してくれるようになった。
- ・初年度は探究に対してやらされている、別にやらなくてもいいだろうっていう空気感が多かった。
- ・初年度、私もゴールが見えないまま走っていった感じになります。／元々探究自体がゴールがないことなので、今思えばゴールがなくて不安なのは当然なことで、それは当然そういうふうを受け取るようになりました

【コンソーシアム側】

- ・最初のときはやっぱり温度差はかなり大きかったので、〇〇先生とかとやろうという先生たちと、なんで自分の担当科目以外のことをやらなきゃいけないんだっていう先生があらさまにいましたので、それは変わりましたよね。
- ・まず、学校の教員から反対意見がなくなりました。
- ・進学のためには地域活動なんて、邪魔だよねっていう人たちの意見をなくしていった。
- ・先生たちも、最初はもうこれやると忙しいのよって言っていた。

6-3-4 事業への意見（事業の改善点）

詳細については、参考資料6-3-1の通りであるが、要約すると以下となる。

- ・ほぼすべての担当者が事業内容には満足・感謝しており、本事業によって地域との協働が飛躍的に進んだと発言した。
- ・3校に1校が特に生徒の成長実感もしくは教員の成長実感を感じている。
- ・令和元年度の4校が事業期間（3年間）について言及しており、事業期間の延長・予算の継続支援を希望している。（令和2年度校は該当なし）
- ・3校に1校が予算の弾力性に言及しており、現場に対応した柔軟な予算編成を希望している。
- ・事業期間中に教員同士の交流や生徒同士の交流を希望している高校も若干数みられる。
- ・公募から応募までの期間の短さに言及している高校が1校みられる。

6-4 コーディネーターの実態・影響と求められる役割

成果検証の4項目には該当しないが、運営指導委員会からの助言から、コーディネーターの実態等についても分析を行った。令和元年度6校と令和2年度校6校、合計12校35名からインタビューを実施したが、今回はコーディネーターではなく、コーディネーターを取り巻く学校担当者や管理機関担当者、コンソーシアム委員にインタビューをしているため、コーディネーターに対しての客観的な意見となっている。一方で、コーディネーターとの関係性が統一されていなかったため、関係性が深い場合は、発言が具体的な内容となり、関係性が希薄な場合は、抽象的な内容、もしくは、内容を知らないという結果であった。

6-4-1 コーディネート機能についてのインタビュー結果

学校には「コーディネーターの任命理由は何ですか。」「コーディネート機能は、だれが、なにを担いましたか。学校との関わりの度合いはどのくらいですか。また、どのくらいが適切だと思いますか。」「コーディネート機能によって、学校になにがもたらされましたか。」の質問を行った。コンソーシアムと管理機関には、「コーディネート機能は、だれが、なにを担いましたか。学校の関わりの度合いはどのくらいですか。どのくらいが適切だと思いますか。」「コーディネート機能によって、地域になにがもたらされましたか。」の質問を行った。要約は次項の通りである。

詳細は参考資料を参照されたい。

6-4-2 コーディネーターの実態・影響とコーディネーターに求められる役割

要約すると次のようになる。

【学校】

- ・教員の75%がCNの存在によって「地域との協働が促進された」と感じている。
- ・教員の25%がCNの必要性を感じていない。(グローバル型1校とプロ型3校)ただし、これらの学校は「CNがほとんど関わっていない」「担当がCNを認識していない」状況が見受けられる。
- ・CNの必要性を認識している教員の75%が業務の負担軽減を実感している。
- ・専門科高校はコーディネート機能を持つ教員が複数おり、CNには高い専門性を求めている。
- ・CNは、地域との接続による授業サポート、放課後等の地域行事への支援、生徒募集等の広報に従事している。一部、カリキュラム開発に関わっているCNもいる。
- ・CNは、専業や副業など働き方が多様である一方で、CNと関わりの多い学校の8割弱は、CNの専業を希望している。
- ・CNの働き方は、フルタイムを希望しカリキュラム開発なども役割として期待する一方で、教員の領域に入ることは、教員の反発を招いたり教員の当事者意識低下に繋がったりと懸念する発言も見られる。

【コンソーシアム委員】 【管理機関】

- ・半数弱が学校へ連絡するハードルが下がったため、地域との関わり代が広がったと感じている。
- ・これまで交流のなかった地域住民同士の交流が生まれるという副次的な効果も見受けられる。
- ・CNによって、多くのつなぎ先の中での最適化を図ることによって、地域側への負担を少なくする効果も見受けられる。
- ・地域の半数弱が高校の今を知ったり、高校生の現状に触れることで高校や高校生を再認識し、これまでの高校を見る目が変わり地域や社会の構成員の一員として関わるようになった。
- ・管理機関の半数強が業務負担の軽減を感じるとともに、地域の繋がりが促進されたと感じている。

6-4-3 コーディネーターを活用するための効果的な要素

参考までに、コーディネーターに関するループリック1もしくは2の学校の取組とループリック3もしくは4の学校の取組を整理すると次のようになる。

高校魅力化ループリック3,4の学校の取組

- ・CNの役割が明確であり、学校側にもそれが共有されている。
- ・学校が連絡をとりたいと思った際に、適宜意思疎通が図れる。(SNSを活用等)
- ・職員室にデスクが用意されている。
- ・週1や隔週など定期的な会議等が設定されている。
- ・CNが学校の教育活動や文化、進め方への理解度が高い。
- ・CNとやりとりをする学校内の体制が確立されている。
- ・学校内にもCN的な機能を持つ教員がいる。

高校魅力化ループリック1,2の学校の取組

- ・CNの存在が学校内で認識されていない。
- ・管理機関が主導してCNを決定している。
- ・CNは学校に常駐しているが、職員室ではなく別室にいる。
- ・地域協働は教員がやるべき業務と認識している。

6-5 高校魅力化ルーブリックと高校魅力化評価システムの比較

大人のセルフチェックによる高校魅力化ルーブリックと、生徒のセルフチェックによる高校魅力化評価システムによる資質・能力の伸長の数値を比較した。傾向までは読み取れなかったため、事実のみ記述する。

総括すると、大人の手応えである高校魅力化ルーブリックのセルフチェックと「生徒の資質・能力の伸長」は、高ければ高い、低ければ低いという結果となっている。よって、両方の数字があれば妥当性は高まるといえる可能性がある。

6-5-1 令和元年度校の高校について

- ・No. 19 (+11.2%) の伸びが顕著に見られる。学校側のルーブリック評価平均が高い、カリキュラム開発などがすべて4である。
- ・No. 17は2番目に伸びが低い、ルーブリックのカリキュラム開発・学校内体制・協働体制運営の値は3である。
- ・R1の学校は、R4 (R2入学-R4) の高校生の資質・能力が鈍化したのは、No. 22とNo. 17である。ルーブリックの事業後の平均値が最下位 (3.00) と2番目に低い (3.18)。事業前からの伸び幅も最下位 (0.82) と2番目に低い (0.91)。学校の文化になっていない可能性が見受けられる。

6-5-2 令和2年度校の高校について

- ・No. 11 (3.55) で2番目に高い、12校の中でも4番目に高い。目指す学校像の策定・浸透、カリキュラム開発が4を示す。

6-5-3 令和元年度・令和2年度校の高校の共通項

共通

- ・No. 14は、事業前のルーブリックが一番低い (1.45)、学習環境も一番低い。
- ・No. 3は、事業前のルーブリックが一番高い。魅力化評価システムの学習環境も一番高い。入学時点から3年生までの資質・能力の伸び幅は2位となっている。
- ・No. 2は、事業後のルーブリック平均が12校で一番低い。生徒の資質・能力の伸長も一番低い。

第7章 全国サミットと成果検証報告会

好事例の収集、好事例要因の分析及び提供を目的として、全国サミットと成果検証報告会を開催した。しかし、調査及び分析でも触れた通り、好事例かどうかを判断することはできなかったため、地域との協働を進める高校の事例発表会となった。発表の要点及び運営指導委員からの講評、そして、アンケート結果を紹介する。

7-1 全国サミット

令和5年1月17日に、令和4年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」全国サミットを開催した。令和2年度の地域協働推進校14校がグループに別れて取組の発表を行った。

7-1-1 全国サミットの概要

・日時

令和5年1月17日（火）15：15～15：30

・目的

地域課題の解決等の探究的な学びの取組を通して行ったカリキュラム開発等の研究成果について、指定最終年度(令和2年度指定)の地域協働推進校による発表を行うことで広く公開し、普及を図ることを目的とする。

・対象

- (1) 地域協働推進校(管理機関の担当者・地域協働推進校の教職員・その他事業関係者)
- (2) 事業特例校(管理機関の担当者・事業特例校である高等学校等の教職員)
- (3) アソシエイト(管理機関の担当者・アソシエイトである高等学校等の教職員)

・開催方法

オンライン

・当日のプログラム

13：15 開会

13：15-13：20 開会挨拶

13：20-15：20 取組発表（発表15分、質疑応答10分、切替5分）

15：20-15：30 諸連絡

・発表内容

- (1) 研究開発したカリキュラム等の研究成果

※次の内容も含める

学校内の体制及び学校外体制(コンソーシアム)構築における成果と課題

コーディネーターについての成果と課題

- (2) 今後の展望(事業終了後の取組、自走の方向性)

7-1-2 当日の参加者について

- (1) 地域協働推進校(管理機関の担当者・地域協働推進校の教職員・その他事業関係者) 38名
- (2) 事業特例校(管理機関の担当者・事業特例校である高等学校等の教職員) : 13名
- (3) アソシエイト(管理機関の担当者・アソシエイトである高等学校等の教職員) : 33名

7-1-3 発表内容と運営指導委員講評

グループ①【地域魅力化型】

○ 福井県立三国高等学校

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026799_2.pdf

<発表内容>

- ・ 地域活性化に資するプロジェクトを地域人材と協働で実施し、実践的な探究学習を行うことで、生徒の当事者意識を育み、地域の未来を創造する力を育てることを目指した。
- ・ 課外活動では、地域探究同好会を立ち上げ、地域団体や、大学と連携して、地域との交流活動に取り組んだ。
- ・ 学校内では、地域協働プロジェクト推進室をおき、管理職2名、教務3名、各学年3名、事務1名の計9名で事業の推進に取り組んだ。スクールポリシーを策定したが、浸透していなかったため、事業のなかで意識づけを強くしていった。
- ・ 課題としては、コンソーシアムで外部との関係ができたが、コンソーシアムメンバーの横のつながりが弱い。また、コーディネーターを配置したが、時間数が限られており、連携業務が重なった際に弱さがある。
- ・ 今後は、スクールポリシーをもとにカリキュラムマネジメントを推進し、各授業へ反映していく。また、坂井市で、高校への支援事業が立ち上がる可能性があるため、それにチャレンジする。

<質疑応答/講評>

(藤岡委員) 地域の魅力化という言葉があったが、具体的にどうなっていたら地域が魅力化されたと考えているか。

(回答) 人口が減っていく中で、地域の魅力について支えられるような人材を輩出できれば本校ができる魅力化だと考えている。

(参加者より質問) 地域に対してよく思っていない生徒もいるかと思うが、三国高校では、どのように生徒の前後の変化があったか。

(回答) はじめは空き家を使って自分達のやりたいことへの意識が多かったが、様々な地域の大人との関わりが生まれる中で、魅力を知り、より知りたいと思う生徒や、課題を感じる生徒も生まれてきた。

○ 東京都立八丈高等学校

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026799_1.pdf

<発表内容>

- ・ 地域への当事者意識の育成を目指して、八丈学を中心として実施した。町役場や、民間人材の方が、地域学校学習実施支援員となり、授業開発、地域とのコーディネート、広報に関わって頂いた。1年生では他校交流により、生徒の自己理解が進み、2年生では、島民への発表に向けての活動で当事者意識の芽生えが見られた。3年生では、個人で地域開発のアイデアを考案した。
- ・ 成果として、学校と地域の相互理解が進み、授業には地域の視点が入り、地域に出やすくなった。また、地域の方が生徒の成長を助けてくれるようになった。生徒も自主的な動きが増え、探究活動を教員、生徒ともに楽しめるようになった。
- ・ 課題として、地域学校学習実施支援員は、裁量がなく物事を進めるのが難しく、勤務体制が確立していない。八丈学の認知度は、地域では低く、関われる方が限定的である。持続的な財源が困難であり、教員の負担が大きく、情報共有の仕組みが弱い。
- ・ 今後の展望として、支援員が職員室の一員となっているので継続していく。小、中、高で一貫して関われる地域学校学習実施支援員になればいいと考えている。小中高での系統的な八丈島の探究的な学びを実践したい。継続のための仕組みづくりを行っていく必要がある。生徒、島民、教員が、八丈高校で良かったなと思えるように取り組んでいく。

<質疑応答/講評>

(藤岡委員)

様々な大学や企業、地域が絡めて、教育活動が充実していった。当事者意識が低いというところに、3年間で焦点を当てて伸ばしていくところもよかった。当事者意識は向上させたところがあるが、どのように向上していったのか。

(回答)

当事者意識が上がるのは、島民会議の場面である。話し合いと提案の中で「ここはどうするの」と地域から突っ込みが入る。その解決の過程で、お金やシステムが大切だと、子どもたちが考え、それを乗り越える中で、当事者意識が上がっていると考えている。

○ 兵庫県立村岡高等学校

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026799_3.pdf

<発表内容>

- ・ 兵庫県の美方郡香美町に学校は所在しており、生徒数は133名である。普通科と、地域アウトドアスポーツ類型に分かれている。地域と協働した実践的な取組で郷土愛を育むとともに、「人づくりネットワーク」を構築し、未来型人材を育成する。地域の現状を理解し、地域課題発見・解決に寄与する学びから「新たな地域資源を創造する」意欲を持つ生徒の育成を目指す。
- ・ 地域アウトドアスポーツ類型では、学校設定教科「地域探求」を行い、講義や地域での調査実習を経て、地域活性化プランの発表、SNSでの情報発信、町長との対話などのまとめをする。全校生では、民藝、吹奏楽、食文化、環境A、B、地域福祉、紙漉き、集落調査の8グループに分かれて活動を行い、村高フォーラムという発表会を実施した。
- ・ 成果は、人づくりネットワークが構築できた点、地域活性を促すツールの作成と活用（村高元気体操のDVDやふるさと教育教材）ができた点である。
- ・ 高校魅力化評価システムでは、2020年度から2022年度で、高校卒業後、地元に貢献したいという生徒の割合が、+6.1ポイント増加した。「グループで協力しながら学習や調べものを行うこと」や、「挑戦する人に対して応援する雰囲気がある」という項目のポイントが高い。

- ・ 課題は地域協働活動の教育効果をさらに中学生や保護者に伝えていく点、指定事業終了後の自走のため、官民学協働のネットワークづくりにさらなる促進が必要な点である。

<質疑応答/講評>

(藤岡委員)

十数年取組を継続されてきたことを聞いている。地域を育てる学力を育まれている点、ゲームやカルタなど、実際のものづくりに繋げている点、自分達が行動してものを創る、という点が素晴らしい。自分達が動けば地域が変わっていくということを感じてもらっているのではないかな。

香美町がどういう風になっていけば、地域が育ったという状態なのか。

(回答)

町の住民主体のまちづくりの内発的な発展を促していく。地域に学び、地域と協働しながら、住民主体のまちづくりに関わっていければと考えている。

グループ②【地域魅力化型】

○ 島根県立矢上高等学校

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026799_4.pdf

<発表内容>

- ・ 学校は邑南町に所在し、1学年普通科2クラス、産業技術科1クラスからなる、全校276名の小規模校である。町民の奉仕と寄付により開学した歴史がある。地域住民と関わる中で、課題を見つけ、多様な人々と協働し、教科や地域の歴史や文化といった様々な知恵を結集させ、課題解決を实践するカリキュラムを開発した。令和4年度の取り組み内容は、「矢高モデルの確立～いつでも、だれでもできるカタチへ～」を掲げ、人が入れ替わっても続く形づくりに取り組んだ。
- ・ 「矢上高校魅力化推進センター」および「コンソーシアム事務局」を配置し、事業を推進できた。初めての探究の担当になる教員に、ツールや成果物を資料として探究の形がわかるようにした。1年間の流れが見える、探究チャートを発行した。教科横断の取組が単発になりがちなため、土台の構築として、総合的な探究の時間の効果的な実施に向けて、各教科で何ができるか、教員同士が話し合う機会を作った。カリキュラム開発等専門家から短時間でも継続した研修が有効だとアドバイスを頂き、1時間の教員研修よりも、毎月の職員会議の後に、10分～15分の短い時間での研修を行うようにした。探究への伴走、声かけの仕方、協調学習等について学んだ。
- ・ 地域の方へ継続して生徒へ関わっていただく「協育パートナー」制度を作り、地域の方が、年間を通して、生徒に伴走をしていただく形を作った。協育パートナーへの研修を行い、目線合わせを行うようにした。協育パートナーと生徒のやり取りを、グーグルクラスルームで行い、やり取りが見える形にした。
- ・ 自走体制の構築として、教育課程外で、地域との協働活動が行える体制として、地域系部活動「食と農研究会」を設立した。土日に地域へ出やすくなった。邑南町の基礎情報や、身につけてほしいスキルまたポータルサイトを作成し、過去の探究活動がわかるようにした。ボランティアボードを作成し、生徒が地域活動に参加しやすい情報共有を行った。シンポジウムの開催では、こんなことしたらいけなかったという失敗を共有している。
- ・ 交通費や試作品の製作費等の確保が課題である。

<質疑応答/講評>

(樋田委員)

協育パートナーが、どのような方なのか。また学校の教育方針との考えの擦り合わせをどのように行っているのか。

(回答)

地域の企業の方や、役場の方、地域で活躍されている方をお願いしている。4月に研修を実施し、学校の狙い、想いを伝えて、地域からの質問も受けて、擦り合わせていく場所を作った。じっくりと話をする場を設けて、その後も、すり合わせを行うことができた。

(樋田委員)

協育パートナーの伴走が、中長期で高校生に関わっていただける形が作れているところが素晴らしい。

○ 高知県立大方高等学校

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026799_5.pdf

<発表内容>

- ・ 黒潮町唯一の普通科高校であり、全校生徒は82名である。半数は近隣の市町村から通学している。教職員の共通意識を持つために、年間計画（グランドデザイン）の設計が重要であると気づき、2年目から専門家を招き、作成のノウハウを蓄積した。その後も見直しを行っている。
- ・ 課題は2点。1つ目は、校内推進体制の整備。統括主任と各学年の担当者の4名を中心に行っている。グランドデザインの設計、打ち合わせの主権、専門家との定期的な打ち合わせ、担当者同士の共有会を行っている。通常の業務時間で収まらない状態である。本事業終了後も、研究を継続する必要から、現在の体制ではなく、分掌業務として位置付けて、学年担当を1名から2名に変更する予定である。
- ・ 2つ目は、教員の探究学習に対する意識改革。ほとんどの教員にとって、大きな意識改革が求められた。担当者も3年間学び続ける必要があった。個々の生徒にどうアプローチするか、それぞれの専門性を活かす関わりが必要であり、教員自身の探究が必要である。打ち合わせ会が場当たりにしか行っていないため、今後改善していく必要がある。2年目以降、徐々に、グランドデザインの作成と運用がぶれずに実施できた。
- ・ 課題は、ほぼ1人の教員がカリキュラム運営を担っているため、複数人での体制づくりが急務である。今後は、専門家や地域の方との人脈が広がり、知見が広がった。これを今後の教育活動に展開していく。

<質疑応答/講評>

(樋田委員)

大方高校の強みを掴み、あるもの探しをされている点が良い。質問として、どのような人脈がどのように広がったか。どのような知見がどのように蓄積されたか。

(回答)

カリキュラム開発等専門家の高知大学の先生に、色々な方、東京や高知、企業の方、さまざまな方を紹介いただき、複数回アドバイスを頂いた。教員の研修においてもそうした方と関わりを持つことができた。防災についても、京都大学の支援を得て、講師を呼んでいただいたり、防災に関わる役場との繋ぎをしていただいた。

学校からアプローチが取りにくい方も間に入ってもらうことで、その後は、ネットワークが広がり、カリキュラム作りに活用することができた。

(参加者の質問)

生徒の見取り、評価をどのようにされているのか。

(回答)

学習の最初に、目あて、評価規準も生徒に示し、ルーブリックで評価を行った。コンソーシアムの委員の方にコーチングに入ってもらい、生徒に活動成果を返してもらうこともある。

○ 長崎県立松浦高等学校

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026799_6.pdf

<発表内容>

- ・ 松浦高校は令和4年度から普通科を地域科学科に再編しており、現在は地域科学科80名、商業科40名の学校である。
- ・ 本事業では、松浦市から平成25年から支援を受けている。課題解決型学習「まつナビ」を3年間のカリキュラムとして開発し、その体制づくりに取り組んだ。目的は、地域を愛し大切にす姿勢の育成と、課題解決能力の育成である。
- ・ 1年生では、探究のスキルの習得や、地域を巡るバスツアーやまち歩きを行い、課題研究のテーマづくりを行う。2年生では、1年生での設定テーマをもとに、課題研究の構想を練り、フィールドワークをし、中間発表を行って、実践活動に移り、地域に向けた発表会も実施する。3年生では、研究論文と提案事項の校外実践である。
- ・ 成果として、提案にとどまらず、実践を行う生徒が増えている。また、キャリア形成にも繋がりは始めている。
- ・ 地域課題解決学習を支援する体制づくりでは、コンソーシアムを構築したことで、生徒のプロジェクトに、委員が関わってくださった。コーディネーターには、マッチングやフィールドワーク等の教職員との打ち合わせ、校内プロジェクトチームの会議参加や、生徒への探究活動サポートを実施していただいた。
- ・ 課題は、学校と地域の協働のマッチング体制の充実、新しい学びへのマインドセットの充実である。キャリア形成をゴールとした見通しを持った研究活動を進め、小中学校との縦の繋がりも構築していきたい。

<質疑応答/講評>

(参加者の質問)

コーディネーターの詳細をお聞きしたい。また地域マッチングをどうしているか。

(回答)

前々校長先生がコーディネーターである。

アポは生徒が取るようにしている。生徒がアポを取る点について、地域の方とは、既につながりができており、熱心に対応を頂いており、大きなトラブルは起きていない。

(樋田委員)

ルーブリックの項目はどのように作成しているか。生徒自身が作る部分はあるか。

(回答)

長崎大学の先生と半年かけて作成した。現在は、継続して使用しており、次年度以降マイナーチェンジをしていく予定である。

(樋田委員)

小、中学生の出前授業をされたということで、それも生徒にとっては自分自身のキャリアを考える機会になったのではないか。

(回答)

卒業生からは、それぞれの進路において、自分のことをしっかり語れるという声を聞いており、活動がキャリア形成につながっていると、手応えを感じている。

グループ③【グローバル型】

○ 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

https://www.next.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026804_1.pdf

<発表内容>

- ・ 原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーの育成に取り組んだ。原子力災害によって、5つの学校が休校となった中で、前例のない状況から新たな地域社会を作るために、本校が創設された。開校時から探究に力を入れて、カリキュラムを開発してきた。
- ・ 成果として、1つ目に中高6年間で連動した探究カリキュラムの開発を行った。4年前に中学校が併設され、今年の1年生が初めての持ち上がりの高校1年生である。3年間すでに探究の基礎をやってきた高1生と、新たに入ってきた生徒が合流する。一体的に指導するためにどうすれば良いか、という観点で取り組んだ。
- ・ 1年生前半のカリキュラムで、一貫生が高入生を巻き込んで、取り組んでいくプログラムを作った。演劇と地域課題の課題発見ワークショップを連動して実施した。課題に遭遇し、そして演劇を創作するプログラムである。背景とその課題の要素を構造化するという取り組みだ。
- ・ 2つ目の課題は、地域課題の解決の伴走はノウハウを積んできたが、理系の調査探究の側面が弱い。地域課題型のワークシートと、調査探究型のワークシートを開発し、探究プロセスの可視化を行った。
- ・ 3つ目は、地域連携事業を面的に拡大した。双葉郡の8町村全ての方と探究を行うことができた。最初は演劇のためお話を聞くところから始まったが、徐々にプロジェクトを一緒に行う形へ発展した。また、早稲田大学との協働が強まった。ふくしま学会というものを一緒に開催し、高校生と大学生、大学の先生の発表、対話が行われている。またリエゾンマネージャーとして、生徒の探究に関わっていただいている。また、カタリバと連携をおこなっている。本校ではカタリバさんが常駐して校内で活動しており、探究についての会議に入っただき、一緒に伴走体制を作り出している。
- ・ 地域と海外の課題を重ね合わせて考えるプログラムを実施している。コロナ禍では、オンラインプログラムや、日本にいる国連本部職員に双葉郡のバスツアーを行った。今年はドイツ研修を実施した。
- ・ 成果としては、探究フェイズに応じて教員の関わり方のモデルを構築した。前半では、事実きちんと当たらせるインストラクターとしての関わり、問いが出てきたら調べてきたことを語らせてブラッシュアップをするファシリテーターとしての役割、後半では、探究に声かけをして励ますようなメンターとしての役割を考えた。先生の得意不得意や、この3段階が、段階的に進むと言うよりも常に役割を変えながら伴走をしていくという形である。また、一緒に対話し、共に作っていくジェネレーターとしての関わりも重要であることが発見された。
- ・ 今後の展望としては、WWLへ申請をし、さらに生徒の能力を伸ばしていきたい。また教科横断的な学習と、総合的な探究の時間との往還関係を構築する研究をしていきたい。地域復興と教育の相乗効果を生み出す探究学習は引き続き行い、学校と生徒だけでなく、地域の方々にとって、生徒の探究が良いのかどうか測定していきたい。探究に伴走するための研修について、ど

んなに忙しくても目線合わせの時間は必要不可欠である。働き方改革の中で、何を残し、何を削るのかは再度見直していきたい。

<質疑応答/講評>

(岡本委員)

外部連携に関して、非常によく行われている。

質問は、学習指導要領では、本人の生き方在り方と一体的で不可分な課題となっていると思う。自分の進路との関連性が重要になる。地域というものと、進路の掛け合わせや、全く関心がない子への対応など、どのようにお考えしているか。

(回答)

必ず地域のことを探究しないといけないのかという声もあった。スポーツに特化するコースもある。地域への関心が高くない層もいる。アスリートコースの生徒は、能力の向上やチーム力の向上など、自分の取り組んでいるスポーツを題材とすることで、モチベーションが上がってきた。地域はあくまでフィールドであり、地域を通して世界を見ていくことが大事だと伝えている。進路で外に出る子や海外に出る子、ガッツリ噛み合わせるというよりは、自分のやってきたことが人々にどのように影響を及ぼすだろうかと問いを投げている。

(岡本委員)

探究を深めていく時の問いの投げ方は、どのようにされているか。

(回答)

生徒と先生が1対1での場面か、ゼミの時の場面か、場面分けをして考えていく必要があると考えている。1対1では、先生方に、なぜ生徒がそう考えているのか、なぜをぶつけて生徒に壁打ちすることを大事にしてくださいと言っている。ものを知らない段階では、インストラクター的に、文献調査にあたってみようという形で指導をしている。

探究の指導をやったことがない先生は、生徒の段階を見立てるのが難しいので、先生のチームで見て、複数の視点から見立てていくことが大事だと考えている。

(岡本委員)

文献調査をされているのはとても良いと思う。アイデア大会ではなくて、これまでこういうことがされて、ここがなされていないということが、しっかりインプットした上で進めているところが重要。

1年のうちで、カリマネが働く場面をどのように作っているか。

(回答)

研究開発部が1年ごとに見直しをしているが、まだできて8年目の学校なので、最初の3年間はばたばたしたが、その後は、骨格がありながら、先生のやりたいことや、生徒の現状を見て、組み立てていく形になっている。割と1~2ヶ月後のことを決めていくような形ではあるが、骨格があるので、ぶれることは少ない。教科と連動していないという弱点がある。どこの部分は教科で扱って、どこの部分は総合でスキル学習をしようなど、その棲み分けについてはより精緻に組み立てをする必要がある。

(岡本委員)

学校の中で、いまだに教科の学力と、探究が関係ないという認識がされている学校が多いようだが、進路との関連性を、外の世界と連携しながら、見せながらやっていくと、進路意識の強まりから勉強の質につながる。

カリキュラムマネジメントの一番のポイントは、教員の負担軽減である。学校現場はやめることが苦手なので、去年やったからやるということではなく、取捨選択が生まれることで、さらに良くなっていくのではないかと。

○ 兵庫県立兵庫高等学校

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026804_3.pdf

<発表内容>

- ・ 学校規模は、普通科7クラス280名、創造科学科1クラス40名で、全校生徒は960名である。地域の課題は世界の課題とも結びついていると考え、グローバルで俯瞰的な視点を持ち、地域課題の解決とともに、将来世界の課題を解決するグローバルリーダーを育成したい。育てたい力は、批判的思考力、実践力、想像力、情報活用力、協働力である。
- ・ コンソーシアムの連携によるグローバル探究学習を行なっている。フィールドワークを通して、大学や高等教育の専門家からアドバイスをいただいている。ベトナム国家大学ハノイ校と交流協定を結び、交流授業を行なっている。
- ・ 令和3年度より、特色教育推進本部を設置しており、創造科学科推進部と、特色企画部を設置している。特色企画部のなかに、グローバル推進係、STEAM教育推進係があり、それぞれカリキュラム開発を担っている。それらの開発をコンソーシアムがサポートしている。
- ・ ひょうたんでは、4名1組のグループで探究活動を行なっている。SDGsやSTEAMをテーマにしている。大学と連携して、外国人留学生との交流会も行なっている。STEAM教育に沿った学校設定科目を開発している。ひょうたんの事後調査結果において、生徒の能力の高まりが見られる。
- ・ 探究活動におけるパフォーマンス評価は理解が進みつつあるが、より詳細な評価の観点の開発や教員による自己評価を行う必要がある。国際交流について、コロナ禍で制限があるが、オンラインでの取り組みや留学生との交流を進めていきたい。

<質疑応答/講評>

(岡本委員)

生徒アンケートで、教科と進路が繋がっていないとなっているが、原因はどこにあるとお考えか。

(回答)

グループ研究であるため、10個の分野の中で、生徒たちが自分達の興味関心によってテーマ設定するが、一人一人の進路と直結したものができないのが原因ではないか。

グループは部活が同じや仲の良さで組んでいる関係で、一人一人の進路希望がバラバラになってしまう。一方で、教師が指定すると、モチベーションが下がる。決め方は、教師が決める、自分が決める、深く研究するため個人でやる等がある。

(岡本委員)

それを改善する方法として、今後予定していることはあるか。

(回答)

1年生はキャリア教育に重きをおいていて、進路の講演や、SDGsの講演を行い、課題に対して意識を高める取り組みを行なっているが、不十分な点もあるかもしれない。

(岡本委員)

SDGsから入ると、他人事で、主体性がなくなりやすい。また進学校においては、大学で何を学ぶのかという関連が見えないと、今おっしゃっていたような原因になる。勉強と探究が分かれている。学習指導要領の「本人の生き方、在り方」であるので、グループは最小単位になると思う。最小単位で本当にやりたいことがあるか、一緒にやることでシナジー効果があるような形が望ましい。教員の認識に関するところも深く関わっていて、進学校だから、探究は進学に関係ないと思ってしまう。そうになってしまうと勿体無い。自分の専門性や自分の軸を見つけていくことが非常に重要な社会になっている。枠を取っ払って、自分でテーマを決めて、もしくは最小の人数で進めていくというところを推奨する。

(回答)

280人の規模なので、物理的に難しいところがある。発表会の時間の関係や、配置する教員の人数によって、あまり多くのグループを作れない。普通科の生徒は、もともとそういうことをするために、入学したわけではなく、週1時間で進んでいる。意識というよりは物理的な問題で制約されている。生徒の意識はやっていく中で変わっていている生徒も自由記述で見られ、先生方もだいたい3年間で意識が変わってきているように見える。

(岡本委員)

1人1テーマで、300人程度の学年でも、個人探究している事例もある。ICTを活用すれば、出来ることも広がる。物理的にできないことはない。ぜひチャレンジしていただければと思っている。

○ 山梨県立甲府第一高等学校

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026804_2.pdf

<発表要旨>

- ・ 県内唯一の探究科を持つ高校である。平成26年からSGHの指定を受けていた。グローバル人材に必要な能力を育む体制やプログラムの構築を目指した。探究科の生徒が、本事業指定の対象生徒である。
- ・ 1年次は「農」を題材として、探究ノウハウを習得する講演会等を企画し、その後主体的な探究班に分かれて活動をし、ポスターで成果をまとめる。各学年10～12の班ができる。2年次には、本格的な探究をスタートし、独自のテーマで行う。実地調査を励行している。英語でのプレゼンを行う。3年時には、論文とポスターを作成し、提案活動を行う。
- ・ 各探究班には、探究顧問を配置する。また2年生には英語顧問も配置する。全校行事として、発表会を行なっている。
- ・ 探究手引き書として「グローバルパスポート」を開発した。生徒には名刺を持たせているが、その渡し方なども、こちらに記載している。例えば、プラスチック問題解決に向けてマイボトルの開発や、子供食堂を使った母子家庭の支援や、御嶽古道についての研究といった活動が行われた。地元の小学校や大学生に向けての発表も行なっている。棚田資源とおむすびによる食の未来を見据えた取組では、県や市、地元のNPOとの連携を行なっている。
- ・ コンソーシアムを通じて探究活動を行い、社会、大人の視点を知るようになったと感じている。社会の仕組みや自身のキャリアを考える機会になっている。また大人の視点も持つようになる。
- ・ 課題は、探究を深化させる高度な学びの提供や国際交流機会の減少などである。コンソーシアムとの連携による探究の深化や、大学との連携による探究の発展によって、イノベーティブなグローバル人材の育成に繋がっていききたい。

<質疑応答/講評>

(岡本委員)

教員間の意識の共有についての現状と、それに対する取組について説明をお願いしたい。

(回答)

8年前から教員の共通理解というところが問題になっている。次第に、教員間でも認知度は高まっている。探究の授業に対する理解度も段々と高まっている。探究科の運営委員会を年3回設定して、情報の共有を行い、係では毎週ミーティングを行い、中長期の目標も共有している。具体的な進路実現と探究をリンクさせていくかについてはいろんな意見の先生がいる。探究と進路をつなげた卒業生もいるので、そうした卒業生がいる財産をこれからさらに共有していきたい。

(岡本委員)

こうした事業を負担と考える先生と、新しい教育に取り組もうとする先生がいる。管理職も含めて、全体のものにしていく学校は後者になるが、一部の先生だけがやっていると前者になってしまう。管理職の理解は非常に重要。スクールミッションやポリシーは非常に重要だが、そこの関連はどうか。

(回答)

本校は探究科があり、社会に貢献できる人材を輩出していくことが使命である。管理職にイニシアチブをとっていただいている。

負担感是否定できない。生徒が外に出るときには、引率や外部との窓口が生まれる。縮小や簡略できる部分は進めていきたい。やりがいを持っている教員もたくさんいる。この事業の有効性を発信していきたい。

(岡本委員)

SGDsを推すと、生徒の自由な発想がなくなっていってしまう。自分の心の底からやりたいことを大学でやっている子は、首席を取ったりする。一方で、そうではない生徒はやめてしまうこともある。学問分野とやりたいことを、結びつけられると、とてもやりやすくなる。そのアプローチができてくると、これ大学を選ぶときに重要だよねとシフトしていくとより良くなるのではないか。こう結びつけると進路や教科とも結びつくという事例を出していただければと思う。

(回答)

グルーピングは進路別にやるところがあり、今後は普通科も巻き込んだ形で実施していきたいと考えている。

○ 島根県立隠岐島前高等学校

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026804_4.pdf

<発表内容>

- ・ グローカルに課題解決を実践するプロフェッショナルによる授業の実施では、地域内外の専門家に授業に入って頂いた。卒業生がコーディネーターの役割を担い、マッチングを実践してくれた。総合的な探究の時間では、外部人材に、一定期間、生徒の取り組みに伴走をしてもらうような機会を設定した。
- ・ 「国内外の課題解決実践地域との交流事業の実施」では、ブータンやミクロネシアとの交流を行なっている。コロナ禍により、渡航機会は得られなかったが、島前地域における芸術とブータンの芸術の研究や、部活動でミクロネシアと交流を行っている。県内の他校の探究サミットに参加したり、高校同士の交流を行ったり、東北芸術工科大学での中間発表を行うなど、他校との交流を行った。研修旅行の企画から生徒が関わり、プログラムを作ることに挑戦した。
- ・ 「地域課題解決型学習と各教科で取り組む「地域未来探究」の実施」では、探究と教科の接続においては、さまざまなコラボレーションが生まれ、地理の授業でJICA職員と協力して、国際理解教育を行い、家庭科と英語を横断してニホンミツバチの授業を設計した。
- ・ 「伴走者フォーラム」の実施を行い、他校や他地域との「伴走者」をテーマにしたイベントを実施した。3年間、毎年1回実施し、延べ200名を超える参加者があった。そこでの出会いをきっかけに、他校の教員と自主勉強会が行われることもある。
- ・ 本事業の推進によって、生徒と大人の協働や共創が生まれ、生徒と一緒に授業を作る機会が生まれている。探究学習の振り返りを生徒が先生と企画、進行をし、生徒会主催で、生徒と教員がフラットに学校の問題を話す座談会などがある。

<質疑応答/講評>

(岡本委員)

教員の変化を促すことは重要である。生徒は変わっていくが、本当に変わるべきは教員であり、それがサステナブルにつながる。教員の変化を捉えるというのは、全ての学校でやっていけるといい。教科の掛け合わせは両方の先生で行われるのか。

(回答)

行われている。

(岡本委員)

その辺りが、負担感につながる可能性がある。今抱えられている課題はなにか？

(回答)

1つは3年間でできなかった海外との接続。オンラインや、こちらで文化に触れるというのができるが、海外での体験が不足している。

いろんな場面で地域の方に入っていていただいて授業実施できているが、もっと多様な方に入ってもらえないか、卒業生との関わりを作っていきたい。キャリアや探究の伴走につながる。

(岡本委員)

課題が言語化されているということが良い。課題をしっかりと出すことが重要である。地方の学校で足りないリソースは、人である。ぜひ学校の外の日頃会わないような人と、出会う機会づくりを今後も続けてもらえればと思う。

グループ④【プロフェッショナル型】

○ 兵庫県立佐用高等学校

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026806_3.pdf

<発表内容>

- ・ 佐用町の抱えるさまざまな課題と、高校のカリキュラムを掛け合わせ、佐用町の課題解決とプロフェッショナル人材を育成する。課題解決のための3本柱は、①特産品による商品開発と、②健康寿命の延伸、③災害に強い町づくりである。
- ・ 1年生において、フードデザインでは、保育園児とクッキングを一緒に楽しみ、総合探究・フードデザインでは、外部講師を招き、災害や防災学習を行った。また、減災ウィークを設定し、他教科で災害をテーマにした授業も実施した。合同防災訓練～KIZUNA大作戦～を行い、町役場や小学校、消防署、ドローン減災協会などを巻き込んで、650名が参加し、防災訓練を実施した。家政科の生徒がそれぞれ体験活動を企画し実施した。
- ・ 2年生において、商品開発では、企業や佐用町からゲストを招いて、商品やパッケージを製作し、授業を実施した。生活と福祉では、専門学校や病院、町役場と連携し、専門家からの講義や、専門の器具を用いた講習を行った。ヒューマンサービスでは、社会福祉協議会と協働し、給食サービスを行い、感想をメッセージカードで聞くなど、双方向のコミュニケーションが生まれた。
- ・ 3年生課題研究では高校生カフェと称し、地元食材を使用したお弁当を考案し、試作を繰り返して、販売イベントを古民家を活用した施設で実施した。地域との交流が生まれ、対話的な学びの場となった。子供の発達と保育では、食育おもちゃを制作した。フードスペシャリストでは、食改善レシピを開発し、地域の方へ配布した。ヒューマンサービスIIでは、高齢者世帯を訪問し、年間で4回訪問し、日常会話やレクリエーション、レシピの考案を行った。
- ・ 3年間で、授業の流れが明確になり、カリキュラムの内容が決まりやすくなった。1年目は地域について知り、2年目は実践活動を行い、3年目は地域へ還元するため生活改善の提言をした。

- ・ 生徒が主体的に学びに向かうために、教員は口出し手出しをするのではなく、サポートをする体制をとった。P（計画）共に考え待つ、D（実行）共に行動し見守る、C（評価）共に振り返り褒める、A（改善）共に改め期待する。私たち教員は我慢も強いられたが、生徒が自ら軌道修正しながら主体的に取り組み、成果が得られたのではないかと思う。
- ・ 取り組みに対しては、学科間での比較を行い、家政科は佐用町外からの通学が多い学科にもかかわらず、地域への関心度が一番高い結果が出た。また、地域への活動への参加意欲でも、家政科生が一番高いという結果も出た。本事業が生徒の意識変容に影響を与えたと確信が持てた。実施前の心境ではマイナスな言葉が多かったが、授業終了後では、とても前向きな言葉が多くなった。資質能力では、コミュニケーション能力が身についたという回答が、多くみられた。一方で、外部講師の方からは、情報発信力や課題発見・解決力が高いという評価が得られた。カリキュラム開発専門家の大学の先生からは、成果が出ているとの評価をいただいている。生徒が楽しそうで充実しているとのこと。授業を実施しながら臨機応変に対応する必要性も感じた。
- ・ コンソーシアムでは、町役場、企業や専門学校、大学などの専門機関をお願いをした。校内では地域協働部を設置した。
- ・ 本事業指定終了後も、佐用町からの提案も受け、「地域と高校の協働による輝く人づくり支援事業」が始まる予定である。新たなコンソーシアム体制づくりも進めている。生徒の視点からは、主体的・対話的で深い内容を学ぶ内容を吟味し、地域にはこれからも笑顔を届け続け、佐用町にとって、佐用高校はなくてはならない存在として、魅力ある学校づくりを目指したいと思っている。

<質疑応答/講評>

（参加者より質問）

生徒の評価と講師の方々の評価の違いがあったが、その違いに関して、生徒たちにはどのような形で伝えられたのか。

（回答）

外部講師の方と生徒は、一緒に会議を設けるという場があるので、実際に外部講師から生徒へ、成長について伝える場面がある。

（廣田委員）

とても面白くてワクワクする内容でした。特に私が素晴らしいと思ったのが、生徒のPDCAに寄り添う教員の姿勢のところである。企業の組織開発についても、若手人材の自律をどう引き出すかは課題となっているので、地元企業の方々にも、ぜひこの内容を成果とともに伝えていくことが重要であると思う。

○ 福井県立科学技術高等学校

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026806_2.pdf

<発表内容>

- ・ 福井県福井市のある工業5学科の1学年5クラスの学校である。福井県は、中小企業を中心とした下請け構造の産業である。目標として、工業の高い知識と技術力を身につける、地域の一員として積極的に関わる、福井の工業に新しい価値を生み出すことを掲げた。
- ・ 1年生では、工業技術基礎実習、現場見学、福井の産業を学び、2年生では産業技術探究、実習、インターンシップを学び、3年生ではKAGI-Lab（課題研究）実習を学ぶ。特に、3年生の産業技術探究と、3年生のKAGI-Labが鍵になっている。工業の高い知識と技術力を身につけ、

資格取得者やコンテストの入賞が出ている。タブレット学習や放課後の教え合い、グーグルクラスの活用、YOUTUBE動画の活用が結果に繋がった。

- ・ 足羽山動物園応援プロジェクトでは、企画を提案し、園との協議の結果、アニマルクリップを制作、販売、寄付した。さまざまな視点を生徒が獲得する機会となった。課題研究では、ランドセルの商品開発を行い、小学生や企業の元へ足を運び、社会からの評価の厳しさやデザインを商品化することの難しさを知った。
- ・ ルーブリック評価を実施し、生徒のコミュニケーション力や、地域貢献しようとする気持ちの向上があった。実社会へのイメージが深まった。今後は、生徒の主体性向上や、学科に関連する企業を中心に地域とのつながりの拡大、探究学習への教員の意識向上に取り組む。

<質疑応答/講評>

(中村委員)

学校の体制をどう作っていったのか。なぜICTを先生方が学校で推進できる体制ができたのか。既存の教育活動を見直し改善していくマインドができていっているのはなぜなのか。

(回答)

1人1台の端末を持つことで、ネット上に有益な学習材があり、それを活用していくことで、成果が出るようになった。

これまでの課題研究を振り返ると、地域や企業から依頼されたことに取り組むことが多く、生徒自身がこういったものを作ればいいのか、という思考になりづらかった。そこを育てていくために、身近な部分でテーマを見つけて取り組んでいこうと、探究学習で取り組んだ。それが現在の3年の課題研究に繋がり、探究学習が深まりを見せている。

(中村委員)

生徒が実際に取り組む中で、成果が出て、ICTの価値を先生方が感じて、変わっていったとのこと。タブレットを使えば成果が出るというわけではなく、生徒が自己調整学習者になっているはず。自分を振り返り、コントロールする学習者である。生徒の支援体制として、生徒が自分で考えながら、学んでいく学習者になったのではないかと考えているが、どのようにそれを支援する体制を作ったのか。

(回答)

1つはルーブリックでの意識づけが考えられる。学習の狙いを提示し、生徒自身が動いていった。これまでは結果にしか目を向けていなかったが、関心、意欲、態度に目が向いて、生徒の意識改革につながったのではないかと。

(中村委員)

体制づくりができていっている点が良い。カリマネは組織体制作りも含まれる。プログラムを作っただけではなく、それを運用できる集団を作らなければいけない。

プログラム開発の点で、1、2、3年の学習について足場かけをしながら、より高度化しながら作られている点が良い。轍のようにいろんな活動が繋がっていく。動物園の実習など、利用者のニーズに応えるという学びが取り入れられている点が良い。自分達が自分達なりに発見したものに取り組んでいくことが多いが、地域の望みをきちんと聞く場面が少ないこともある。利用者に関わりながら、相手の求めているものを、作ろうとした点が素晴らしい。

最終的には社会に関わり、社会の形成者になってほしいという目標がある。自分だけでなく、誰かにとって価値があるものを作れる点がそこに繋がっている。ランドセル作りで生徒は夢中になる経験をしたのではないかと。夢中になると気づいたら、3時間経っていた、つまりフロー状態に入っている。社会にとって本当に必要な課題に取り組んでいる。ある程度のハードルの高さがあるということ、フィードバックと振り返りの場が想定されていること、自分達で時間をかけて取り組める環境だったこと、そういったことが保障されている環境だったのではないかと、総じて感銘を受けている。

○ 島根県立情報科学高等学校

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026806_13.pdf

<発表内容>

- ・ 本校は、昭和62年開校で、情報システム科、情報処理科、マルチメディア科の三学科がある。地域との協働を通じて、デジタルイノベーションを創出できる人材育成を目指す。
- ・ 事業推進のために、コンソーシアムを構築した。市、小中学校の校長会、市教委、卒業生会、PTA、商工会、商工会議所、カリキュラム開発専門家で構成している。
- ・ 初年度は、本校から地域へ協働の提案が4件、地域から本校への提案が3件あった。小学校からの依頼で、理科の授業を行い、市教委からの依頼で、小学校教員向けにプログラミングの研修を実施した。令和3年度は、地域から本校への依頼が9件に増加した。小中学生向けのIT体験講座の実施や、駅のリフォームに取り組み、駅でのイベント開催を実施した。地域からの依頼で、商品開発や、WEBページの作成、ポスター等のデザインにも取り組んだ。
- ・ 1年生は、地域の魅力や課題を学ぶ。2年生では、地域課題の解決策を模索し、3年生では社会実装を目指し、実際の行動を起こす。
- ・ 令和3年度から魅力化コーディネーターが配置され、コーディネートが活発になった。
- ・ ファブラボが誕生し、さまざまな講座や、制作が促進された。3年ぶりに情報ITフェアが実施され、900名以上が参加した。生徒により、企画運営が行われた。様々な技術を使った企画が実施された。(AR, VR, メタバース、ドローン等)放送部がyoutube配信も実施した。生徒の達成感としては、過去最高で約7割の生徒が大きな達成感を感じている。普段の学びが活かされたという生徒が、76%になった。
- ・ 地域との協働依頼は、1年目7件、2年目15件、3年目28件となっている。そのうち、地域から本校への依頼は、3件、9件、21件と増加している。コロナ禍で、非接触のテクノロジーへのニーズが高まり、マスコミでの紹介があったことが、ITスキルを活用した地域貢献活動の活発化につながったと考えられる。
- ・ 協働件数の増加によって、生徒の主体性、協働性、創造性が、大きく向上した。地域との協働によって、実際に自分の知識や技術が活かされ、皆さんに褒められたり喜ばれたりすることで、自分の成長実感につながったのではないかと。
- ・ 今後も、人脈、知識、技術を継承する仕組みづくりを行い、今後も地域に愛され地域に必要なとされる学校を目指す。

<質疑応答/講評>

(廣田委員)

本当に魅力的な学校ですね。素晴らしいと思った点は、デジタルイノベーション創出人材ということで、これはどんな人材なのだろうと、わからなかったが発表でよく分かった。デジタルは手段であり、イノベーションを起こしていく。実際の社会に対して、学んだことを活かして、価値を提供していく。それを、協働体制を作り、実際にやり続けていくと。達成感や成長実感にその成果が表れている。

地域との協働体制では、一方的な支援関係になりがちだが、協働体制として相互に価値を提供し合うということが出来ている。地域から協力してもらい、学校側から小中学性や企業への価値提供をして、相互に価値を提供し合っているというところが良い。それが地域から学校への依頼件数が増えることにつながったのだろう。

どこの学校も、地域との協働件数と、生徒のスコアを重ねてみると良いかもしれない。卒業した人材が還流して地域が活性化することもあるが、すでに地域協働によって、地域活性化に貢献している。地域の変化は何かあったか？

(回答)

情報科学高校は県内での知名度が低く、私立と思われることもある。どんな学習がされているのかも知られていなかったが、様々な協働が活発になり、メディアに取り上げていただくことで、学校の教育内容を知っていただけるようになった。本校に興味を持っていただける地域の方や、企業さんが増えたと感じる。

コンソーシアムに、市の定住関係や観光、地域振興課の方に入っているが、本校に寄り添って、一緒の目線で取り組んでくださり、安来市へIT企業の誘致に向けて動いている。現在は、安来市にはIT企業がなく、市外への人材流出につながっている。情報科学高校は、安来の大きな財産であるという頂き、ITシティ安来として市長も言われている。

(廣田委員)

町自体にも大きなインパクトを出されている。

IT技術を使っていると、生徒の方が、アンテナが立っていて、いろんな新しいことを仕入れてくる。そのあたりは実際どうか。

(回答)

教員よりも生徒の飲み込みが早いこともある。情報スタジオでは、ミキサーなど、本格的な機材が揃っているが、生徒は前のめりですぐに理解してやってくれている。他校さんでもあったと思うが、生徒が自分の端末で様々なことを調べて学習するので、教わるのは教員からだけではないという時代です。教員が教えられないことも、生徒が自分で調べてどんどんやっていくような環境があるので、教員はそれを応援している。

(廣田委員)

先生たちの役割や、先生と生徒の関係も変わっているか。

(回答)

教員も負けじと、当然勉強しなければいけないが、コンソーシアムのバックアップもあるので、できるエンジニアさんを探して、生徒に紹介をするというような、教員がコーディネートするような役割もあり得るかと考えている。クラウド上で情報共有をしながら進めていきたい。教員は生徒の上にいるというだけではなく、教員は生徒と共にあったり、生徒にどうやったの、と教えてもらうこともあってもいいと思っている。

(廣田委員)

学校においても、町においても、大人と子どもの関係性を見直していくという動きが出ていると見て取れた。

○ 秋田県立金足農業高等学校

<発表資料>

資料① https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026806_11.pdf

資料② https://www.mext.go.jp/content/20230112-mxt_koukou02-000026806_12.pdf

<発表内容>

- ・ 目指す生徒像は、人口減少に対応しつつ、農業関連産業を変革することができる人材、また地域の魅力に気づき、地域に定住しながら、地域の関連産業を担う人材の育成である。学校設定科目は「地域創生論」(2年次)各種専門家によって、地域に開いた公開講座として実施した。学校設定科目、「社会起業実践」(3年次)日本政策金融公庫と連携してビジネスプランを作成した。
- ・ 受講生の声として「失敗を恐れずに挑戦したい」「地域を見る視点が変わった」といった声がある。地域に役立ちたい、地域問題に関わりたいという項目において、大きく生徒の意識の向

上が見られる。私に関わることで社会を変えられるかもしれないと考える生徒は、1年次31%から、3年次に73%まで向上している。

- ・ 教職員も、地域協働によって生徒の成長について、肯定的な捉えを得ている。金農総幸福量評価指標（Gross Kanano Happiness）を設定し、50の生きがいに関する質問で4段階評価を行っている。3年次で、大きく向上が見られる。生徒の変化として、地域に対する価値観の変化が見られた。郷土愛が醸成、再確認された。教員の変化としても、地域に対する価値観の変化や、地域と共に学ぶことや、足元に教材があるということへの気づきがあった。コンソーシアム構築によって、知識や技術、手法、思考が共有化された。課題としては、学校担当者からの一方通行になりやすい点である。
- ・ 今後の展望として、国や県の事業にチャレンジし予算を確保しながら、連携協力協定の持続や、コンソーシアムの継続、校内の協働体制の維持と分掌の設置に向けて取り組んでいく。

<講評>

（中村委員）

生徒が延べ2100名程度参加しているとのことだったが、生徒がプログラムを選ぶことができるということか。

（回答）

個人選択ができるものと、各学科で、メインで進めているので、その場合は各学科の生徒が参加するものがある。

（中村委員）

複数のプログラムを準備すると多忙感にも繋がると思うが、どのように運営しているのか。

（回答）

農業高校の特性もあり、元々地域とのつながりが多く、また、小中学生、大学、企業との協働場面もあった。負担もあったが、先生方と意識の共有を進めて行ってきた。この事業を学校の教員として統一の意識を持てるよう、学校の会議で共有を進めてきた。授業が多くなっても負担が増えるので、各5学科の先生の意向によって進めている。

（中村委員）

教育目標に照らし合わせながら、各5学科に裁量があって、授業をデザインされていた。目指す方向性は組織として共有されていたと。

良いと思った点は、プロジェクトを生徒が選択できるようになっているところである。生徒が自分の興味関心に応じて個別最適も大事だが、挑戦したいタイミングで挑戦できるということも大事である。複数のプログラムがあることで、生徒が取り組みたいタイミングでできるという点が良い。

もう一点はGKH。幸福度を成果に取り入れた点。学んだ生徒が幸せなのかどうか。これを学校評価に取り入れようという点が素晴らしい。次の時代では重要視される。色々なことが学べたが、大人になって結局幸せになれたのか。自分の幸福と向き合えて、キャリア形成に活かせる機会を設けている点が素晴らしいと思った。

7-1-4 参加者のアンケート結果

アンケート回答数：42件

参加者の属性：

管理機関（発表者） 8名（19%）

コンソーシアム関係者（発表者） 1名（2.4%）

学校関係者（発表者） 13名（31%）

見学者（事業特例校、アソシエイト校） 12名（28.6%）

見学者（その他） 8名（19%）



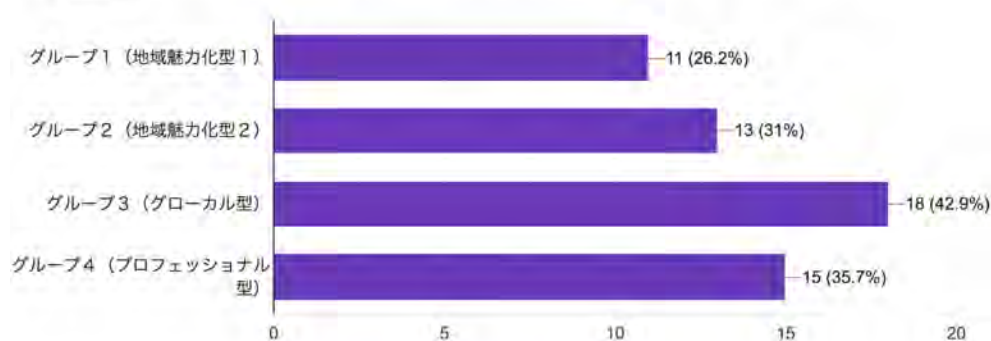
参加したグループ（複数回答可）：

地域魅力化型① 11名（26.2%）

地域魅力化型② 13名（31%）

グローバル型 18名（42.9%）

プロフェッショナル型 15名（35.7%）



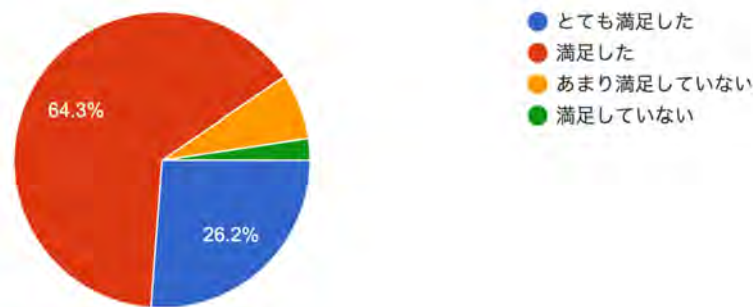
満足度：

とても満足した 11名（26.2%）

満足した 27名（64.3%）

あまり満足していない 3名（7.1%）

満足していない 1名（2.4%）



○ 満足度の理由

<高評価の理由>

- ・ 他校の取り組み、成果、課題、課題の乗り越え方が自校にとって、参考になった。30件
- ・ 発表に対して深める時間が短かった。十分な意見交換、交流の場が欲しかった。11件
- ・ 成果検証事業の運営指導委員による質問や講評が参考になった。6件

<低評価の理由>

- ・ 他のグループの発表も聞きたかった。1件
- ・ 文部科学省の方に講評や質疑応答をしていただきたいかった。1件
- ・ 講評が適切ではなかったように思う。（既に発表した内容についての言及があった）1件
- ・ 良い点だけでなく、課題を聞きたかった。1件

○ カリキュラム開発等について、他校の取組を聞いて自校に生かせそうなこと：

<探究学習における工夫について>11件

- ・ 具体的なアウトプットを制作すること（体操、DVDなど）
- ・ 八丈高校の全島民会議や村岡高校の学校設定教科などの取組
- ・ プロジェクト学習や起業家教育における地域との関わり方、生徒自らが動いて実践している取り組みが参考になった。
- ・ 演劇創作という形で表現させる取り組み。演劇という形にするために、課題に対して真摯に向かう動機付けとして非常によいと感じた。
- ・ 地域に、学校にやってほしいことを聞く姿勢を参考にしたい。
- ・ Win-Winの関係を構築する必要性が再確認できた。
- ・ 教育側と地域の双方向性を促す取組み
- ・ 生徒自身がFW先ヘアポを取る点
- ・ 探究パスポート、実践記録集など、生徒が活用できる資料作り
- ・ オンラインを使った外国との対話（昨年実施したが、さらに充実を図りたい）
- ・ 学年縦割りでの活動

<カリキュラムについて>7件

- ・ 1年から2年へと段階的に深めていくカリキュラム
- ・ 課題研究を2年次に2単位実施されているところがあって、羨ましいと思いました。
- ・ 「グローバル」のグローバルの部分で、どのような国とどのような形で連携していくか参考になった。
- ・ 地域が求める学校や声を反映させつつ、本校の求める生徒像に適合する編成を組みたい。
- ・ 1年次2年次での発表のさせ方を聞いたことが役に立ちました
- ・ 教科指導と探究指導のコラボレーション、教科の掛け算（世界史×物理など）
- ・ 教員と生徒の失敗学、授業の開発などをする場

<評価について>3件

- ・ 生徒の学習状況の見とり方、ルーブリック評価規準の使い方
- ・ 長崎県立松浦高等学校の発表にあったルーブリック評価規準の例を、実践に反映させたい。
- ・ 生徒の幸福度を指標として具体的に数値化するというやり方は素晴らしく取り入れていきたい。

<組織づくりについて>2件

- ・ 短時間のプチ研修を定例化することで、学校設定科目、探究、教科指導を有機的に繋げるアイデアを職員が日常的に議論する場を設けていること。
- ・ 探究学習において、専門教科・共通教科で教員自体が協働している取り組みが参考になりました。

○ 学校内の体制及び学校外体制(コンソーシアム)構築について、他校の取組を聞いて自校に生かせそうなこと

<コンソーシアムへの知見について>11件

- ・ 学校外の立場や価値観の違う人たちと協働する場面が増えると、その分課題も多くなるが、「どのような生徒を育てたいか」という方向性を共有し、質の高い対話を重ねることで関係性を高めてくことが大切だと学んだ。
- ・ コンソーシアムとwin-winで活動していくために、互いのwinは何か、負担が過剰になっていないかについて、確認をしながら進めたい。
- ・ 地域の自治体や企業との連携の在り方が参考になった
- ・ コンソーシアムとの関わり方や協働体制の維持について参考になった。
- ・ 【三国高等学校】大学等と連携 【村岡高等学校】鳥取大学との連携
- ・ 関係機関との連携
- ・ 八丈高校の全島民会議はコンソーシアムとしてすばらしい取組だと感じました。
- ・ 島根県立矢上高校の魅力化ミニ研修や協育パートナー、しくじり探求セミナーなど
- ・ コンソーシアムの方々と直接生徒が対話をする機会を作ることを参考にしたいと思いました。
- ・ 官民学協働をすでに実施されている取組発表があった。早速、全国でどのような取組がされているかを調べることができ、今後このような取組を推進するための良い参考資料となった。
- ・ 生徒の学びに伴走する協育パートナーなど、地域との協働の在り方。学校の学びを支えていただくマンパワーの確保について非常に参考になった。

<校内体制について>4件

- ・ 各教員の得意分野を活かせる体制づくり。
- ・ ICT指導の校内体制
- ・ 本校ではコンソーシアムについてはある程度機能しているが、校内体制が弱いと感じた。
- ・ 教科を超えた教員の結合の必要を痛感した。

<今後の展開について>4件

- ・ 指定がなくなった後こそ学校間交流を積極的に行っていききたい。
- ・ 学校以外の予算化できる道筋
- ・ 現在推進している地域との結びつき体制をより具体化していく。
- ・ 留学生の活用

<生徒の活動について>3件

- ・ 生徒の地域への関わり方（訪問は生徒自身が依頼すること、中学校への出前授業等）
- ・ 生徒の活動のまとめとして「研究論文」を書かせるのはとても良いと思った。
- ・ 海外との交流も、ズームで積極的に行い、つないでいっているところが参考になりました。

○ コーディネーターについて、他校の取組を聞いて自校に生かせそうなこと：

<コーディネーターを担う人材について>7件

- ・ 元校長がコーディネーターを務めてくださるというのはいい環境だと思う
- ・ 退職校長が地域のコーディネーターになるというケースは、大変興味深かった。地域と学校の両方を理解しているコーディネーターだと思った。
- ・ 長崎県立松浦高等学校での前々校長先生のネットワークを使ったフィールドワークやマインドセットなど、生徒自身のアポ取り、とても参考になりました。
- ・ 学校のコーディネーターとして複数の教員で携わることを参考にしたいと思いました。
- ・ 隠岐島前高校にたくさんのコーディネーターさんがいらっしゃるのとはとてもすばらしいと感じました。
- ・ 隠岐島前高の地域の方がコーディネーターを担っている点。また、教科×教科、教科×地域という形で取り組んでいるのも興味深かった。
- ・ コーディネーターの配置

<コーディネーターの役割について>3件

- ・ 本校では、県が設置した地域創生キャリアプランナーが多方面で調整をしていただけなので、高校と市役所の連携がスムーズに進んでいる。コーディネーターは、全国的にますますなくてはならない存在として、高等学校において課題解決に大変な役割を担っていくと感じた。
- ・ 生徒募集や中学校との連携など、多様な活動の場や役割を担い、コーディネーターの役割が面的でなく、学校の学びをしっかりと下支えしている点。
- ・ コーディネーターの活躍次第で協働できるかどうか左右されるくらい大切。

<その他>4件

- ・ 講師の先生が地域に足りないのは「人」とおっしゃっていたのが印象に残りました。
- ・ 探究の入門期に、プロフェッショナルに授業をしてもらおう。できれば単発で終わらないようにする。
- ・ 具体的に事例がわかりづらく、判断ができない。
- ・ コーディネーターはいない

○ 今後の展望(事業終了後の取組、自走の方向性)について、他校の取組を聞いて自校に生かせそうなこと

<予算の確保>5件

- ・ 事業費を別のところから得るなど、別の事業に申請をして、費用負担面を考えつつ、継続するべき。
- ・ 国の政策で募集している事業への応募も検討することを参考にしたいと思いました。
- ・ 活動(イベントや出前・公開授業)資金の確保が課題と考えています。他校がどのように対応を考えているのかを、このサミットでいただいた繋がりを活かして情報共有できたらと思います。
- ・ 地元自治体の支援を受けて、継続して活動していく方向である。
- ・ 市の援助をいただきながら、それ以外の補助も視野に研究を進めていきたいと考えています。

<コンソーシアムの継続>5件

- ・ 地域をうまく取り込んで、協力体制ができている学校を見習いたい。
- ・ 引き続きコンソーシアムを継続することで学校と地域の支援体制の強化に努めたい。
- ・ コンソーシアム内での協力体制は強固なものであり、今後も期待できる。
- ・ 発表校の実践から本校の取り組みを振り返り、サミットを視聴した職員間で今後の方向性を再確認することができた。地域に根差した持続可能な教育活動の基軸となるのが総合的な探究の時間であり、よりよい実践に向けて、今後も組織的なカリキュラム・マネジメントに取り組んでいきたい。
- ・ 地域社会との連携の在り方について、様々な方法があるので参考としたい。

<カリキュラムのブラッシュアップ>4件

- ・ 教材をアーカイブ化してブラッシュアップし続け、地域協働の探究をブランドとして位置づけることで、生徒の学び、教員の指導が自然と探究的になることを見据えている点。
- ・ 卒業生や地域の方とのネットワークを活かし、起業家教育プログラムをより充実したものに高めていきたい。(まっナビプロジェクト)
- ・ 探究のテーマをSDGsに求めるのではなく、生徒の進路希望に合わせてテーマ設定をする。
- ・ 総合的な探求の時間へどのように組み込んでいくかについて

<小中高連携・進路との接続>3件

- ・ 小中高の「ふるさと教育」コーディネーター
- ・ キャリア形成をゴールとした研究活動
- ・ 小学生や小学高教員との交流にはぜひ、本日の発表の内容をいかしたいと思った。

<教員研修>2件

- ・ 教員の役割について。インストラクター、ファシリテーター、メンター、そしてジェネレーターといった具合に、場面に応じて使い分けられるようにしなくてはならない。そのため、教員向けの研修や時間の確保が必要であると分かった。
- ・ 島根県立隠岐島前高等学校の伴走フォーラムは、教員向けの探究指導の研修として、非常に素晴らしいプログラムだと思いました。

<卒業生との繋がり>2件

- ・ 地域の人材と卒業生の活用。
- ・ 【村岡高等学校】卒業生の共同体。

<校内体制づくり>1件

- ・ マンパワーではなく、組織的に進めることによって、教員の異動に左右されない継続した取り組みにしていくことの重要性を感じました。

<地域観の転換>1件

- ・ 今回の発表を視聴して、自校の取り組みに対して自信を持つことができました。離島の良さはもちろん離島のハンデも実は視点を変えれば強みになるかもしれないと思いました。

<その他>3件

- ・ 他のグループの資料もじっくりみたいと思う。
- ・ 自走できるよう、できるだけサポートできるよう努力する
- ・ この3年間で開催した事業を来年度以降も継続して続ける方法

○ 本事業の成果検証報告会で期待する発表内容：

<本事業での成果と課題>9件

- ・ 本事業による変容。
- ・ 実施前後の進学実績の変容、実施したことによる県内の他校との違い・強味は何か
- ・ 本事業を構築する上で考えていた仮説とはなんだったのか、さらに検証の結果、どのようなコンソーシアムを形成すれば、どのようなカリキュラムが作られ、それが果たして効果的なのかどうかといった具体的なことを、文部科学省のご担当の方から伺いたいです。
- ・ 事業校の変容（「魅力化アンケート」等により、具体的な数字で示したもの）
- ・ 効果的な取組のまとめ
- ・ どの取り組みのどういう部分が広がるとどういう期待が持てる、というのを聞いてみたい。

- ・ 地域と協働した学びをすることによる生徒や地域への効果
- ・ 実践の報告だけでなく、どのような課題を解決するために、どのような理論を援用しているのか知りたい。
- ・ 教育と地域の双方向性について、生徒が触発された具体的動向
- ・ 事業で失敗したこと・3年間で達成できなかったこととその原因

<カリキュラムについて>3件

- ・ 実際にどのような指示や働きかけ、ワークシート等が使われたのかが分かるような具体的な報告だとありがたいです。
- ・ 探究指導と教科指導と関わりについての内容もありますと大変ありがたいです。
- ・ 総合的な探究の時間にどのように生かしていくか。カリキュラムの立て方などの意見を交換したい。

<事業終了後の自走の仕組みづくり、財源の確保について>7件

- ・ 自走に向けて
- ・ 自走するための仕組みとその構築方法、自走のための財源の確保の仕方
- ・ 自走するために教職員、コーディネーター、地域の方々の負担をどのように軽減していくとよいか
- ・ 既に自走しているところがあれば、自走の方法を知りたい。
- ・ 活動資金についてどこから支援を受けていくか。
- ・ 各校が今後持続可能な成果としてどのようなものを上げていращやるのか関心を持っております。
- ・ 自走に向けた体制の構築の状況の評価に加え、自走の可能性・実現性が高まる具体的な事例・ポイントを共有していただくと非常に参考になります。

<校内体制づくり>1件

- ・ 校内で浸透させることに苦労している。校内体制構築の取り組みがぜひ、聞いてみたい。

<事業の生かし方、生徒募集について>2件

- ・ 地域協働を通じての生徒の成長や満足度を、生徒募集などに結び付けるにはどうすればよいか。
- ・ 事業終了後に、各校で3年間の成果をどう生かすか。

<生徒の変容>3件

- ・ 地域との関わりによる生徒の変容の様子が分かる発表を期待したい。
- ・ 地域協働を通じての生徒の成長や満足度
- ・ 本事業によって、実践校の生徒の進路への意識の変化がどうなったか。

<その他>4件

- ・ 今後の普通科高等学校再編はどうなるのか、文部科学省の考え（見通し）が聞きたい。
- ・ 事業後の活動計画について
- ・ 大学との連携の具体的な年間スケジュール(単発か継続的連携か)
- ・ もう少し皆さんが参加しやすい日程で計画してほしいです。（入試業務と重なる）

○ その他、本サミット・本事業へのご意見：

<事業の意義、継続について>8件

- ・ 3年間とても支えてもらえて助かりました。今後も研究を生かしてさらに飛躍していきたい。
- ・ 次年度以降の事業の実施について
- ・ 本事業のおかげで、この三年間研究が進み、教職員の意識が地域との協働に向くとともに、少しずつですが意識改革が進んだことが何よりの収穫と考えています。
- ・ 大変生徒の有益な事業です。
- ・ 私学の取組みへの行政側の支援 ex 認定校の拡大
- ・ 本事業が今年度で終了してしまうのは誠に残念です。

- ・ 地域との協働の取組は絶対に全国に広げるだけの価値は高いものと思います。
- ・ どの高校に対しても、コンソーシアム構築や教育コーディネーターの配置が進み、全国どの高校でも質の高い探究学習ができるように、国が予算化して制度設計をさらに進めていただきたい。

<対面での情報交換のニーズ>4件

- ・ 全国サミットは可能であれば、対面で行いたかったです。本事業を実施していた学校の先生方や文科省の方々と、直接お会いしてお話する機会があれば良かったと思います。
- ・ 3年間の指定期間中に一度も他校と直接会っての交流ができなかった。是非、成果事業報告会では今はオンライン開催になっているが、実際に対面式での実施を再検討してほしい。
- ・ コロナ禍で3年間ともオンラインになり、肌で感じるができなかったのが残念でした。しかし、素晴らしい取り組み発表ばかりで大変勉強になりました。
- ・ 対面でのサミットではなかったため、他校の優れた取組を深く聞き出す機会がなかった。

<会の進行、運営について>4件

- ・ ブレイクアウトルームの出入りが自由にできることが、各類型の新しい取り組みを知る良い機会となりました。
- ・ 時間の管理が明確で、参加しやすかった。
- ・ 取組を振り返って今後につなげるためにも、もう少し質疑応答の時間があつた方が良かったのではないかと思います。
- ・ 内容の充実度に感心をいたしました。このような機会を設けていただき、感謝申し上げます。

<その他>4件

- ・ どの学校も一部の教員に負担が大きかったのではないかと。地域協働で高等学校の教育を改革するのは、本当にいい取り組みだと思うが、本気で高等学校の改革を実施したいのであれば、分掌体制、教科の体制、その他分掌業務の削減など文部科学省が各自治体に改革することを指導してほしい。
- ・ 文部科学省のご担当の方や運営指導員の方は、本事業の採択校や管理機関へヒアリングに行ったり、視察に行くなどして、理想とするコンソーシアムの構築およびカリキュラム開発に対して具体的なアドバイスをされたのでしょうか。
- ・ コロナがないときに組みたかった。（コロナで制限が多すぎた。）
- ・ 各校のプレゼン資料の提供（ダウンロードを可能に）してほしい。

7-2 成果検証報告会

令和5年3月17日に、令和4年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」成果検証報告会を開催した。前半は、令和2年度の地域協働推進校3校の事例発表、後半は、調査研究の報告をした。

7-2-1 成果検証報告会の概要

・日時

令和5年3月17日(金) 9:30~12:00

・目的

各地域協働推進校における取組の成果検証報告及び異なる類型ごとの事例発表を通して、本事業の取組成果について広く公開し、普及を図る。加えて、協働体制構築にとって重要な要素等の分析結果を共有することで、現場で取組を進める高校や地域の後押しをする。

・開催方法

オンライン

・発表内容：

- (1) 各学校のうまくいった取組とそのための工夫・課題
- (2) 持続可能な体制構築のための工夫・課題

7-2-2 当日の参加者について

- (1) 地域協働推進校(管理機関の担当者・地域協働推進校の教職員・その他事業関係者)：50名 (R元年度指定校、R2年度指定校の双方を含む)
- (2) 事業特例校(管理機関の担当者・事業特例校である高等学校等の教職員)：7名
- (3) アソシエイト(管理機関の担当者・アソシエイトである高等学校等の教職員)：20名

7-2-3 発表内容と運営指導委員講評

①高知県立大方高等学校【地域魅力化型】

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230310-mxt_koukou02-000027776_11.pdf

<発表内容>

- ・ 大方高校は、高知県西部の黒潮町に位置している。南海トラフ大地震では、最高津波高3.4mが予想されている。町民は犠牲者0に向けて取り組んでいる。町内唯一の高校が本校である。VUCA時代を生き抜く人材を育てたい。
- ・ 現在の2年生のカリキュラムを紹介する。1年次は他者×仕事で、社会人へのインタビューを行い、問いを見出す。ワールドカフェで、これからの社会について、社会人と、オンライン交流を行った。コンソーシアムメンバー等11名の方とお話をした。2年次では、ものの見方を変え、新たな価値を創造する、というテーマ。新たな見方を学び、黒潮町をデザインし、町長へ提案するという取り組みを設計している。
- ・ 評価には、プロの方に入ってもらい、充実したフィードバックが行えるようにした。生徒の成長も見られたが、答えのない問いに対して考え続けることが難しい生徒もいる。パターン化さ

れた知識の獲得とアウトプットがベースになってしまっている。教員としては、グランドデザインの必要性や意味を理解し設計できるようになった。

<質疑応答>

(質問) 教員が卒業後の進路に興味がない、とあったがどういう意味か。

(回答) 教員は生徒と共に未来思考で考えるのが難しいと認識してしまっている人も一部いる。

(質問) 事業終了後のコンソーシアムはどのように維持するか。(予算の財源)

(回答) コンソーシアムは次年度以降も継続する。県教委へ予算要望し、予算がついた。一旦は解散になるが、新たに設定して実施していく。

(質問) 教員視点の課題に、教育方法を理解しようとしていないとあるが、どのように解決策を考えられているか。

(回答) どうしてもティーチングになりがちで、生徒をフォローしていく形にならないといけないが、意識改革が難しい。先生が手本を示す指導方法になってしまう。その変化がなかなか難しいと言う意味で書いた。解決策は、いろいろな情報を伝える、また、成功体験を体験してもらう以外にはないのかなと考えている。

(質問) 教員の教育方法への理解がない、卒業後の生き方に興味がないという課題に、今後どのように解決に取り組んでいくのか、またあわせて教えていただければ嬉しい。

(回答) <※時間の都合上、後日メールで回答>教員というのは意外と社会の情勢や変化にうといところがある。生徒の学びを実社会にアプローチさせている以上、教員も社会について知る必要があると思う。今後はそういった情報を提供する研修や教員間で情報共有していく体制や土壌をつくっていくことを考えている。

<質疑応答・講評>

(中村委員)

- ・ すごくいいのは、学校の改革を頑張ってくれた。先生の意識改革は難しい。教育学部出身ではない先生も多いので、総合への知識も乏しい。
- ・ 学校の組織改革の1つとして、多くの人を巻き込んでやるようにされていた。反発も生まれただろうが、社会人を巻き込んだり、生徒の状況を踏まえて次年度のカリキュラムをつくられたり、授業の中でPDCAを回していく文化、風土をつくられてきているのではないかな。
- ・ その構築プロセスに価値がある。また、グランドデザインが必要だと自覚するようになったと言われていた。目標を維持して、それを達成するための手立てまで落とし込んで動くのは、なかなか難しい。グランドデザインの必要性を感じられている時点で、常に教育目標を大事にしながら、日常に落とし込んでいくことができているのではないかな。

(樋田委員)

- ・ あるものを活用してここまで来られたところが素晴らしい。
- ・ 地域との協働の方に焦点を当てて話をすると、津波の話があり、諦めムードから取り組むようになったと、地域自体が一生懸命頑張ろうとしている。生徒も成長、先生も成長、地域も成長。どのようにその視点を持てるのか。
- ・ コンソーシアムの継続性は、県の予算化だけが持続可能性ではなく、地域と学校が今一緒に成長しているんだと言う視点を持てるかどうか。どういう経緯があって、どのように一緒に成長できるようになったのか。

(回答) ※時間の都合上、後日メールで回答

この事業の指定を受ける前から、防災教育の面で地域や外部人材との連携を活発に行ってきました。以降、防災活動にとどまらず「総合的な探究の時間」はじめ、教育活動への多くの支援をいただけるようになっていきます。

本校は社会に軸を置いた教育活動の実践を目指していますので、このような連携は生徒育成にとって必要不可欠です。また、本校は少子高齢化が進行する黒潮町の唯一の高等学校であるために、その存続は地域の活性化にも大きく影響します。そういった意味で互いに必要な存在として、有用な関係性が保たれているのではないかと思います。

②福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校【グローバル型】

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230310-mxt_koukou02-000027776_12.pdf

<発表内容>

- ・ 東日本大震災後に、新設された学校で現在8年目である。原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバルリーダーの育成を目指している。
- ・ 地域課題解決のための「未来創造探究」を3年間で8単位行なっており、これをコアカリキュラムとしている。成果は、中高6年間で連動した探究カリキュラムの開発を行ったこと。地域連携事業で、双葉郡8町村全てで、生徒との探究の活動を行うことができたこと。大学やNPOとの協働が進み、大学の先生、大学生、高校生、地域の方との学びあいが生まれていること。NPOとの協働が進み、カリキュラムを共に作る体制ができていること。グローバル型の3年間はコロナの3年間でもあったが、オンラインツアーや国内での代替研修、また国内の留学生を双葉郡に招き案内するツアーを実施し、今年度は、実際に海外での研修を実施していること。探究フェイズに応じた教員の関わり方モデルの構築ができたことである。
- ・ 教員の関わり方として、インストラクターで現状を正しく捉えさせ、ファシリテーターで問いを立てて引き出し、メンターで応援、勇気づけをする。これに加えて、ジェネレーターという自らも関わり発見を行うことも大事だとわかった。役割と関わり方を言語化することが出来た。
- ・ 次年度以降の活動方針として、探究をさらに高度化するために学問領域との接続を行いたい。

<質疑応答・講評>

(質問)

探究の深度がそれぞれ生徒やグループに変わる場合は、学年を超えてメンターなどの役割は関わるのか？いかに対応してきているのか？

(回答)

個人探究ではなくて、グループ探究もある。1年の探究と2年の探究は6つのゼミで運用しており、それぞれ、基本は学年単位で動いているが、先輩が探究進んでいるので、後輩を連れて活動して、と言う形もある。教員だけがメンターをするのではなく、コーディネーターや、生徒自身や、卒業生がメンターとしての役割を果たしてくれていると言うのがいい部分であるかと思っている。

(質問)

かなり広域での活動とお見受けする。移動時間や方法等、工夫されたことは？

(回答)

8町村は遠いので、毎回行けるということではない。探究の時間内で解決することはあまりなくて、打ち合わせは学校へ来てもらったりするが、地域のイベントは土日を使って、生徒が行ったりするので、8町村の連携では、校外学習の面がかなり強い。ただ、打ち合わせで移動することもあるので、

探究の時間内の場合は、戻って来られない場合は、届けを出してもらって、この時間だったら行ってもいいよ、と言うことは割とやりやすくしている。

(質問)

ティーチング、コーチング、コーディネーター、ジェネレーター、メンター、オンラインでのサポーターでできるとするとどれが、相性がいいと思いますか？

(回答)

基本的にオンラインでできることは沢山あるが、例えば、メンター的な役割で、励ましを受けることは知らない人からはあまりない。普段ある程度は対面であって、空いたタイミングでオンラインなど、そういう使い方はできると思う。個人的には、メンターとファシリテーター、話を聞くなかで問いを引き出す、と言うことはオンラインでも十分に可能かと考えている。

(質問)

教員の役割をアップデートしていかれた過程が大切だと感じる。具体的に、どのような課題感が「ジェネレーター」という役割の必要性を生み出したのか。

(回答) ※時間の都合上、後日メールで回答

最初我々が想定していた「インストラクター」「ファシリテーター」「メンター」のモデルで 仮説を立てていましたが、「探究の達人」(うまく生徒の探究に火をつけた教員)を分析する中で、どの関わり方でもないことがわかりました。原動力となったのは、「この生徒たちの力があれば、もっと探究を伸ばせるのではないか」という気持ちでした。教員も、一プロジェクト参加者として生徒とともに行動し、教員自身が面白がって生徒と一緒に取り組んだプロジェクトを分析する中で「これがジェネレーターとしての役割だね」と納得しながらその役割の必要性について確認をしました。

<質疑応答・講評>

(岡本委員)

- ・ 学校の強みは学校ができて日が浅いことであり、そもそもどういう目的で作られたかを明確に共有できているのが大きな強みである。気になったのは大人の想いが強くて、子供がその中で生きないといけない部分があるかと思う。多感な時期で興味が分散した時に、ああここではできないと、ならないように注意が必要である。目標が具体的であるがために。全員が地域の研究をする必要はないと思う。自分の関心があるときにそれを地域でサポートしていくという考え方をするのが大事。多くの学校で、地域との連携は、地域としないといけないのだと、生徒の主体性を間接的に奪ってしまう。けども、学校としてはそういうスローガンがあった方がいい。ここはバランスが難しい。
- ・ 手法は本当に参考になる。生徒の主体性が出てきたところの体制、大学との連携など。文科省事業だからやるというのではなく、生徒がこれやりたいから、やるんだという部分も持つておくと伸び伸びとできるのではないか。

③秋田県立金足農業高等学校【プロフェッショナル型】

<発表資料>

https://www.mext.go.jp/content/20230310-mxt_koukou02-000027776_13.pdf

<発表内容>

- ・ 本事業の採択前に達成したい状況から逆算して、論理的なモデルを構築した。コンソーシアムは8組織で構築しており、秋田県立大学とは連携協力協定を結び、連携を行なっている。
- ・ 1年次は、地域理解を進め、2年次は、学校設定科目「地域創生論」で地域課題発見をし、さまざまな関係科目でその解決を図る。3年生では、学校設定科目「社会起業家実践」や「課題研究」を通して、地域と社会を捉えることをカリキュラムマネジメントの中心の課題に据えている。2年次の学校設定科目「地域創生論」は、地域創生について、専門家からのオムニバス

形式の授業で学ぶ。そうした理解の土台の上で、課題研究を3年次に実施する。3年間の事業では、年々増加し、参加生徒の延人数も2392名となり、多くの生徒が本事業に参画した。

- ・ 本事業による3年間の変容を見ると、自分には良いところがあると思う（10%アップ）、自分自身に満足している（27%アップ）、地域の担い手として政策決定に関わりたい（34%アップ）、私に関わることで社会を変えられるかもしれない（42%アップ）、将来自分の住んでいる地域に役立ちたい（22%アップ）、将来自分の住んでいる地域で働きたい（25%アップ）であった。
- ・ 評価とは、内発的発展を促す外発的動機付けである。心から湧き上がる地域への想いや自己肯定感が養われているか。
- ・ 生徒の変化として、地域に対する価値観の変化、郷土愛・幸福感の醸成・再確認、地域産業への理解、自己肯定感や自己の存在意義がある。就職希望者の中で、学科と関連する産業に就職した生徒が50パーセントを超えている。
- ・ 本事業を通じて、生徒の目標とする進路実現に貢献した。地域産業を知ることは、地域に定住し、地域を支える人材として不可欠な要素であり、進路活動としても有意な取り組みであると考えられる。
- ・ 教員の変化として、地域に対する価値観が変わり、地域と共に学ぶ姿勢に加え、足元に教材があることがわかった。
- ・ コンソーシアム構築によって組織と組織の連携が生まれ、両者のノウハウが共有化された。生徒のキャリア形成にも寄与している。
- ・ 課題は、連絡調整や意思決定に時間がかかることや、連絡が学校から投げかけの一方通行になりがちであることが挙げられる。また、ワークライフバランスの関係では課題は残る。
- ・ 生徒の幸福感や充実度は高い次元で感じられている。極めて有意義な3年間であった。次年度以降も、この経験を活かしていく。

<質疑応答>

(質問)

教員の変容のところで、「地域に対する価値観が変化した」とありましたが、具体的にどのような変化があったか？

(回答)

当初はさまざまな研修計画を立てていたが、コロナ禍による変更を余儀なくされた。本来であれば、もう少しダイナミックな動きを考えていたが、できなかった。一方で、地域を見つめ直す、地域を改めて知ると言うところが深く勉強できた。私を含めて、先生方は地域のことを知っていそうで、知らない部分がある。例えば、地域に世界に通じる企業があることなど、そういった部分で地域の産業を知る、企業を知るという所で教員も大変勉強になった。

<質疑応答・講評>

(廣田委員)

- ・ とてもワクワクするお話だった。2点コメントさせて頂く。
- ・ 自らの参加で社会を変えられるかもしれないという意識が非常に高まっている。私に関わることで社会を変えられる、これが42%上がっているのは、素晴らしい成果。なぜこのデータが上がったのか。やはり教員の方の意識の変化、地域の方の意識の変化があるのではないか。先生方と地域の大人が、そもそも自分たちで社会を変えられると思っていることこそが重要。社会が変えられると思っていない大人の中で、生徒さんたちが社会を変えられると思うはずがない。だとすると、ここの部分が非常に大きく寄与したのではないか。この課題は生徒だけの問題にしないこと。生徒や教育を変えるのではなく、私たち自身が社会を変える一翼を担っているという意識をどうやって大人に醸成していくのか、すごく参考になる。

- もう1点。目指す生徒像は、人口減少に対応しつつ、農業関連産業を変革できる人材を育成すること。これは高校だけで終わらないこと。そのためのコンソーシアムでもあると思うし、高校にとってどうなのか、と言うこともあり、大学がどうカリキュラムを考えていくか、地域の企業が、自分たちの人材育成を、これを受けてどう変えていくか。変化は高校だけに留まらないはず。さらに飛躍して取組を進めてもらえたらと思う。

(篠原委員)

- 専門学科高校として、地域のこれからの産業の担い手、振興と言うことを含めた役割の大きさという観点からも、この取組の重要性が際立っていた。少子化、過疎化の影響から、専門学科高校の学校経営、カリキュラム・教育課程の維持はどこもご苦労が多い。
- その中で先生方が足元の地域に教材があるということへの気づきであったり、学校だけでなく、専門職業人として技能を含めた育成を考えるという意味でも、資源の活用や広がりというのが、地域との協働やコンソーシアムとの連携の中で、実現をしてこられているというところが、具体的に生徒の成長・変容にしっかり現れている。ぜひ全国に向けても専門学科高校をさらに活性化させていく意味合いでも、成果発表を進めて頂きたいし、核となる先生たちに、校内だけでやらなくていいんだというところで、課題研究を含めた教育課程の様々な広がり、可能性の部分を他校の先生たちにも広めて頂きたい。

(藤岡委員)

- 成果に感動している。今回、なぜこの成果が出たのかという観点でお話させて頂くと、一つはマネジメント、学校経営の成果だと思う。その要素として、ロジックモデルを作られていて、評価や活動を、言語化し、共有しているというのはとても大きい。評価についても定義されていて、カリキュラムマネジメントに入れられていると。
- 私の専門は組織戦略だが、組織というのは企業でも学校でもうまく回るためには2つの条件がある。目的の一致と、情報の共有、この2つである。うまくいかない組織は、目的が不一致で、情報の非対称性があって、誰が情報を持って、誰が情報を持っていないという差異が大きい。このような組織では話し合いもチームワークもうまくいかないと言われている。ロジックモデル、かなりやられたのではないか。それが、マネジメントが結果的には教員の意識改革、意識変化につながったのではないか。
- 地域との協働は、地域との協働することが目的になりがちだが、その奥にある本当の目的は何なのか。地域との協働は、手段である。その手段の奥にあるものは何か、目的を明確にされた。そして地域と協働をなぜやるのかと聞くと、大体オリジナリティのない答えが返ってくる場合が多いのだが、そこをGKH含めて、目的を明確にされていた。手段の目的化を回避してマネジメントが機能した。そういう結果が出たのではないか。
- おそらくこれから、こういうマネジメントで悩まれる学校が多いと思うので、ぜひそのモデルになって頂きたいと思うし、我々も探究させて頂きたい。

7-2-4 参加者アンケートの結果

アンケート回答数：49件

参加者の属性：

管理機関 14名

コンソーシアム関係者 0名

学校関係者（事業指定校）15名

学校関係者（事業特例校、アソシエイト校）13名

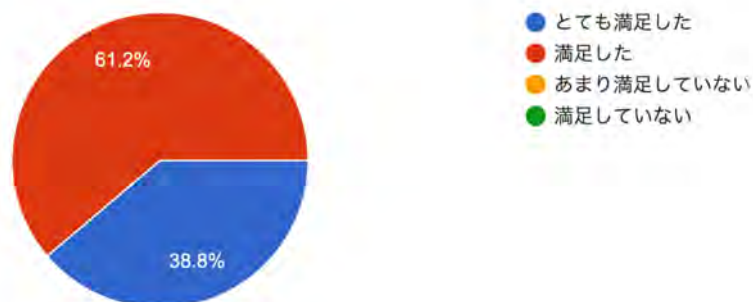
その他 7名



満足度：

とても満足した 19名 (38.8%)

満足した 30名 (61.2%)



○ 満足度の理由

<事例発表が参考になった>35件

- ・ 実践校の取組を聞きながら、本校の現状や課題の振り返りができた。
- ・ 指定校の3年間の成果と課題を共有できたこと。
- ・ 前回発表を聞いた学校ばかりでしたが、前回の発表よりも発表が洗練されていた。
- ・ 発表された学校の熱意とご苦労に共感しました。
- ・ 本事業を通じた学校の取組について詳しく知ることができ、また、運営指導委員の方々から助言をいただいたり、成果検証の結果を拝見したりすることで、今後、学校の取組を支援する際の参考となりました。ありがとうございました。

- ・ 多くの学校の研究発表を聞くことにより、「課題感」の共有ができました。また、学校としての取り組みに対する教育委員会としての役割（伴走・運用のための資金面のフォロー等）が明確になったと感じました。
- ・ 普通校と農業校それぞれの取り組みや成果・課題を知ることができ、勉強になった。
- ・ 運営指導委員の方のコメントが、大変わかりやすかった。 等

<成果検証が参考になった>8件

- ・ 各校の事例だけでなく魅力化事業を効果的に進める組織づくりやヒントを持ち帰ることができたため
- ・ 事例や分析結果で他校や全体の傾向を知ることができた
- ・ 検証結果の報告も今後の事業継続の参考になることがたくさんありました。
- ・ 各校の取組が分かるとともに、最終報告書により全体の傾向を知ることができたため
- ・ インタビュー等により現場（学校）側の声を吸い上げ、文科省や委員会へその声を届ける役割をいただいたことに感謝いたします。今回の調査結果からさらにこの「地域協働」の取組が前進することを期待しています。
- ・ 成果検証結果で、結果の分析が細くなくされており、本校との共通点なども見つけることができたため。 等

<要望、期待>3件

- ・ 成果検証の報告をもっと聞きたかった。
- ・ 時間が少し足りないと感じました。
- ・ 成果の検証では実践ノウハウを最終報告書で示して戴けるということで、楽しみです。

○ 報告会を通して、得た学びや、参考になった点

<校内体制づくり>19件

- ・ 関わる方々との目的を一致させ、情報の共有化を常に意識する必要があるということが、共感するところでした。
- ・ 教員の関わり方が整理できた。組織を上手く回るために目的一致、情報共有が大切ということを再認識した。
- ・ カリキュラムや各授業の内容だけでなく、組織づくりという視点が重要だと感じた。途中藤岡さんが仰っていた「目的・目標の共通理解と情報の共有」というところは今後心がけたいと思った。
- ・ 学校における取組の成否はしっかりとしたマネジメントによる目的の一致と情報の共有とにかかっていること。また、生徒の成長を適切に評価して見取ることが、地域との協働による探究的な学びの推進の必要性に対する教員間の理解が深まる方策となること。
- ・ ツールや人材をどのように活用し活かしていくかが整理され、より進めやすくなった学科が多くなったのではないかと。
- ・ 実施する中で、課題が見えてくるので、その課題を協働していかに解決するかということが、どこでも同じように起こっていることを再確認できた。
- ・ 学校の取組を進めていくうえで、その学校の教育目標、グランドデザインをいかに教職員で共有しているかが鍵であることがわかりました。
- ・ 発表した学校は、目指すべき方向性をしっかり共有できていた。
- ・ 学校がまずはどういった生徒を育てたいかをベースにこの事業と関連させることの必要性
- ・ 学校として課題を明らかにすることは、その学校の活動がうまくいってないと思われるが、課題が明確であり、現状が把握され、理想に向けて活動している学校の方がよいということがとても印象に残った。
- ・ 組織の考え方や在り方について担当の先生レベルで苦労している点でもあり、管理職の先生まで共有できる方策を模索したい。
- ・ 各学校に応じた取り組み方が必要だということ学びました。
- ・ 教員による指導の方向性のバラツキをどう調整するか。

- ・ 事業などに対する職員の姿勢（意識改革）や役割分担（体制）などが、成果（生徒の学びや成長度）にかなり影響することを再確認させていただいた。 等

<カリキュラムについて>9件

- ・ 運営指導委員のお話をお聞きして、多感な時期である高校生の興味関心を大切にし、この事業が生徒にとって「しなければならないこと」にならないよう進めていくことの重要性を改めて感じた。
- ・ 地域のために課題解決をすることと生徒の進路実現をどう結びつけていくかが今後、課題になってくると思いました。
- ・ グランドデザインやロジックモデル、評価方法など立ち返るものがあることの有用性や広域での活動方法、生徒・教員(学校)・地域が共に学び、成長していけること。
- ・ 目指す姿が明確であったことが参考になりました。
- ・ 事業や取り組みについての具体的な評価方法が参考になった。
- ・ ふたば未来学園：個人探究を前提としていることに感心しました。
- ・ 金足農高：生徒の意識向上を実現していることに驚きを感じた。
- ・ ルーブリックをもとにした回答が酷似していたことで、自校における課題がより明確になった。

<事業終了後の自走の仕組みづくり>5件

- ・ 事業終了後の自走に関して指定校、運営指導委員の先生方から様々な意見が聞けたこと。
- ・ 事業継続のための手立て
- ・ 成果と課題、今後の改善策は、事業終了後の方向性の参考になった。
- ・ 事業終了後の取組継続のために、自治体に予算化を求めていること。
- ・ 地域協働の仕組みをいかにして持続可能な取り組みにするのか。1つの学校だけでは持続出来ず、委員会等の積極的、主体的な協力が必要不可欠であること等、全国の取組が理解できました。

<課題を知れて良かった>5件

- ・ 良い事例ばかりを説明するのではなく、課題についてをしっかりと共有して欲しいという指導が大変良かった。
- ・ 実践した内容だけでなく、今後の課題や問題点なども聞くことで自分事で考えながら聞くことができた。
- ・ 各校の取組だけでなく、それぞれの課題なども参考になりました
- ・ 現在の課題を考えるのが一般的だと思っていましたが、未来の課題という視点は参考になりました。
- ・ 課題となっているところは同じようなところであり、解決へのヒントとなった。

<教育観>3件

- ・ 教員の役割について広い視野を持つことができた。
- ・ ジェネレーター等の新しい視点の情報を得ることができた。
- ・ 教員が生徒に対してどのように関わるかという点について、改めて考え直す機会となりました。

<地域協働の意義や進め方>3件

- ・ 地域との協働による生徒にとっての教育的効果（学習意欲・自己肯定感の向上等）を研究を通して知ることができました。生徒達（教員もそうかもしれませんが）は評価されるものに対し意欲をもつと思います。生徒にとって評価する側である教員の魅力の向上は必須だと確信しました。
- ・ 産官学の連携の重要性
- ・ 地域との関わり方や事業の進め方

<検証結果について>2件

- ・ なかなか数字で検証しづらい内容をわかりやすく分析して下さっていた。探究を追究するほど、教員の負担は増えるという分析は大いに注目しました。探究的学習をすすめるためにも教職員定数への配慮はぜひお願いしたいと思います。
- ・ まなびのみなどの分析がよかった。

<その他>3件

- ・ 他の類型の学校の取り組みを聞いたことは良かった。
- ・ 事業全体についての傾向を知ることができ、大変参考になった。
- ・ 運営指導員の話が大変参考になった。

○ 報告会を通して生まれた疑問点や、さらに知りたいこと：

<組織づくり、働き方改革について>8件

- ・ 教員集団の意識改革をどのようにしていくか
- ・ 教員の業務削減のためにできることは何かを改めて考える必要があると思いました。人員を増やすことが一番早いとは思いますが、予算上、どうしても増やせない場合に、どのように学校では対処していけばいいのかが問題になるかと思えます。そのため、好事例があると大変ありがたいです。
- ・ 多様な学びを推進することで生じる学校、教員の負担増をどう解消するか。
- ・ 学びのフィールドを地域や他校との連携に広げていく上で、いかに教員の業務や負担感の増加につながらないようにしていくか。
- ・ 組織としてのマネジメントと教職員のモチベーション
- ・ 学校と管理機関の協働がうまくいっている事例がききたいです。そのよい協働が生み出されている要因など。
- ・ ありのままを伝え、良い成果だけではなく、失敗事例も伝えると良いという点。
- ・ 担当の教員が異動した場合においても、事業を上手く継続していく工夫について。

<事業終了後の自走の仕組みづくり、財源確保について>8件

- ・ この事業は3年間の事業でしたが、コンソーシアムやコーディネーターがいなくなった学校がどのようになっているのかを知りたいと思う。効果的な指導は浸透するまでに時間がかかるが、費用に見合うだけの評価ができるのかを考える必要があると思われる。
- ・ 事業終了後のコンソーシアムを運営するにあたり、資金面の確保の仕方について見通しのある事例があれば知りたいです。
- ・ 持続可能な資金の獲得方法
- ・ 事業終了後の取り組み方法について
- ・ 学校の管理職や事業担当者、行政の担当者の3者が参加していれば次に繋がりやすい。
- ・ また、自走のための資金調達の方法については今後も勉強していかななくてはと思っています。ロビーイングの重要性も感じる事ができました。
- ・ 地域との協働事業終了後、自走している学校についてもっと知りたいです。
- ・ 学校側からの強い働きかけで次年度予算を得られたところがあったとありましたが、基本的には多くのところで次年度は予算化されていなかったと思えます。事業終了後は予算化されない、しないのが普通かと思えます。

<成果検証について>6件

- ・ 学校の変容を数値化して、客観的に評価したのを知りたかった。事業を実施する前と、実施した後の進学実績や検定合格者、生徒数（入学者数）の増減など。その学校が実績と共に魅力化されているのかについて、数値で評価したものがあればよかった。
- ・ 地域化・魅力化を引き出すための学校が地域のプラットフォーム化になるための手段と方策
- ・ 地域との協働は、教科の枠組みを超えた取り組みが多くなる。外部との関わりが多くなればなるほど、土日や勤務時間外の業務、生徒引率も多くなる。学校の教員定数は教科の持ち時間しか考慮され

ていないため、探究活動を担当する教員の超過勤務は非常に多くなっている。持続可能な取り組みになるよう、国として教員定数の見直しなどの議論はなされていないのでしょうか。

- ・ 成果を踏まえ、文部科学省ご担当者の探究結果（教員の加配、コーディネーターの予算処置、コンソーシアムの有無による予算配分など）を明示していただきたいです。
- ・ 高校魅力化ルーブリックを見たいなと思った。

<カリキュラムについて>4件

- ・ 地域との協働により課題解決を行うことを教科指導をうまく関連付けしている事例についてももっと知りたいと思いました。
- ・ 生徒の自発的な活動にするためには、どのような工夫が必要か。
- ・ 観点別評価の導入もあり、探究的な活動をどう意味づけ、生徒たちの成果をどのように評価し、本人や教育内容にどうフィードバックしていくのかは課題だと感じました。
- ・ 評価の仕方など、これから取り入れていきたいと思えます

<要望>2件

- ・ 今回の報告会を受けて、今後知りたいことや疑問点があった場合、お問い合わせすることは可能か。
- ・ この事業での結果を、委員会や文科省がどのように今後の取組に活かすのか？単に報告で終わらないように期待します。

<その他>2件

- ・ 一人の地域コーディネーターが複数校担当している場合の実践例について
- ・ 多くの学校でコロナ禍の影響を大きく受けられたかと思いますが、一方コロナ禍によって良い影響があった部分もあった。（オンライン会議が進んだなど）。そのあたりを少しお聞きできれば良かったと思いました。

○ その他、本報告会・本事業へのご意見：

<謝辞>16件

- ・ 3年間大変お世話になりました。おかげで本校もいろんなチャレンジができ、カリキュラム開発が進んだように思います。等

<要望>2件

- ・ 探究活動を実効的に行うにあたって、経費的・人的な体制がないと教員の負担が増大してしまうことが、今回の検証からも窺える。コンソーシアムの協力だけで解消されるものではなく、働き方改革と探究活動の充実を両立させていくための国の施策を切望する。
- ・ 本事業の成果報告の継続、今回の報告を受けて、委員会、文科省からの今後の協力体制についての返答をいただけるように働きかけていただければ幸いです。
- ・ 高校魅力化システムなどが一般でも自由に活用でき、分析ができるようになるとありがたい。これから普通科改革が進むなかで、客観的なデータにより生徒の変容が明らかになることで、教員の意識の変容も進むと思われるため。
- ・ 本事業を継続していただき良かったです。

<疑問>1件

- ・ 各学校で設定している目標値の結果の分析と、今回の事業成果分析との差異があるのかどうか気になりました。また、「地域」の定義が不明で、コンソーシアムのことなのか、コンソーシアム役員のことなのか、などがわかりませんでした。

<その他>5件

- コロナ等でこのような会議を対面で行う事ができなかったことを非常に残念に思う。人とのつながりが広がりにくかったと感じた。
- 資質能力の評価ツールとして、IGS社のAIGROWというアセスメントツールがある。等

第8章 事業の意義と残された課題

本事業の分析については、第6章の通りである。本章では、それらを踏まえて本事業の意義と成果、課題について考察する。

8-1 本事業の意義と成果について

本事業は令和元年度56校、令和2年度14校の地域協働推進校が指定されて、地域協働を推進してきた。これまでの事業と異なる点は、コンソーシアムの設置及びコーディネーターの配置が義務付けられたことである。それらを念頭におきながら、成果検証の4つの項目も踏まえて意義と成果について考察する。

8-1-1 事業の意義と成果

コンソーシアム構築によって、**教員の教育観が変容するとともに、生徒の成長を感じ、地域協働の必要性を認識した**ことで、地域との協働が飛躍的に推進されたという担当者が多い。

コンソーシアム構築によって、**地域の意見が学校経営に反映され、生徒が成長するだけでなく、生徒の進路実現まで繋がった。**

コンソーシアム構築は、関わる**地域側の意識の変容まで及び、地域側にとって高校を捉え直す機会となり、高校を核とした町づくりの必要性認識が深まった。**

コーディネーターの配置により、**教員の業務負担が軽減される**とともに、カリキュラム開発や学校内体制、協働体制構築・運営に好影響が確認された。但し、コーディネーターに求められる役割や機能は、学校や地域によって異なる。

専従のコーディネーターは、学校現場にとって重宝されているが、学校との関わり度合いが低いと必要性も認識されていない。

探究活動や地域協働を推進すればするほど、**すべての学校で現場の教員に負担が増えている**。現場では、業務の削減や圧縮等、自治体や県がCN等の人材に対する財源を確保するといった工夫がみられるものの、効果は限定的であるため、**国の制度として、業務の軽減や必要な人員配置**などが待たれる。

8-2 残された課題

①生徒の資質、能力の伸長と効果的なカリキュラム開発の相関性

現状は、高校魅力化ルーブリックにおいて、効果的なカリキュラム開発が1から4までの4段階のうち、下から2番目の2（学校・コンソ両方）の場合、学校内体制も1から3までの4段階のうち、下から2番目の2となっている高校が2校該当している。このことから、新たな仮説として、『効果的なカリキュラム開発は、『カリキュラム内容』の他に『学校内体制』が影響するのではないか』が設定できる。つまり、効果的なカリキュラム開発があまりうまくいっていない学校は、学校内の体制もうまくいっていない可能性がある。効果的なカリキュラム開発と学校内体制がどのような相関関係を有しているのかまでは、本調査において明らかにできなかった。

また、現状は、PDCAサイクルが1から4までの4段階のうち、下から2番目の2（学校・コンソーシアム）の場合、学校内体制が1から4までの4段階のうち、下から2もしくは3である高校が2校該当している。このことから、新たな仮説として、『PDCAサイクルの確立は、学校内体制に影響するのではないか』が設定できる。本調査において、PDCAサイクルの確立が明確に明らかになったとは言い難い。そのPDCAサイクルが回っている学校において、学校内体制との相関関係を有している可能性はあるが、どのような相関関係を有しているかまでは、本調査において明らかにできなかった。

次に、高校魅力化評価システムは、各学校の育てたい生徒像に対しての診断ツールであるため、事業開始前から分析枠組みの設定をして検証する必要がある。各学校の育てたい生徒像と該当する項目の伸び幅を点数化して、カリキュラム内容や学校内体制との相関性を検証する必要がある。本調査は、調査の設計のタイミングが事業終了の翌年度及び事業終了年度となったため、調査の内容がスタート時から限定されていた。

②高校と地域の協働の段階別コンソーシアムの有用性

現状は、高校魅力化ルーブリックにおいて、学校内体制が1から4までの4段階のうち、最高の状態である4の場合、コンソーシアム推進は1から4までの4段階のうち、最高の状態である4である高校が4校該当している。このことから、新たな仮説として、『コンソーシアムの推進（協働体制の運営）は、『学校内体制』が影響するのではないか』が設定できる。この仮説にもとづいて因果関係の検証が待たれる。

また、インタビュー内容で、高校と地域の協働には段階があるという発言が散見された。多様な学校や多様な地域による調査の難しさの他に、地域との協働に段階があるとすれば、コンソーシアムやコーディネーターの役割やあり方がさらに複雑となる。それらについて一体的で大規模な調査が待たれる。

③実践ノウハウ集における各項目の相関性と因果関係の究明

本調査の成果の一つとして、成果検証の項目ごとのルーブリック評価におけるノウハウ実践集をまとめることはできたが、上述の仮説の通り、各項目は現場においては実態的には繋がっていることが想定されるため、それらがどのように作用するのか、出発点はどこなのか、因果関係を明らかにすることが求められる。

参考文献

- ・大谷 尚、「質的研究の考え方 研究方法論からSCATによる分析まで」名古屋大学出版会、2019/4
- ・川喜田 二郎、「発想法 改版 - 創造性開発のために」中公新書、2017/6